

特238

134

昭和四年十月編 (第七輯)

俗語新老子 全

沼津 斯道會 印行



始



會規摘要

- 一 本會ハ漢學ノ智識ヲ獲ルヲ以テ目的トス
  - 二 本會ハ毎月七日、十七日、二十七日午後六時ヨリ講筵ヲ開ク
  - 三 會員ハ之ヲ二種ニ分チ維持會員及ビ正會員トス  
維持會員ハ毎月壹圓正會員ハ毎月參拾錢離出ス
  - 四 本會ニ理事ヲ置キ會務一切ヲ處理ス
  - 五 本會ハ事務所ヲ沼津中學校内ニ置キ會場ハ市内乘運寺ト定ム
- 振替口座 東京四五參參七番沼津中學同窓會  
會場 電話八四四番

前號孔子日常生活正誤

十一頁十五行……諸候……候  
十九頁十一行……牽い上る……牽いて  
廿五頁十四行……在齋……齊  
廿六頁末行……戈……弋  
廿八頁二行……兵之轉……匠  
五十五頁七行……天坊……功

御願

振替口座御利用の節は通信欄に斯道會の會費たることを明記して下さい。

講老子序

禪家唱不立文字。而其偈頌語錄。文字何侈麗也。老子學務自隱無名。而其文章炫耀古今。余常疑之。蓋素指其不可名狀者。以喻於人。非巧其辭不入。故知非辭之巧而理妙。非語之深而道玄。在老子不自知其語辭至此也。八十一章五千餘言。每章寥寥。不過數十字。按韻成語。如銘如詩如謠諺。奧遠冲漠。不可測度。古今學者猶未盡其旨。富哉言也。近世太田晴軒考證尤



勤。明快可喜。余今略據之而講。運以私意。不肯爲字句所縛矣。念方今形而上學大開。人人有與往時之見不同者。故勞半往時。而領意乃倍之。從來講說之餘。語時及之。豫爲今日地。諸君幸冥想參考。以自資焉。若夫辨析失滑稽。出乎不得已。如諒其苦心。則余之知己也。

昭和四年五月 觀海學人 池谷盈進

口上……………御一讀の上本文へ

- 一講話の目的は出来るだけ粉なして老子といふ書は斯んなものであるといふ概念を得させるに止めます故に字句の訓詁及び異本に由る相違など研究に屬する方面は自然省略に従ふことになります
- 一講演の態度はヒドク下司びた言ひ方や又滑稽に涉りますお暑い時分でもあゝるし且は餘り固くなること却つて意が取れなくなる事なども顧慮して殊更さうしてみたので内心は生眞面目です併し如何程力んでも其の玄妙の味は到底嚙んで含める様には私には出来ません又出来るものではありますまい
- 一毎章の語調が同じくないのは日に二三章づゝ書いたのですから其の日其の日の機嫌で色色になつたものそれに精粗も一そろになつて居りません
- 一老子の註は和漢に跨り古今に亘り非常に多い私は他の迂僻な説を見ますよ

りは太田晴軒の「老子全解」がキビ／＼した考證で好きですから之を種に聊新味を加へ私一流の作品に取り出した、めて御覽に入れやうと思ふ首尾よくいつた處で別に御慰みにもなりますまい不出來のものばかりで御愛嬌タツブリ

一國譯文は會員の希望によりて添へる事にしました御承知の通り漢文は讀み手の心持ちで色色に取り扱はれます御意見と相違する個所がありましたなら御直し下さい

一各章に圈點を付けたのは何だか心覺えに付けて置きたい様な氣になつて付けた迄で別に意味はないのです

觀海しるす

## 老子道德經

斯道會に於て 池谷觀海講述

老子を講ずる前に傳記様のものを史記の『老莊申韓列傳』から摘録する。老子は楚の國の苦縣厲郷曲仁里の人。姓は李氏名は耳字は伯陽諡して聃といふ周の守藏室の史をしてゐた今日でいふなら宮内省圖書寮の書記である。孔子周に適き將に禮を老子に問はんとしたら、老子云ふやう。子の言ふ所の者は其の人と骨と皆已に朽ちてしまつて、獨其の言葉が残つてゐるだけだ。且君子は其の時を得れば四頭立の馬車に乗つて明君に事へ、其の時を得なければ身を窶し笠でも被つて其處を立ち去らざるまい。吾之を聞く『良賈ハ深ク藏シテ虚シキガ若クシ、君子ハ盛德アツテ容貌愚ナルガ若シ』と、子の驕氣と多慾と態色と淫志とを去らつしやい。是皆子の身に益なし。吾、子に告ぐる所以は是れだけである孔子去りて弟子に謂つていふやう『鳥ハ吾其ノ能ク飛ブヲ知リ、魚ハ吾其ノ能ク游グヲ知リ、獸ハ吾其ノ能ク走ルヲ知ル。走ル者ニハ以テ網ヲ爲スベク、游グ者ニハ以テ綸ヲ爲スベク。飛ブ者ニハ以テ矰ヲ爲スベシ。龍ニ至ツテハ吾知ル能ハズ、其レ風雲ニ乗ジテ天ニ上ラン。吾今日老子ヲ見ルニ其レ猶龍ノゴトキカ』と。老子道德を修め、其の學は自ら隠れて名なきを務む。周の衰へたるを見途に去つて關に至つた。此の關は散關ともいひ函谷關だともいふ。關令尹喜曰く。子將に隠れんとす押して御願ひするが我が爲めに書を著はせど。是に於て老子書上下篇を著はし道德の意を言ふこと。

五千餘言。其の終る所を知らず云々と敘し、轉じて或は曰く老萊子も亦楚人なり。書十五篇を著はし、道德の用を言ふ孔子と時を同じうすと云ふと稍々疑ひを抱いた様子を仄めかし、更に孔子の死後百二十九年にして史記に『周ノ太史儋秦ノ獻公ヲ見テ曰ク。始メ秦ハ周ト合シテ而シテ離レ、離レテ五百歳ニシテ復タ合ス。合シテ七十歳ニシテ霸王タル者出ヅ』云云とある此の儋が即老子であると或者は云ひ、又或者は左様ではないといひ、世人其の然否を知る者なしと斷じ、最後に『老子ハ隱君子ナリ』で結んである。漢の時司馬遷ほどの人が、老子の存在したことは信するが、太史儋と老萊子との確説を得なかつた事此の如くである。併し老子の子孫は宗・注・宮・假・解と明らかに録せられ、世々老子の學を傳へたことを附記してある。

管子に『虚無無形之ヲ道ト謂ヒ、萬物ヲ化育スル之ヲ徳ト謂フ』と有りて、老子の道德といふ語は世間普通に思惟してゐる道德とは、全く其の意義を異にしてゐるのであるから、本文の其の學は自ら隠れて名なきを務むに合致し、更に老子は隱君子なりの一語が之に呼應して、老子其の人の面影が隱然と立ち見はれて居る。老萊子は自ら是れ老萊子で別人であらう。本文終る所を知らずとあるが、莊子の書に據れば、其の死せし時秦失といふ者が之を弔問した事が見えて居るから、關を出で何處かへ往つてしまつたと云ふは、道教の徒が神仙のやうに思はせる手段の傳説であること言ふ迄もなく、又太上老君は其の徒からしての尊稱だが、唐の高宗に至り、遂に太上玄元皇帝と尊號を上つた。氏名に就いても諸説がある。固より名なきを務むる學だから、自分の氏名の如きも何んでもよかつたのでせう。姓の李は母の姓であつて自分の家の姓ではない。イヤ生れ出で、李樹を指したから、それ

に因みて姓としたのだ。イヤ老子は母の胎内に八十一年立て籠り、或日其の母が李樹の下を逍遙してゐると左腋から武智光秀を極め込んだなど、そろ／＼神仙家の面白い傳説になつて来る。老子と云ふのは尊稱の様なものでは名ではない。即萬物を孳生し善化濟物遺すことがないといふ意義だとせられてある。又諡して聃と曰ふとあるが、聃といふ字は耳がひしげて輪がない意であるから、老子の特徴として人が呼んだ綽號で、大きな瘤でもあると其の名は云はず『あの瘤』がなぞ呼ぶ様なものだともいふし、又大きく垂れた耳だともいふし、更に耳の穴が三つ明いて居た人だなど怪しい説もあり、何が何やら分らないけれど、何か耳に曰くのあつた事は想像される。其の徒の記する所に據ると、身長八尺八寸、黄色美眉、長耳大目、廣額疎齒、方口厚唇位までは或は實に近いか知らぬが其の餘は略しませう。

關令尹喜是亦一個の隱君子、紫氣が關に浮んだのを望見して、心に真人の至るを知つた。果して青牛に乗つた一偉人が見えた、それ即老子であつた。そこで書を著はさんことを請うた處、老子も其の奇偉の士たるを認めて、爲めに此の五千言の道德經を書き、それから相携へて流沙の西に行つたなど傳説される此の人にも『關令子』と云ふ著書があるといふ。

以上傳記を考へると老子の外にも道德の學を修むる老萊子及び關令尹喜の如き人があつて、さうした思想が世に相應の勢力を有して居つた事を想見するに足る、儒家は堯舜を木偶とするが道家は更に遡つて黄帝に及ぼす。又黄帝より一段古い神農を祖とする自給自足の學派のあつた事孟子に見えて居る而してそれ等の濫觴は前に言つたやうに先づ伏羲時代からと推定されるを以て、學術思想の淵源亦悠

遠なる哉である。

### 第一章

道。可。道。非。常。道。名。可。名。非。常。名。無。名。天。地。之。始。有。名。萬。物。之。母。故。常。無。欲。以。觀。其。妙。常。有。欲。以。觀。其。微。此。兩。者。同。出。而。異。名。同。謂。之。玄。玄。之。又。玄。衆。妙。之。門。

道ノ道ル可キハ常道ニ非ズ名ノ名ヅク可キハ常名ニ非ズ。無名ハ天地ノ始メ有名ハ萬物ノ母ナリ。常無以テ其ノ妙ヲ觀ンコトヲ欲シ常有以テ其ノ微ヲ觀ンコトヲ欲ス。此ノ兩者ハ同ジ出デ、名ヲ異ニス同ジク之ヲ玄ト謂フ玄ノ又玄ナルハ衆妙ノ門ナリ。

此の章は老子學說の根柢を成すもので玄妙深奥を極めて居る。今何等の用意なく唐突に直面するならば、恐らく字句に囚はれてしまつて目をバチクリさせるのみで、其の意を攫まれない内に早くも疲れてしまふであらう。老莊の書を読むには以前御話し申して置いた體・相・用の辨が餘程理解の助けになると思ふ故、老婆心であるが今一度繰り返し、而して後に本文の講話に及ぼします。又從來講話に挾んで本書を講ずる豫備的御話しも致し置いた積りですから、それ等も御参考なされたなら、或は一層明瞭しはせぬかと思はれます。

體。體とは吾吾の視聽を超越したものの、視聽を超越したものが自然に宇宙間に存在して居る。此に

哲學者と宗教家と二様の觀方がある事は既に申し述べた。存在するが事實であるならば、それが何等かの形式に因つて現はる可きものだと推考するは誰でもするであらう。併し推考するとしてもそれが又目に見えるものばかりでない事も豫め承知して置かずばなるまい。老子の學は無を觀するを以て根柢と爲す。其の常道といひ常名といひ無名といひ常無といふもの皆視ることも聽くこともならぬ無である。而して單なる無は認めない。物を生ずるが故に。

參考。佛說一體三寶の佛寶……平等の眞理

### 相。

相とは本體が或形式に由つて現はれたもの。其の有名といひ常有といふ已に是れ相である。普通吾吾が考へてゐる物の道理など、人間界に於ては矢張本體が或形式を取つて現はれたものとせすばなるまい。而して單なる有は認めない。無より出づるが故に。

參考。佛說一體三寶の法寶……差別の眞理

### 用。

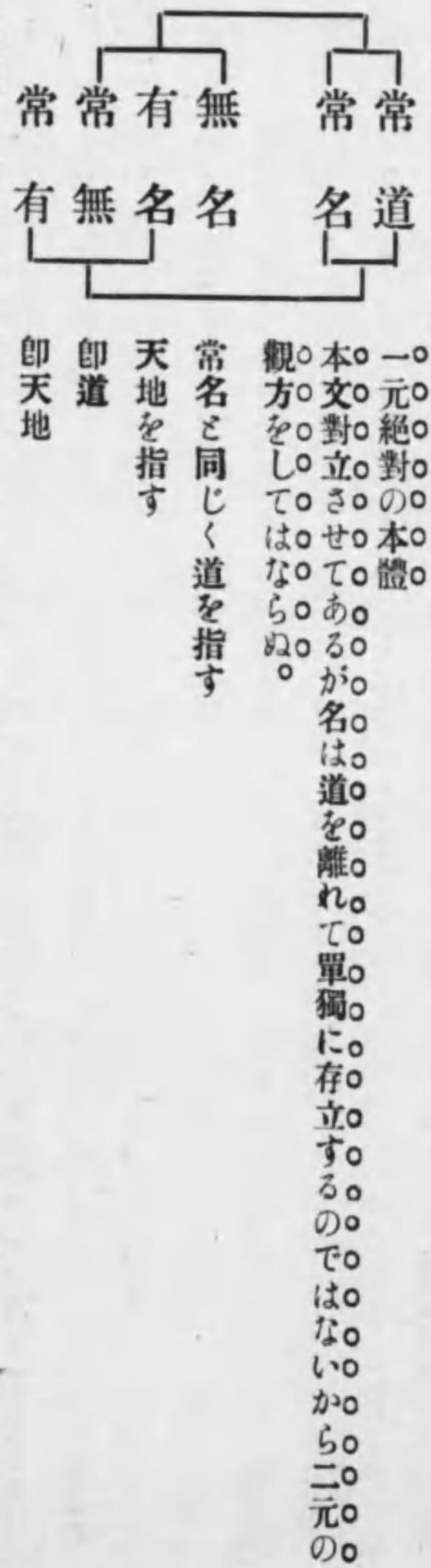
用とは已にさうした相を備へたものがあれば、それに相應した働きを爲す。言ふ迄もなく單なる用は認めない。本體から來るが故に。

參考。佛說一體三寶の僧寶……平等差別圓融說

儒家でも此の語を取り入れて説くが、大抵體・用の二つに止めてあるやうだ。體・用だけでもよいが、三つの方が一段と備つたもの、其の尤も分り易き一例をいへば觀音様である。觀音の功德即用は廣大のものであるが、其の御姿即相は何んなであらうと求めたなら彼の慈顔が直ぐに眼前に浮き出でせうそれから觀音様は有り難いと云つて其の御姿を拜し祈願を掛ける、其處迄が凡夫の常態で、凡夫は

其以上には出ないが思索家は是の境を越えて其の體まで穿鑿するのです。觀世音・觀自在あゝした優しい御顔の人があつたものでせうか。形而上と形而下は屢次申し上げてあるから、此の邊で本文に取り掛る。其の前に第一章の中の名詞六個を抽出します。

第一章中の名詞六個



天地がまだ成らざる始めは渾沌と抱き合つてゐる或物があつた。一旦陽動き陰開くと天地が出来。天地が出来ると道は其の中に身を寄せて生生の功を施し初め、以て萬物を化成する。故に道は最早單獨に存在するのでなく、萬物其自身が道であると立てるのである。道は無なり主宰なり道ノ道ル可キハ常道ニ非ズ。名ノ名ヅク可キハ常名ニ非ズ。老子開卷第一の獅子吼、先天後天此の一句の下に廓然たり坦然たり、孔孟首を低れて默然たり。上の道字は相、中の道字は用、下の常道は體と見る。第二の句の名亦同じ。合して云へば二句共に體の説明になる。之で分らなければ、面壁九年

古今に亘り幽明に通じ、無始無終不増不減不變不易、假りに名づけて常道といへるものがある。常道は普通に世俗で道と名づけられる形式に由りて現はれて居る。それ其處にアリ／＼と相になつて居るではないか。何に私には見えない。困つたものイヤ尤もちや道の亡ぶるや亦久しい哉と來るかな。されど人は何うしても其の道に従ひトボ／＼行かずばなるまい。是非共街道として便らざるを得まい、便るそれが道の用である。それ式の事は儒家を始め世の中の者が説き古してある所、乃公が考へてゐる常道といふものではない。此の緊要事は區別を立て耳の穴を明けて聴いて貰はねばならぬ。道可道は普通に『道ノ道トスキハ』と讀む。それでも悪くはないけれども、太田晴軒が『道ノ道ル可キハ』と訓じたのは極めて分り易い。道をヨルと讀むこと莊子に其の例が多い。一つ擧げてみると『彼之謂不道之道』は不道ノ道と扱つてもよいやうだが『道ラレザルノ道』と讀むのです。道をイフと讀むと此の場合イハレザルノ道とせずばなるまい、如何のものか。老子の道と儒教の道とは違ふ。儒教の道は中庸等にて御話してある通り『道ハ須臾モ離ル可カラズ、離ル可キハ道ニ非ザルナリ』で、日常吾吾が便りて由り従ふ所の人倫五常などの道。而して其の本原は天より出づると立てる、老子の道は其の本原の處を思辨するので、常道の本體たるものが明らかに分るでせう。常とは不易の意、中庸の庸に當り不易は即眞であるから、佛教と共通の思想になる。佛教も本體は不變不易であると認識する上からして同じく眞と名づけ、それに如を添へて眞如とする、夫れ平等の如くにして平等に非ず、差別の如くにして差別に非ず、言語を以て言ひ表はすこと能はざるカネ合ひのものだから假りに如とする。奇妙頂禮。一たび言詮に陥ると面目沒了大千索然たり。唯心眼を以て之を照破するを要す。故に本章下

文にも『常無以テ其ノ妙ヲ觀ンコトヲ欲ス』とある。善哉。次ぎは名の句に入るが、名とは何ぞ。曰く。本體が或形式を取つて此處に現はれたる形象に命する所以。されば名は有形無形を通じて本體の一隅又一片影とせずばなるまい。一片影や一隅やは誰にでも分るが、茲に誰にでも分ることのならぬ換言すれば名づけることの出来ないものがある。しやうがないから假りに常名として置く。世間人は名といふものに局限せられてジタバタして居る。故に名といふ觀念をアタマから取り去つてしまはなければ眞常不易の名が活潑潑地に現はれて來ない『汝ノ心ヲ持テ參レ』常名も常道も共に無であるぞ無が見えれば世界の根本が見えて來る。仁義忠孝等の名目を立て、人に教へる世間の教とは全く趣の變つたもの。而して此の道と名とは各自獨立して存するのではなく、一の本體を指して言つたもの、只説明の方便に假りに立てたのである。名といひ道といふ儒教に在りては八ヶ間しき問題となつて居てアタマにコビリ付いて居る。老子が自家の宇宙觀なり人生觀なりを提唱するに方り、世間に遍く行はれて居る所の思想に就いて言つた方が便利であるから、姑く其の語を用ゐて述べたものだらう。別に名稱を立て、説いたら或はモット簡單にいつたかも知れなかつた』此の句も『名ノ名トスベキハ』と讀むがそれでもよい。

無名ハ天地ノ始メ、有名ハ萬物ノ母ナリ』無名は體有名は相。此の世界がまだ形を成さない前は如何といへば、冥冥漠漠たる虚空中の何物か凝聚して以て形を成すので固より名づけ様もない。けれども自然に凝聚して形を成すとすれば、其處に何等か慥かに働いて居るものがあるを觀る、それを無名と立て、説く。其の無名が世界を形作るから、無名は天地の始めだと言ひ得る。反言すれば天地の始

めは無名である。始の字は無中に有を生ずる意。女扁に台、台は我、我は母より生れる、其の台に肉月を添へると胎、即受胎などの語で思ひ合はすべきだ。已に形が出来上つてみれば、其處に天地と名づけられるものが見えて來る。天成り地平らかにして而して後に萬物が生ずるやうになれば最早名づけられる事が出来るから、有名即天地は萬物の母と言ひ得る。是の説明は科學的の傾向を帯びて老莊哲理のコロモが掛つて居ないからどうやら神祕的な深奥の味がぬけてしまつた。老莊思想化して見て下さい。

常無以テ其ノ妙ヲ觀ンコトヲ欲シ、常有以テ其ノ微ヲ觀ンコトヲ欲ス』此の兩句はやかましい。常無欲・常有欲と共に三字を以て一單語として『常無欲以テ其ノ妙ヲ觀、常有欲以テ其ノ微ヲ觀ル』と扱つたのを、宋の司馬光や王安石は常無と常有と孰れも二字を以て一語と見た。此の方が章意明らかである。常は前にある不易の眞常、無は即道、道は思想上認識すべきもので形狀がある譯ではない本體のものだから、常無は心眼を開いて其の玄妙なることを觀るを要す。已に形象を成したる此の天地は是は常有の眞事實であるに由り相。無形から有形に、無中に有を生ずる境目といはうか秘蘊といはうか要諦といはうか、其處を同じく活眼で照察すべきである。微に諸説があるが焦弱侯の『微ハ讀ンデ邊微ノ微ノ如クス。物ノ盡クル處ヲ言フ』とある。又禮運の『地、陰ヲ乘リテ山川ニ竅ス』を引いて説くのも陰陽哲學として見たならば面白からう。竅はアナといふ字であるから……微も竅も音ケフ此ノ兩者ハ同ジ、出デ、名ヲ異ニシ、同ジク之ヲ玄ト謂フ。玄ノ又玄ナルハ衆妙ノ門』此の兩者とは前の句を承けて道（常無）と天地（常有）を指して云ふ。天地も道も本は一つ穴の狐ヂャ。化けて出



て、人を魅する奇ッ怪な奴。イツソ無ければ斯くも吾吾を迷はせまいに、うるさい。却火洞然大千破壊し了せば嘸ゴセツボからう。常有の天地は常無の道から發生し來つたのだから、出る處の根原は一つの本體であるが、只名が違つてゐるに過ぎない。本體が天地萬物を生生化化する所以の理、思へば玄妙不可思議のもの、何と形容したものか其の言葉の持ち合せがない。姑く玄と云はうか。玄一語では追ひ付かぬ。モ一ッ加へて玄の又玄。其處だ『玄ノ又玄ナル』處が『衆妙ノ門』である。幽深玄遠にして人間の智慮を超越し測度を遠離しては居るが、然も恍惚とイヤ儼然と思想上の顕微鏡に映するでないか。玄は明の反對で幽暗、凡そ深く遠い方は先づ黒いやうに見える故にクロと訓す。この意からして玄化・玄徳・玄通・玄同など孰れも幽深の語に屬する。然らば衆妙とは何であるかといへば、現象界中の萬物は造化の妙用から出來たもの、上は天文下は地理より動植物一切を指す。門は即其の出口である』此ノ兩者ハ同ジク出デ、名ヲ異ニス。又此ノ兩者ハ出ヲ同ジウシテ名ヲ異ニス』など讀む人がある。

以上ザット一通りの解釋は濟んだ。此の哲學觀を人事に向ける、即之を體得した者が聖人、其の聖人の心やら徳やら行ひ等を想望し、更に政治方面及び教育方面に延び亘り、之が根本思想として考察せざるまゝ、がそんな風に尾緒を付けることでも面倒になる。先づ大意は『無から有を生じ有から萬物が生ずる』と立てたのである。支那と印度、餘り年代が違はぬのに略々似通つた思想の發生したこと、思へば妙なものである。此は今緊要でもないが、文章に韻が踏んである事だ。斯ういふ哲理思想を有韻の文字で發表する、何等の手腕であらう驚くの外はない。けれども是は老子に限つたことでは

なく、古代の人は往往同じ遣り方をして居る。彼の銘の如く又詩乃至謠諺等皆有韻の文字であり、更に印度古代の哲人亦さうであるのを併せ考へると、一種異様の感が起つて來て何か論述してみたくもなる……是で第一章は終ります。

第二章

天下皆知美之爲美。斯惡已。皆知善之爲善。斯不善已。故有無相生。難易相成。長短相形。高下相傾。音聲相和。前後相隨。是以聖人處無爲之事。行不言之教。萬物作焉而不辭。生而不有。爲而不恃。功成而不居。夫惟不居。是以不去。

天下皆美ノ美タルヲ知レバ斯レ惡己皆善ノ善タルヲ知レバ斯レ不善己。故ニ有無相生シ難易相成シ長短相形シ高下相傾キ音聲相和シ前後相隨フ。是ヲ以テ聖人ハ無爲ノ事ニ處リ不言ノ教ヲ行フ。萬物作リテ而シテ辭セズ生ジテ有セズ爲シテ恃マズ功成リテ居ラズ。夫レ惟居ラズ是ヲ以テ去ラズ。美惡善不善、難易長短、高下音聲前後、さても差別の諸相厄介なもの、透過せよ、根本の始めに反つて見るがよい。無に反つて觀するがよい。囚はれた美乃至善、今儒家などで名目を付けてヤレ仁義ヤレ忠孝ヤレ禮樂刑政と騒ぎ廻はり、天下一般の者も皆それを美のもの善のものとして信じて居るが、若しも仁義忠孝等の假面を被つて民人を欺瞞する者が出たら何うだ。一般の者に具眼は望まれぬから、十

人が十人迄其の欺瞞の手に乗せられてしまふだらう。仁義忠孝其物が悪いぢやないが、さういふ名目を立て、人に強ふると、それを利用して欺瞞が行はれて来るものぢや。欺瞞の禮樂刑政、美でもなければ善でもない、極言するなら是れ惡ぢや不善ぢや。寧ろ仁義忠孝の名がなくて仁義忠孝の實が行はれて居るやうにしたい、偽善ぢやいかぬ。凡そ世相は相對的に成立して居るものと觀せられる。即有は無から生じたもの、難は易から出たもの、長短それ〴〵に其の形を成し、高下それ〴〵に其の傾向を現はし、聲があれば音が和し、前があれば後から附き隨ふ者があり、底があれば蓋があり、悉皆の物事自己單獨でもつて孤立するものはないから一面觀では駄目ぢや。故に美醜善惡の問題も影の形に於けるが如く、必ず美には醜善には惡が纏ひ附いて居るものぢや。是の見地からして、聖人たるものは差別を超越して、儒家のやうに世に立ち廻つて心力を勞する事はせず、無爲恬澹の境に心を置き天何をか言はんやされど四時行はれる、此の自然の筆法で遣つてゆくのである。天地の用を見よ。萬物が其の間に雜然と生ずるが、何程多くてもモウ澤山だなど、拒まない斷らない生ずるに任せてある又萬物を斯くも豊富に生じて置きながら、是は己が作つたものだから己の物だなどそんな大きな面はせぬ。又かほどの働きを爲して居ながら、それを心に恃んで鼻に掛けることもせず、又かほどの功を成し遂げたに拘はらず、是れは己の功だと大幅を極め込んで居やしない。居ない者が何んで去ることやはある。居る去る、それは人が名に囚はれた思想からいふので、天地にはそんな考へはない。思へば天地自然の徳大なる哉、正に其の妙用を心とすべきである』斯惡已斯不善已の二語は、私は辭を以て意を害しない様にしたいと思ふ。かゝる語法は反撥するに力強く感せられるもの〇聖人。此の聖人は黃老派の聖人で儒とは違ふ。

## 第三章

不尙賢。使民不爭。不貴難得之貨。使民不爲盜。不見可欲。使心不亂。是以聖人之治。虛其心。實其腹。弱其志。強其骨。常使民無知。無欲。使夫知者不敢爲也。爲無爲。則無不治。

賢ヲ尙バザレバ民ヲシテ爭ハザラシメ得難キノ貨ヲ貴バザレバ民ヲシテ盜ヲ爲サバラシメ欲ス可キヲ見サレバ心ヲシテ亂レザラシム。是ヲ以テ聖人ノ治ハ其ノ心ヲ虛ニシテ其ノ腹ヲ實シ其ノ志ヲ弱ニシテ其ノ骨ヲ強ニシ常ニ民ヲシテ無知無欲ナラシメテ夫ノ知ル者ヲシテ敢テ爲サバラシム。無爲ヲ爲セバ則治ラザル無シ。

無爲自然の妙用を政治上に運用したる章。天下の争は何から起るかと言へば尙賢からであらう。尙は尊ぶ意に解しても分るが、林希逸は矜也と註す。其の意は人人互に自分を偉い者のやうに自分免許で天狗になつて居るから鼻と鼻との衝突が起る。君子は盛徳あつて容貌愚なるが若く、君子は争ふ所なし(論語)ぢや。老子は當時世の中の人がコセ／＼僅かばかりの智慧才覺を恃むのを見て、愚に復つた所の境を要望する。盜賊は何から起るかと言へば、金銀珠玉の如き得がたき貨物を貴び風俗が奢侈になり財用が足らなくなつた餘弊が抑もの始まりであると見る。人には欲望がある。其の欲望を心内

で空想を畫いて居る矢先き、其の實物を見せつけられたら堪るものではない。一時に心が掻き亂されて自制出來ぬのが人情である。是に由つて聖人の治道は『其ノ心ヲ虚ニシ其ノ腹ヲ實シ、其ノ志ヲ弱ニシ其ノ骨ヲ強ニス』となる。心を虚にするとは欲望の起らぬ無欲の境清淨の地。腹を實するとは臍下丹田に氣を充實することだが、さう説くこイヤに道家者流の養生法の味が附くやうにも思ふから、氣力を腹に充たしてあるシツカリした所謂腹の据つた人・腹の出來た人・腹の人位にして置かうか。志氣軟弱の者は法度を畏れて身を謹み、自分の本業たる耕織に専心従事するから、筋肉労働に堪へ得る善良なる農民となり、従つて無病息災で長壽も保てる。民は無知にして置くことだ、無欲のものにして置くことだ。さすれば偶々姦偽の知者があつても、其の奸智を振舞ふ餘地があるまい。法を犯す者もなく訴訟も起らず、民皆一生懸命に各自の仕事にいそしむならば、上に立ちて之を治める者は閑暇無事で、天下は太平であらう。是が無爲の治、垂拱して天下治まるといふもの。生ちい教育を施すと善い智慧は覺えないで悪い智慧が付き、理想ばかりが高くなり欲望ばかりが増長し、身體を働かす事を厭ひ嫌つて其の辭取ることばかり考へ、煩悶の末が御定まりの衰弱した遊民となるに極つてゐる、世話の焼ける事だ。老子の此の語は其の學說から來るのである事勿論だが、併し當時目に映する社會の狀態が、餘りに智巧に陥り私慾に固まつてしまひ、日夜鬭争心に驅られて底止することなきを憂ひ乃救世の教へとして立てたものとも見られる。老子をして我が國の現狀を目撃せしめば其の感果して如何。正に青牛に乗りて流沙の西にでも適かうとするのではあるまいか。孔子でさへ乗桴の嘆があるでないか。經世濟民の士が常に自分の理想の實現せざるに懊惱する亦宜べなる哉○不見可欲の見はシ

メスと讀む。

#### 第四章

道。冲。而。用。之。或。不。盈。淵。兮。似。萬。物。之。宗。挫。其。銳。解。其。紛。和。其。光。同。其。塵。  
湛。兮。似。若。存。吾。不。知。其。誰。之。子。象。帝。之。先。

道ハ冲ニシテ之ヲ用キ或ハ盈タズ淵トシテ萬物ノ宗ニ似タリ。其ノ銳ヲ挫キ其ノ紛ヲ解キ其ノ光ヲ和ラゲ其ノ塵ヲ同ジウス湛トシテ存スルガ若キニ似タリ。吾ハ其ノ誰ノ子ナルヲ知ラズ帝ノ先ニ象レリ。サア六ヶ敷くなつてしまつた。一字一字の解をして居たら眠くならうし、さりとて單刀直入にはナト參り兼ねる。何うしたものだらう『闇の夜に啼かぬ鳥の聲きけば生れぬさきの父ぞ戀しき』吾は誰の子であらう。ソレ何處からか戀しき聲が耳底に聞こゆるでないか。見ざるに視、聞こえざるに聴く。嗚呼生れぬさきの父を戀ひしが『吾』とは誰ぞ。ア、眞君とも名づける心の事であらう。勿論性命の語も含めて……こは是れ父母が生み付けたものでもなく、又天地が與へたものでもなく、誠に以つて冥冥漠漠測り知ることのならぬ中から出たものに相違ない。何しろ心は五方の帝がまだ有らざる以前即、第一章にある天地の始め、主宰力を有する道てふものが、まだ其の功用を開業しない日の無爲の極！其處に似通つて居る事だけは認識し得た。この消息が分ると話しは前へ逆戻し……只今申し上げた道、道は固より形はないものだが、其の功用を現はすべく自然開業の日が出來てくる。愈々

開業の段取りとなるに『冲ニシテ之ヲ用フ』と見られる。冲とは冲虚の義にも説くが、高誘の註の調也が面白い。即陰陽の二氣がまだ分れない前は、其の氣が調和して互に相勝たない所謂混沌一氣、其處に功用を孕んで居てやがて萬物に其の功用を施すことになる。施された功用の迹はといへば萬物の性命是。目で見えぬ道の仕業のこと、何うして萬物に性命を施與するか其の手際の程こそ驚き入つて言葉が出ない。古今に亘り時として生ぜざるなく、日として與へざるなく、而して其の窮まり竭くることがないから『道ハ冲ニシテ之ヲ用ヒ或ハ盈タズ』と言つて置かう。盈たずは即冲虚の意である。さて本體が功用を現はすのだから形容しやうにも形容が出来ない。淵兮と奥深く、見やうにも捉へやうにも何とも致しやうがないものだが、併しそれが萬物の總大本山であるかのやうに冥想せられる。斯く不可思議の中に吾吾の性命が授與されるとしたならば、宜しく之を體して我が心を治めずばならぬ。其の方法如何。曰く『其ノ銳ヲ挫キ其ノ紛ヲ解キ、其ノ光ヲ和ラゲ其ノ塵ヲ同ジウス』これより外に此ぞといふ方はなからう。物は鋭すぎると挫け易い。挫傷し易くては安全は得られまい、イツン其の鋭なる所は取り挫きてしまふことだ。次ぎには心内に起る紛紜限りなき雜念を解除する事だ。紛と銳、何處に道が萬物に施してゆく處に似て居る、似ても似つかぬものでないか。然らば一段の工夫を要する。即イラヒドクテバくしい光を和らげて春の日の柔らかな長閑けさがよいでないか。又智慧者振り權高ぶり、己程の者はないやうな振舞をせず、衆と共に世の塵を無條件に被つて、何の不平も不満も抱かず隠忍して往くことだ。斯く自ら聰明を掩ひ隠して衆愚と共に群を成す其の心を形容したならば、湛兮と深靜澹漠殆ど彼の道が自然に存在してゐるに似て居るでないか、アツ其の心は誰の

子であつたか、いしくも帝の先に象つたものよ！親に肖ぬ子は鬼子といふ。何故肖ぬぞ、帝は我に似よ我に似よと呼び給ふに非ずや。請ふ吾等は其の似我蜂とならん』帝。緯書に蒼は靈威仰、赤は赤熒怒、黃は含樞紐、白は白招拒、黒は汁光紀、是が五方の帝だといふ。陰陽五行の説固より妄誕不經ではあるが、當時かうした思想があつた事は事實であるからさうして置いてよい、どうせ色相上の假説であるから……以上往往滑稽を交へて講じたが、是で要領が得られませうか。

第五章

天。地。不。仁。以。萬。物。爲。芻。狗。聖。人。不。仁。以。百。姓。爲。芻。狗。天。地。之。間。其。猶。橐。籥。乎。虚。而。不。屈。動。而。愈。出。多。言。數。窮。不。如。守。中。

天地ハ仁トセズ萬物ヲ以テ芻狗ト爲ス聖人ハ仁トセズ百姓ヲ以テ芻狗ト爲ス。天地ノ間ハ其レ猶橐籥ノゴトキカ虚ニシテ屈キズ動イテ愈々出ツ。多言ハ數々窮ス中ヲ守ルニ如カズ。芻狗。芻は草、草を束ねて狗の形と爲したもので祭祀の時の飾り物、祭祀中には必要のものだが、祭祀が済めば最早用のないもの故棄て、忘れてしまふ、それが比喩になる。○橐籥はフイゴ。天地の功徳は萬物を生育する。萬物由りて以て繁殖するのであるが、併し天地はそれを自分の功徳だとも仁慈だとも思つて居ない。丁度萬物を見ることが祭祀用の芻狗の様に造るには造つたが造つてしまへば忘れてしまふ。聖人其の意を體し、同じく百姓に慈仁を加へ恩愛を施し生を樂み死を送らせるが、自身はそれ

を仁だとも思つて居ない。矢張百姓の爲めに經營した勞を忘れてしまふ。第二章の『生ジテ有セズ、爲シテ特マズ、功成リテ居ラズ』の意になる。天地はフイゴの様なものヂヤ。天と地との中間はガランドウの空虚、フイゴの中も同じくガランドウであるが一度心棒を動かすと風起りて竭きない、動かせば動かす程風が出る。妙ヂヤないか。考へて見よ。天地の間には萬物が化成される。何者が能く之を化成する、道ヂヤないか。道は固より無形のものなれど、一度其の妙用が働き出すと不變不易に萬物に施される。フイゴの中の風、天地間造化の妙用、無にして而して著明、萬古窮竭することないソコデ一轉語を下して人事の上に及ばし多言の戒となる。人多言なる時は數々それが爲めに窮すること起る。フイゴは用のある時風を出す、用のないのに、ノベツ幕なしと來たら、折角の風も何の効果も奏せぬ徒事に終るであらう。人の言語も言ふべき時に言ひ言はなくて済む場合は口を緘して沈黙を守るべきヂヤ。之が守中といふものぢや』守中。過不及なきが中、其の程よき所即中を守る。口は禍の門の訓戒は多くあるから類推あれ。

第六章

谷神不死。是謂玄牝。玄牝之門。是謂天地根。綿綿若存。用之不動。

谷神死セズ是ヲ玄牝ト謂ヒ玄牝ノ門是ヲ天地ノ根ト謂フ綿綿トシテ存スルガ若シ之ヲ用キテ勤トセズ谷神。谷は矢張ガラソと空虚なもの、空虚の神とは主宰を譬へていふ。此の章は第五章の『虚ニシテ屈キズ、動イテ愈々出ヅ』の旨を補説する。谷神は萬古死滅するものでない、何時迄も生きて居て萬

物を化生して往くから、是は玄牝といつてよい。玄は幽深不測、牝は毛物のメスだから子を産み成すもの、以て物を生ずる比喩とする。玄牝の門は是は天地の根原といつてよい。谷神は視聽を超越した無形の神様だが、萬物の上に綿綿と存在しますのが意識され。萬物即谷神ヂヤ。又一面から云へば其の妙用が廣大無邊であるに拘はらず、骨折りて勤勞せられたとも思へないユツタリとしたものだ。無爲にして化す古聖王の態度之に比すべきであらう』第一章を顧みたらよからう。

第七章

天長地久。天地所以能長且久者。以其不自生。故能長生。是以聖人後其身。而身先。外其身。而身存。非以無私邪。故能成其私。

天ハ長ク地ハ久シ天地ノ能ク長ク且久シキ所以ハ其ノ自ラ生ゼザルヲ以テ故ニ能ク長生ス。是ヲ以テ聖人ハ其ノ身ヲ後ニシテ而モ身先チ其ノ身ヲ外ニシテ而モ身存ス私ナキヲ以テニ非ズ邪故ニ能ク其ノ私ヲ成ス。

前章の谷神不死の語を承けて、天地の壽命は長久のものだと説く。天地の壽命が長久なる譯は、天地自身は現形となつて生れ出やうとする私欲がないからだと言明は説くが、少し俯に落ちぬ點がある。縦令思想上の天地としても、現在地は現形になつて見えて居るから都合が悪い。因つて余は斯ういふ風に見たら何うかと考へる。即天地は自分から生きやうなどの了簡を持つて居ない。生きる爲めに

は生を營むとか我が身を養ふとか云ふ様な必要からして種種の私欲が起るのだが、今生きやうとも思はなければそんな私欲の起る譯もない。全く生死を超越して自然に一任してあるから長久である。聖人之を體し世に處し事を行ふ遣り口は、自己を没却して他の爲めに奉仕するを念とし、民の上に立つて之を治めるとすれば民の衣食住の事を先にして我が身の事は後廻はしにする、君主が其の身を忘れて日夜心を民事に勞するは一毫の私欲なきもの、民が何で之を見て居られよう、天下を擧げて其の德に悦服して之を推戴し、敢て背畔する者はなからう。苟も然らば結果からいふと身を後にする其の事が身の先だつ所以となり、身を外にする事が身の存する所以となるのだが、是は私心がないからであらうか。其の私のないのが又私を成す事になるのだ。妙なものサ』外其身の外は自分の事は打ち棄て、忘れる意。

第八章

上善若水。水善利萬物而不爭。處衆人所惡。故幾於道矣。居善地。心善淵。與善仁。言善信。政善治。事善能。動善時。夫惟不爭。故無尤矣。

上善ハ水ノ若シ水ハ善ク萬物ヲ利シ而シテ爭ハズ衆人ノ惡ム所ニ處ル故ニ道ニ幾シ。居ハ地ヲ善クシ心ハ淵ヲ善クシ與フルニハ仁ヲ善クシ言ハ信ヲ善クシ政ハ治ヲ善クシ事ハ能ヲ善クシ動クニハ時ヲ善クス。夫レ惟爭ハズ故ニ尤メ無シ。善にも幾通りかあらう。最上善は水の様にもあるか。夫れ水は萬物に利益を與へる。水なければ人獸

草木百穀に至るまで皆枯死してしまふ。それ程利益を與へて居ながら其の功を争はない。のみならず衆人の惡み厭やがるやうな卑汚の場所にも安んじて居る。其の態度が我が道に近い偉い奴ヂヤ。善とは巧みに上手にして遣つて出る意。居の字必ずしも住居を意味せぬ、次ぎの句の心に對して心理状態に見る。居善地とは水で云ふならば落ち付く可き地に巧みに上手に落ち付くといふ意。又心善淵は深く湛へてドンヨリと静かなもの、その様に心を安らかに持つことを上手にして出る。施し與へるにしても報を望まぬ天地の仁の意に叶ふやうに、言語を出すにしても信の意を失はぬやうに、政事を行ふにしても無爲の治を忘れぬやうに事業をするにしても無事に功の成るやうに、運動を起すにしても時機を失はぬやうに孰れも上手に遣ることだ。それにしても我が善に伐るとか能に矜るとか、さういふ人爲の小細工に陥らず道を體して往くべきだ。左すれば尤めはないものである。

第九章

持而盈之。不如其已。揣而銳之。不可長保。金玉滿堂。莫之能守。富貴而驕。自遺其咎。功名遂。身退天之道。

持シテ之ヲ盈タスハ其ノ已ムニ如カズ揣シテ之ヲ銳クスレバ長ク保ツ可カラズ金玉堂ニ滿ツレバ之ヲ能ク守ルコト莫シ富貴ニシテ驕レバ自ラ其ノ咎ヲ遺ス功成リ名遂ゲテ身退クハ天ノ道ナリ。魯の桓公の廟に欵器といつて傾き敬つてゐる面白い器がある。之に水を半分入れると正しく立ち、一

杯にするとヒツクリ返つて水がこぼれてしまふ。前章に水の喻へがあつたから、本章も之を承けて『持シテ之ヲ盈タスハ其ノ已ムニ如カズ』と説く。其の欵器を手で持つて居て水を一杯入れるとせんに、一寸でも手を放せば直ぐにヒツクリ返る。元來欵つべき器を無理に手を掛けて立たせやうとするは徒勞の事だ。寧ろ持ち添へる手を停め水を注がない方が自然ヂヤ。手で持つてゐる……それは到底長く續くものぢやない。長く盈滿を維持することは六ヶ敷い。刃物を鍛へて鋭くすると、一時は役立つが知らぬが直きに刃が毀損して大事な刃物が臺なしになる。是は寧ろ鋭くしない方がよい。鋭くすると長く其の利を保つことが出来ない。兎角小智小才でセコ／＼手を掛けると途方もない結果を來すものヂヤ。金銀珠玉が堂に滿つればのぼせ上つて亂費の末が淪落、守ることの出来ぬが常。富貴にして人に驕ると禍災を遺すが常。欵器に水を一杯入れたやうなもの、ヒツクリ返つた果てが身の滅亡となる故に『功成リ名遂ゲテ身退クハ天ノ道』である。花を咲かせる功が終れば春は未練を残さず去り、實を結ばせる功が終れば秋は躊躇せず去る。所謂四時の序、功を成すものは去る。功名の地に長居は無益稿の財布が軽くなる。范蠡や張良は深く老子の意を悟つた賢者である』揣此處は音ダ捶に通じ鍛へる意になる。

第十章

載營魄抱一能無離乎專氣致柔能如嬰兒乎滌除玄覽能無疵乎愛  
民治國能無爲乎天門開闔能無雌乎明白四達能無知乎生之畜之

生而不有爲而不恃長而不宰是謂玄德。

營魄ヲ載セタリ一ヲ抱イテ能ク離ル、コト無カラシカ氣ヲ專ニシ柔ヲ致シテ能ク嬰兒ノ如クナランカ  
玄覽ヲ滌除シテ能ク疵無カラシカ民ヲ愛シ國ヲ治メテ能ク爲スコト無カラシカ天門開闔能ク雌ト爲ラ  
ンカ明白四達能ク知ルコト無カラシカ。之ヲ生ジ之ヲ畜ヒ生ジテ有セズ爲シテ特マズ長ジテ宰タラズ  
是ヲ玄德ト謂フ。

又むづかしい。載營魄の載せるは藏めること。營魄の營は熒の字の假借であるから熒魄として見る。扱熒は音がケイで感ふ意。魄は魂魄の魄だが此の物尤も外物に感じて感ひ易い性質を持つてゐると古來信せられて居る。デ吾吾はさうした物に感じ感ひ易い心を藏してゐる身であるから、其處をシカと認めて修養としては抱一無離と往かすばなるまい。抱くは猶守るやうな意、一は一氣で吾人が天より受けた性を指す。其の靜かなる性に離れぬやうにするならば、一方の動き感ひ易い熒魄に打ち勝つ事が出来る譯。乎の字を添へて人の注意を喚起する。即ちどうぢやな離れはせぬか油斷大敵火は火事だぞよ。載營魄に就いては太田晴軒非常に骨折つて考證せられた○專氣致柔。氣を專にすることは氣が外に散じてしまはぬ様に、身内に充實するやうに守ること。柔の徳は老子が尤も尊ぶ所赤子は欲情がまだ起らぬから氣が散らなく従つて純なもの。其處を長く失ひたくない。儒書の『大人ハ赤子ノ心ヲ失ハズ』も同じ趣のもの○滌除玄覽。滌は洗滌だから物を洗つて汚れを取り去ること玄覽の覽はミルと讀む字だが鑑の字と同じ扱ひにする。玄鑑は心を指す。心の塵垢を滌除する磁丸の歌『濁りをば朝なく』

に汲みすて、澄ませ心の底の清水を』が丁度よく合ふ。鑑は鏡と同じ意の字、鏡は打ち棄て粗略に扱ふと曇りも掛るし疵瑕も出来る、故に無疵乎と論し戒める。○愛民治國云云の句は無為が主で、垂拱して天下治る無為の處が老子の理想である。○天門開闔。天門は矢張り心を指していふ。玄鑑も心だとすれば何處が違ふ。曰く。一點の曇りなく洞然と明らかなるに玄鑑といひ、種種の念慮の出づるに天門と云つたのである。開は動であり陽であり闔は静であり陰である。即沈黙の言葉のない時が闔、語を發する時が開。第五章に『多言數々窮ス、中ヲ守ルニ如カズ』の句があつて、今矢張りそれを説く、雌は陰に屬して闔の方だから黙、其の黙を守ることが出来るか何うか。○明白四達。聖人の智は天下の事理が明白になつて居る。即前後左右通達せぬ事はないが、併し其の聰明を掩ひ隠して無智(愚)たるが如く遣つて往けるか。○生之畜之云云。天地は萬物を生ずれども、我が有とせず、萬物を畜ふ事を爲せども其の功を待まず、萬物を長せしめるけれども、己れ其の主宰となつて我が統御の下に置かうともせぬ。以上全章を括つて斯る行ひを玄德となすと斷ずる。玄は前にあつた。

第十一章

三十幅共一轂。當其無有車之用。埴埴以爲器。當其無有器之用。鑿戶牖以爲室。當其無有室之用。故有之以爲利。無之以爲用。

三十幅ハ一轂ヲ共ニス其ノ有ルコト無キニ當リテ車ノ用アリ埴ヲ埴チテ以テ器ト爲ス其ノ有ルコト無

キニ當リテ器ノ用アリ戸牖ヲ鑿チテ以テ室ト爲ス其ノ有ルコト無キニ當リテ室ノ用アリ故ニ有ノ以テ利ヲ爲スハ無ノ以テ用ヲ爲セバナリ。

此の章は専ら虚無の妙用を説く。幅は轂に湊まる矢のこと、轂はコシキ。三十本の幅が四方から共に中央の轂に差さつて輪が成り立ち、其の輪がクルクル廻轉して車が走り出す輪が廻轉する所以は軸の差さる穴が轂に明けてあるから其處で廻轉をさせるのだ。されば無有即何にもない空虚の處が車の用を起すのだ黏土を埴ちネヤシて茶碗とか皿など造るが、其の何にもない空虚の處が皿茶碗の用を爲すのだ出入りする戸口や窓を明けて室を造るが其の何にもない空虚の戸牖が室の用を爲すのだ。若し四方が壁で塞つて居たならば其の室は使へない。故に物體即有が世の利便に供せられるのは、何にもない空虚即無が働いて居るからである。是は人身の上に考へを付けずばなるまい。心の體本來虚靈、嗜慾に蔽はれると暗くなる。耳目は心の戸牖ぢやないか。聲色の慾に眩惑されると其の穴が塞がる。穴が塞がったら最早しやうがない此の意は次章に入りて再説してある』埴埴。埴は音セン擊つ即ネヤス埴はネバツチ。○當其無有車之用は無の字で切つて『其ノ無ニ當リテ車ノ用有リ』とも讀む。

第十一章

五色令人目盲。五音令人耳聾。五味令人口爽。馳騁田獵令人心發狂。難得之貨令人行妨。是以聖人爲腹不爲目。故去彼取此。



五色ハ人ノ目ヲシテ盲セシメ五音ハ人ノ耳ヲシテ聾セシメ五味ハ人ノ口ヲシテ爽ハシメ馳騁田獵ハ人ノ心ヲシテ狂ヲ發セシメ得難キノ貨ハ人ノ行ヲシテ妨ゲシム。是ヲ以テ聖人ハ腹ヲ爲シテ目ヲ爲サズ故ニ彼ヲ去リ此ヲ取ル。

五色は青黄赤白黒、五音は宮商角徵羽、五味は、鹹酸甘苦辛。盲といひ聾といふは只其の弊を極言したるもの。爽はタガフ。味の區別が分らなくなる意。外誘の爲めに本心が混亂する絮説に及ばず。聖人は腹とは第三章の『實其腹』第十章の『專氣』等を併せ考へたら明瞭になる筈。爲すとは重んずる又は主とするなどの意で、目の欲する所を重んずると五色の爲めに眩惑される。耳口亦同じ。故に彼とは五色以下の弊を指し、此とは爲腹不爲目を指す。此の章は平易で深意なし。

### 第十三章

寵辱若驚。貴大患若身。何謂寵辱。辱爲下。得之若驚。失之若驚。何謂貴。大患若身。吾所以有大患者。爲吾有身。及吾無身。吾有何患。故貴以身爲天下。則可寄於天下。愛以身爲天下。乃可以託於天下。

寵辱ハ驚ノ若クシ大患ヲ貴ブコト身ノ若クス。何ヲカ寵辱ト謂フ辱ヲ下ト爲ス之ヲ得テハ驚ノ若ク之ヲ失フテモ驚ノ若クシ何ヲカ大患ヲ貴ブコト身ノ若クシト謂フ吾ニ大患アル所以ハ吾ガ身ヲ有トスルガ爲メナリ吾ガ身ヲ無トスルニ及ンデ吾ニ何ノ患ヒカ有ラン。故ニ貴ンデ身ヲ以テ天下ト爲セバ則天下ヲ

寄ス可ク愛シテ身ヲ以テ天下ト爲セバ乃以テ天下ヲ託ス可シ。

此の章『辱爲下』の句諸説一定しない。上下の思想から云へば辱が下であること言ふ迄もないから、老子の語としたら平凡の様にも思はれ、寧ろ『寵爲下』とする本が面白く感ぜられる。私案では、大患に對する對語であるから、寵辱を五分五分の價値に見ないで、緩急の語のやうに一字を遊ばせ、寵の一意に解したら何んなものだらう。普通の人情として寵が理想であること勿論で、辱は決して希望しないから、其の念願たる寵を得ても失つても共に驚の若くなること講じてみたい。併しまア本文の儘にして置く。驚は文字通りでは意義を成さぬ、氣違ひじみた様子になると解するがよい。○大患は比喩此處は上の句の寵を指す寵榮富貴は往往此の身を誤る落とし穴となるもの故、有道者は慕はないが凡俗の輩は無闇に其の大患を貴きものと心得、大切な我が身のやうに思つて居る或は命と釣り替へても苦しくないなど云ふ者があるかも知れぬ。以下之が説明となる。全體寵辱とは何んな事か。凡俗には慈悲忍辱が分らないから辱を非常に嫌つて下のもとの見做し、反對に寵を上のもとのして居り之を得ると驚喜の餘、氣でも狂ひはせぬかと思はれるやうだし、之を失ふものなら驚愕の餘是亦氣が狂ひさうぢや『大患ヲ貴ブコト身ノ若クス』といふのは何んな譯か。それは此の我が身を有のものを見るから厚く養ひたくなる。厚く養ふには富貴貨財が必要となつて来る。是が抑々の心得違ひぢや。今我が身は無のものだと考へたならば何うだ。無たる此の身を厚く養ふでもあるまいから、富貴貨財は其の必要がなくなるだらう。さうしたなら我に何の心配何の禍災が來よう、來る氣遣ひはない、どうも第七章の『聖人ハ其ノ身ヲ外ニシテ而モ身存ス』る消息が分らぬから困る。貴ぶ所愛する所が全く

ア、ベ、コ、ベ、ちや。自分の身は天下の爲めに存して居るのだとするのが、眞の意味の身を貴ぶことになる。斯る人士こそ天下の重き任務を寄託することが出来る。又自分の身は天下の爲めに生きて居るのだとするのが、眞の意味の身を愛することとなる。斯る人士こそ天下の重き任務を委任することが出来る。』貴以身爲天下。この句を貴で句を切らずに『身ヲ以テ天下ヲ爲ムルコトヲ貴ブ』と讀む人もある。

#### 第十四章

視之不見。名曰夷。聽之不聞。名曰希。搏之不得。名曰微。此三者不可致。詰故混。而爲一。其上不皦。其下不昧。繩繩兮不可名。復歸於無物。是謂無狀之狀。無象之象。是謂惚恍。迎之不見其首。隨之不見其後。執古之道。以御今之有。能知古始。是謂道紀。

之ヲ視レドモ見エズ名ヅケテ夷ト曰ヒ之ヲ聽ケドモ聞コエズ名ヅケテ希ト曰ヒ之ヲ搏ヘントスルモ得ズ名ヅケテ微ト曰フ。此ノ三者ハ致詰ス可カラズ故ニ混ジテ一ト爲ル其ノ上皦ラカナラズ其ノ下昧カラズ繩繩トシテ名ヅク可カラズ無物ニ復歸ス是ヲ狀無キノ狀象ナキノ象ト謂フ是ヲ惚恍ト謂フ之ヲ迎フレドモ其ノ首ヲ見ズ之ニ隨ヘドモ其ノ後ヲ見ズ。古ノ道ヲ執リテ以テ今ノ有ヲ御シ能ク古始ヲ知ル是ヲ道紀ト謂フ。

道の形體やら痕迹を冥想するのだから又むづかしい。其の正體を視定めたいと思つても見えない。仕

様がないからマア夷と名づけて置く。せめて聲なりと聞いてみたいと思つても聞こえない。仕方がないからマア希と名づけて置く。今度は手で打つか乃至ソーツと捕へてみたいと思つても何等の手答へがない。據なく微と名づけて置く。今假りに名を付けてみた夷・希・微、この三つは三つぢやないナ。儘に混然と抱き合つて一つになつて居るだらうが、何うしても問ひ詰めることも押し窮めることも出来ない。厄介な代物どうして呉れよう。併シダ。何かしら心眼に映るやうにもあるワイ。ハテ上の方！儼然とハツキリ明白ではないもの、スンミン見えぬとも言へぬ。下の方！昧然と暗いもの、是亦スンミン見えぬとも言へぬ。繩繩と絶え間なく、アレあの様にまき廣がり磅礴と充滿して居るが、名を付けて人々に示す譯にゆかぬ。大方これも煎じ詰めてみたならば、復た本の無一物に歸るのであらうか。斯んな譯だから強いて『狀ナキノ狀、象ナキノ象』とでも云はうか。或は又『それかあらぬか』とも云はうか。御迎へに出ても其の首が見えず、御伴をしたいにも其のお尻が見えず、アタマもなければシツボもない。イヤハヤ得體の分らぬ怪物であるワイ。天地萬物がまだ現はれない前の道即無を以て今出現して居る萬有を統御し、能く古始の眞を知る者、之を道の紀綱と云ふのである。無を以て有を御すとは、易簡を以て繁冗を治めて出る無爲の治も同じ』此の章比喻形容を以て成る。無始無終不増不減不變不易の道を面白く書いたもの○夷。古この夷を易の字に通用す。易簡なり○希。聲音の寂然たる意○搏。音ハク手にて撃つ又捕へる○夷・希・微。萬物が形質を成すの始は一主宰中に包含せられて別つべからず○致詰。致は極める○皦。アキラカ皎に同じ音ケフ○繩繩。連なりて絶えざること○紀綱。ノリ法則○惚恍はソレカアラヌカとは譯すべきでないが、今假りに借用して置く。

第十五章

古之善爲士者、微妙玄通、深不可識。夫惟不可識、故強爲之容。豫兮、若冬涉川、猶兮、若畏四鄰、儼兮、若客、渙兮、若冰之將釋、敦兮、其若樸、曠兮、其若谷、渾兮、其若濁、孰能濁以靜之、徐清、孰能安以久之、徐生、保此道者、不欲盈、夫惟不盈、是以能敝不新成。

古ノ善ク士タル者ハ微妙玄通深ウシテ識ル可カラズ故ニ強イテ之ガ容ヲ爲サン。豫トシテ冬、川ヲ涉ルガ若ク、猶トシテ四鄰ヲ畏ル、ガ若ク儼トシテ客ノ若ク渙トシテ氷ノ將ニ釋ケントスルガ若ク敦トシテ其レ樸ノ若ク曠トシテ其レ谷ノ若ク渾トシテ其レ濁ルガ若シ、孰カ能ク濁シテ以テ之ヲ靜ニシテ徐ニ清マサン孰カ能ク安ンジテ以テ之ヲ久ウシテ徐ニ生ゼン。此ノ道ヲ保ツ者ハ盈ツルヲ欲セズ。夫レ惟盈タズ是ヲ以テ敝ル、ニ能エテ新ニ成サズ。

此の章の形容、士としては餘りに過ぎたる様に見ゆ。傳奕本には士を道に作る。道の形容とするならば如何にも面白い。因りて無形の道を『擬人法』で説いたものとし、聖人と見て置く。古の眞に善く士たる者は、其の器量が微妙玄通で深みが分らない。具體的に言ひ表はせないから、只外面から窺つた所を無理にコヂ付けて形容をしてみやうなら、豫兮とためらひて冬、冷たい川を徒渉りするやうだ。是は聖人世に處するや躁急輕進を爲さず恬然謙退するに喩へる。猶兮と是もためらひて鄰近所に惡者で

も居つて、それに凌犯輕侮でもされはせぬかと用心して、成るべく出ない様に戒慎してゐる。即自分の光りを窺みて世に衒はないに喩へる。儼兮と其の態度が如何にもおごそかなこと賓客の如く。渙兮とサラリとした氣象は氷が釋けるやうに、胸にこだはりが無い。敦兮と輕薄でなく厚いことがまだ削り落さぬ木のやうである。曠兮と心の廣いことが谷のやうで物を容れる雅量が大きい。渾兮と渾沌とまるかれて清だか濁だか區別が付かないやうにもある。以上形容して置いて、扱全體何人が能く斯る曠兮たる谷、渾兮たる濁の地に居て、そして心靜かに徐徐に澄みゆく姿を眺めるぞ。又何人が能く其の心を安んじて急かすあせらす久しきに亘つて、そして徐に其の時の生ずるのを俟つぞ。此の道を保ち守る者は、凡俗のやうな只々望月の缺けたることなきばかりを理想とはせぬ。何事も其の弊に堪へ忍びて新たに物を造り成さうともしない』玄通。玄同と同じ意、和光同塵が玄通の妙用富んで驕らず智ありて愚を侮らぬ類。○豫と猶は合せて猶豫と普通に使用してゐる。許多の考證今目的に非ず。略す。○樸。削り落さぬ自然のまゝの木。○生。地に就いて言ふ。草などが萌え出るやうに物が發動して來る。○能敝。能を耐へる意に見る。ヨクと扱ふと意を成さない。

第十六章

致。虚。極。守。靜。篤。萬。物。竝。作。吾。以。觀。其。復。夫。物。芸。芸。各。歸。其。根。歸。根。曰。靜。靜。曰。復。命。復。命。曰。常。知。常。曰。明。不。知。常。妄。作。凶。知。常。容。容。乃。公。公。乃。王。

王乃天。天乃道。道乃久。沒身不殆。

虚ヲ致スコト極マレバ静ヲ守ルコト篤シ萬物並ビ作リ吾其ノ復ルヲ觀ル。夫レ物ハ芸芸タレドモ各其ノ根ニ歸ル根ニ歸ルヲ静ト曰フ静ナルヲ命ニ復ルト曰フ。命ニ復ルヲ常ト曰フ常ヲ知ルヲ明ト曰フ。常ヲ知ラザレバ安ニ作シテ凶ナリ常ヲ知レバ容ル容レバ乃公ナリ公ナレバ乃王ナリ王ナレバ乃天ナリ天ナレバ乃道ナリ道ナレバ乃久シク身ヲ沒スルマデ殆カラズ。

宇宙の眞理には動靜二面の觀方がある。此の章は其の靜的方面の觀察からして心の修養に向けて教へを立てる『虚ヲ致スコト極レバ静ヲ守ルコト篤シ』虚は虚無の虚で心内に私欲のない清淨無垢の意に見る。心を空虚にすることが至極の境に達するならば、物欲一空、茲に始めて静を體することが出来る。心カモそれが堅固のものである。此の六字が總括りの語で、以下之が説明をして下る。萬物が天地の間に並び生ずる、吾之を眺めて凡べての物は其の本に復ると觀破する。夫れその萬物は芸芸と草木の繁きが如くなれど、花咲き實を結ぶとやがては其の葉は黄ばみ落ち、今迄花葉に注がれた生氣は還元して根に立ち復つてしまふ。其の根に立ち復つた處を静といふ。静とは天の命じた性に立ち復つた事で其處が性本來の面目ぢや。されば命に復つた處を常といふのぢや。常とは即不變不易の體、其の不變不易の常を認知するを明とする。曇らぬ心の鏡が透明ならば、何の私欲の塵垢を着けようぞ。無事長久何の憂ひがあらうぞ。此の常を認知することならぬ者は、私欲に驅られて輕舉妄動するにより、する事爲す事が皆身に禍する凶のものとなる。更に知常の功を反復して説く常を知るならば従つて其

の心が寛やかに衆物を胸の内に疊み込んでしまふ。衆物を包容すれば公平無私であり、公平無私であれば天下悦服して王者たり得る。王者たり得るならば國民仰ぎ尊ぶこと天のやうである。天のやうであれば其の人自身が道その物である。道その物ならば長久のもので、身を終る迄危殆に瀕する氣遣ひはない以上層層歩を進めて説き上り説き下り稍々言辭を弄したかの感じが起らぬでもない大學の『靜ニシテ能ク得』といふに當り『又物本末アリ事終始アリ先後スル所ヲ知レバ則道ニ近シ』といふ其の本を知るといふ思想にも類するが、老莊哲理思想と儒者思想との言ひ方が違ふだけの事だ。

### 第十七章

太上天下知有之。其次親之。譽之。其次畏之。其次侮之。故信不足焉有不信。信猶兮其貴言。功成事遂。百姓皆曰我自然。

太上ハ下之レ有ルヲ知ルノミ其ノ次ギハ之ニ親ミ之ヲ譽ム其ノ次ギハ之ヲ畏レ其ノ次ギハ之ヲ侮ル。故ニ信足ラザレバ信ゼテレザル有リ猶其レ言ヲ貴ブ。功成リ事遂ゲテ百姓皆我レ自ラ然リト曰フ。太上は解する者皆太古の意に見る、それで分るが最上の意に見る吳澄の説も悪くはない。兩方の意を取つたら内容は一層明白になるだらう。太古の時代に方り最上の治と思はれるは、下人民が只自分達の上に王といふ者があるといふ事だけ知つて居て、自分達はそれに治められて居るのやら、何やらサツバリ分らぬ。是が所謂無爲にして治つたもの、彼の『日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。』

帝力于我何有哉』と歌つた。『聖歌』は是の間の消息を善く状したものである。是は最上の時代で、之に次いでこの時代になると、人民が始めて治められて居るに心付く、心付いてみると有りがたい、生命財産名譽が王の功德で完全に保たれるので、之に親み且之を譽める、即其の徳を頌讃する平和の光に満ちた結構な時代、次ぎの時代になると刑政が次第に繁多になり、従つて親む情が薄らいで王を畏れ遠ざかる。又其の次ぎの時代は何となく王を輕蔑する風が吹き初め、時代の遞下するに隨ひ風俗人情大に變遷し、誠信の道が追追缺乏し其の極相互に信じ合ふ美德は愚、上を疑ふやうになり始末におへない國民となり了する。國民が斯くも澆季の風に染み込んでしまつたに拘はらず、之を治める所の者が猶安然と之を救ふ道は建てずに、只言語の末を貴きものゝやうに心得、普通りの形式の號令や教詔でもつて之を治めやうとする、末世の末法、何故太古無爲の治に立ち復ることを爲さぬのだ。彼の功成り事遂げて居なから、それが誰の御蔭であるかと聞く者があれば、何に誰の御蔭だと、變な言をいふものだ。是は俺の力で自然に功が成り事を遂げたに極まつて居る、大さにお世話だ此の分らず屋めと云つた太古最上の治が憧憬される。『猶今の今は衍字だと見る人もある。成程さうかも知れぬ。猶は由にも悠にもなつて居る本がある。』

## 第十八章

大道廢レテ仁義有リ智慧出デ、大偽アリ六親不和有孝慈國家昏亂有忠臣。

大道廢レテ仁義有リ智慧出デ、大偽アリ六親和セズシテ孝慈有リ國家昏亂シテ忠臣有リ。

此の章は上章の意を承けて説く。大道が行はれてある時代は世にいふ仁義も忠孝も自然に行はれてゐて、従つてさういふ名目さへなかつた。處が其の大道が廢れてしまふと、茲に始めて仁義忠孝等の名目を立て、それを立看板に押し立て、世間に呼號するやうになる、仁義は澆季の世を救ふ一つの教へに過ぎない。又學問教育を獎勵して國民の智能を發達させやうとすると、其の學び得た智慧で大詐僞を働く者が出る。六親といつて父母・兄弟・妻子の間柄が兎角圓滿に往かぬ處から孝子慈孫が出る。若し六親和合して居れば孝慈の出る理窟がない。國家が昏亂するからこそ忠臣が出るので、太平であれば出る筈はない。故に一面から見れば美談であるが、一面から云へば大道が滅びた悲哀のものである。當人は稱す可きだが我が道徳觀からいへば天下國家の不祥事である。大道の滅びた國家は實に淺間敷い現象を呈するものであるワイ。

## 第十九章

絶聖棄智民利百倍絶仁棄義民復孝慈絶巧棄利盜賊無有此三者以爲文不足故令有所屬見素抱樸少私寡欲。

聖ヲ絶チ智ヲ棄ツレバ民利百倍シ仁ヲ絶チ義ヲ棄ツレバ民孝慈ニ復リ巧ヲ絶チ利ヲ棄ツレバ盜賊有ルコト無シ。此ノ三者ハ以爲ヘラク文足ラズト故ニ令、屬スル所有リ素ヲ見シ樸ヲ抱キ私ヲ少ウシ欲ヲ寡ウセヨ。

此の章は上章を承けて之が救済策になる。エーツ世俗で今いふ聖智も仁義も巧利もそんなもの皆絶滅さしてしまふがよい、それ等は我が素樸に取つては皆無用の邪魔物であるワ。抑今世俗でいふ聖智は本物でない偽物ぢや、偽物ぢやに由つて長上の地に立ち人民を治めさせると、其の遣り方が皆我が大道に外れて、人民手足を措く所がない。始終コセ／＼して安心が得られない。斯る偽物の聖智を全滅してしまへば、國民は百倍増した利益を得られよう。仁義もさうぢや。四角張つて鹿爪らしく尤もらしい顔付きをして説き廻はるが、要するに賣名の所爲ぢや。賣名の仁義それが何んだ。そんな言をいふから世がむづかしくなるばかり、親子の情は自然のもの、唆かされて孝慈になるものぢやない。醇樸の素質さへ失はなければ、立派に父慈子孝の道が行はれる。であるから賣名の仁義を絶つてしまへば孝慈の本に復るに極まつて居る。人工を加へて目を惑はすやうな器物や、又得がたい金銀貨財、こんな物が月日を逐つて世に出て私欲に満たされた者の目の前に見せ付ける、欲しいと思ふはそんな者共の常情だとすれば、身分も忘れて萬引もせにやなるまい。あれば盜賊の誘因ぢや。寧ろ此の世からあつた物を西の海へでも打ち棄てしまつたなら、盜賊といふ者が種切れにならう。此三者云云十三字、諸説紛紛、今晴軒の考へに従ふと、屬は古時贅と通用したと證を擧げてある。それから文だが、是は質に對する字で論語に『文質彬彬』の語があり、質は生地のもの文はそれに粧飾を加へたもの、ソコデ聖智・仁義・巧利の三者は文質孰れの者かといへば文の方である、文ではあるけれどそれが孰れも末の末のもので本當の意を得たものではない、言はゞホンの粧飾的のもの、又世にいふ玉帛俎豆の如き禮物祭器も、實を云へば交際祭祀等の場合形式に扱はれる迄であつて、眞の禮といふ意義は

最早蟬の脱け殻、されば俗世の禮なるものは到底それを以て天下を治めるには足らぬ。足らぬからこそ種種な教令命令など無用の贅物をクツ付けて補つて往くが、そんな施設は何んにもなるものぢやない。然らば如何にせば可なるぞ。曰く『素ヲ見シ樸ヲ抱キ私ヲ少ウシ欲ヲ寡ウス』る本に立ち復る外はあるまい。此の解は老子の主義で分つてゐるから最早要すまい。只素は丁度美人の素顔で、天成の美は粉飾を假りずして自然の美のものこの比喩と見たらよからう○見は示す。

## 第二十章

絶。學。無。憂。唯。之。與。阿。相。去。幾。何。善。之。與。惡。相。去。何。若。人。之。所。畏。不。可。不。畏。荒。兮。其。未。央。哉。衆。人。熙。熙。如。享。大。牢。如。春。登。臺。我。獨。泊。兮。其。未。兆。若。嬰兒。之。未。孩。乘。乘。兮。若。無。所。歸。衆。人。皆。有。餘。我。獨。若。遺。我。愚。人。之。心。也。哉。沌。沌。兮。俗。人。昭。昭。我。獨。若。昏。俗。人。察。察。我。獨。悶。悶。澹。兮。其。若。海。颺。兮。似。無。所。止。衆。人。皆。有。以。我。獨。頑。且。鄙。我。獨。異。於。人。而。貴。求。食。於。母。

學ヲ絶タバ憂無カラシ。唯ノ阿ト相去ル幾何ゾ善ノ惡ト相去ル何若ゾヤ人ノ畏ル、所ハ畏レザル可カラズ荒トシテ其レ未ダ央キザル哉。衆人ハ熙熙トシテ大牢ヲ享ルガ如ク春、臺ニ登ルガ如シ我ハ獨泊トシテ其レ未ダ兆サルコト嬰兒ノ未ダ孩セザルガ若ク乘乗トシテ歸スル所無キガ若シ衆人ハ皆餘リ

有リ我ハ獨遺ル、ガ若シ我ハ愚人ノ心ナル哉沌沌タリ俗人ハ昭昭タリ我ハ獨昏ナルガ若シ俗人ハ察察タリ我ハ獨悶悶タリ澹トシテ其レ海ノ若ク颺トシテ止マル所無キニ似タリ衆人ハ皆以テスル有リ我ハ獨頑ニシテ且鄙ナリ我ハ獨衆人ニ異ニシテ食ヲ母ニ求ムルヲ貴ブ。

此の章思想頗る錯綜し字句も亦異同がある。屈原が漁父辭何處やら似た所が見える。一喝して曰く『學ヲ絶タバ憂無カラン』と今世俗の學とは何ヂヤ。禮儀三百威儀三千とやらこそくした細工の禮を云ふのか。そんな締め木で人間を束縛するから本來の性が逃げてしまふワ。口と腹何處に一致が見える外貌と中情何處に符合が見える、虚偽の假面を被つた傀儡同士の言語應對、思うても嘔吐を催すヂヤないか。禮文などそんな學問は一切全廢してしまふ事だ、さうすれば憂はない。全體ハイ(唯)といふ返事とハア(阿)といふ返事と何の位違ふものヂヤ、大した相違のものではなからう。それに何ぞや唯は恭敬で善だが阿は大柄で惡だなど、そんなにやかましい問題のものかイ。どうせ口と腹と違ふ俗物の事、それに善だ惡だなど名を立てる、厭ふべきものだが、併し吾も俗間の一人ヂヤ。ハイと返事をしてやれば相手の感情を害せないから、人の畏れる所は矢張畏れずには居られまい。心に和光同塵の妙を存して前途を眺めると、彷彿と盡させぬ思ひがある。言うてみやうか。衆人は熙熙と如何にも樂しげに、此の世に在ること大宰の御馳走に舌打ちして賞味するやうにあるし、又春色駘蕩たる日に樓臺に登つて打ち興するやうにもあるが、我一人之と趣を異にして寂靜なる道德を守り、心内には何等妄念妄想の影さへ差さず、恰も嬰兒がまだ知覺出でず笑ふことすら知らぬ無心の状態で、悲觀的に形容したら失意の窮人が歸るべき家もなく沮喪しきつたやうである。衆人は智慧が有り餘る程ある

かのやうに見受けられるが、我一人は健忘症にでも罹つて氣抜けがしたやうである。ア、我は是れ愚人の心其儘であるワイ。沌沌と無智の有様がサ。俗人は昭昭と一善あればそれを鼻に掛けて世に街ふが、我は昏と光を糴み隠す。俗人は察察と明らかでも聰明人らしく見えるが、我は悶悶と最と暗く愚人のやうである。又澹と心が定つて居ること大海の如く、颺と風が吹いて来るやうに自由自在の處を存する。衆人は何かしら己の小智で小細工をするが、我は頑固で野鄙で逆もそんな眞似は出来ない總じて我は世俗一般の人とは違つて居る。而して只母の乳を求める事を貴ぶのである』此の章も第十六章の如く随分と言ひ盡してある。最後の母は何かと云へば第一章の『有名ハ萬物ノ母』の母がそれで、母の乳即道味を味ふ意。前に嬰兒の語があり且大宰の語があるからそれに呼應させる手段。食は乳をいふ○荒未央。荒は慌で彷彿と明らかでないこと央は盡くと讀む○大宰。牛羊豕揃つた盛饌○兆キザシ。微候○孩は笑ふ○乗乗。是は累累と見る。得意揚揚の色がないこと○遺は遺忘○颺。音リウ風聲○有以。何か作爲する所がある。

### 第二十一章

孔德之容唯道是從。道之爲物唯恍唯惚。惚兮恍。恍其中有象。恍兮惚。其中。有物。窈兮冥兮。其中有精。其精甚眞。其中有信。自古及今。其名不去。以閱衆甫。吾何以知衆甫之然哉。以此。

孔容ノ徳ハ唯道ニ是レ從フ道ノ物タル唯恍唯惚トシテ恍タリ其ノ中ニ象有リ恍トシテ惚タリ其ノ中ニ物有リ窈タリ冥タリ其ノ中ニ精有リ其ノ精甚ダ真ナリ其ノ中ニ信有リ古ヨリ今ニ及ンデ其ノ名去ラズ以テ衆甫ヲ闕ブ。吾何ヲ以テ衆甫ノ然ルヲ知ルヤ此ヲ以テナリ。

全章道を形容するのです。扱も幽深玄遠なる道よ。其の道を體得したる聖者の動容周旋、一に唯道に由り従うて居る。抑、道の物たる目以て視るべからざれど、心眼には恍惚と其の象が認められぬでもない。已に象が認められるとしたならば物があると云へば言へる。又窈冥中に生ツ粹のものが自ら存在して居り、それが古今に亘つて不變不易の眞なる事を知り得る。眞なるが故に晝夜寒暑等が一寸とも天度を違へず必然的に期待することを得る信といふものがある。斯く觀じ去り觀じ來ると、是等物象は必ず根本の母があるべきだ、母あつて後に此の物象が現實に展開されるのだ、物象があればこそ母たる名は失はれず具在してゐて此の象甫を總理して居る。吾に何んで衆甫が母から出たかと問ふ者があるならば、我が心眼がそれを視定めたからである。衆甫は大勢の子供といつた様な語、甫は父と通用、漁父などの父で音ホとなる。闕は諸説の中で高誘の總也が一番能く分る。ソコデ孔徳の孔はアナといふ字、深遠の意に解するのだが、アナから子が生まれる、即深遠玄妙なる母から森羅萬象が生れる。此の章初めに孔徳の語を掲げ、終りに衆甫で結ぶ、陰陽哲理の敘述で不思議はないが文章としても亦妙である。

### 第二十一章

曲則全。枉則直。窪則盈。弊則新。少則得。多則惑。是以聖人抱一爲天下式。不自見。故明。不自是。故彰。不自伐。故有功。不自矜。故長。夫唯不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸之。

曲レバ則全ク枉グレバ則直ク窪メバ則盈チ弊ルレバ則新ニ少ナケレバ則得多ケレバ則惑フ。是ヲ以テ聖人ハ一ヲ抱キテ天下ノ式ト爲ル自ラ見サルガ故ニ明ラカニ自ラ是トセザルガ故ニ彰ハレ自ラ伐ラザルガ故ニ功有リ自ラ矜ラザルガ故ニ長シ。夫レ唯爭ハズ故ニ天下能ク之ト爭フコト無シ。古ノ曲レバ則全シトハ豈虛言ナランヤ誠ニ全ウシテ之ヲ歸サン。又セ。

此の章は曲全の妙を説く。木で一喻を取ると、曲つた木は眞直ぐに伸びた木より用途が狭いから比較的斧斤の害に逢はない。それ故に天を全うすることが出来る。材能を押し隠して自全の計を爲すべきだ。又へし曲げられた者は再び伸びることが出来る。只剛強だと折れ易いが柔靱だと柳に雪折れなしだ。低い處に水溜る。第十五章の『曠タルコト谷ノ若シ』であれば、包容力が大きいから萬物が之に歸する。弊れても我慢して居れば、やがては又新しい物を獲られる。此の一句は單に對偶の語として見る。學問學問といふて智識を多く獲得するに務めるやうだが、徒に多きを務めると却つて惑ひを増すばかりで、結果は少くとも眞實の智識を得たに及ばぬ事になる。以上のやうな譯だから聖人は外慕業を移さず清淨無爲の一徳を抱き守つて、以て天下の矜式となるのである。自己を表はさうくとそれにばかり心を向けないと眞の聰明が保たれ、己を是とせず存養を主とするなら其の徳が益々彰著



になり、己が功を伐らず功を功とも思つて居ぬから大功を成す所以になり、己が能を矜らぬから人から嫉妬されず無事長久の地に居らるゝ所以になる。以上皆謙退して人と物事を争はない。此方から争はないから天下廣しといへど誰も我と争ふ者はあるまい。是れ無事の地、古の所謂『曲則全』といふは豊虚言ならんや。我全を生れぬ先の父母より受けたり、故に性命を全うして全きまゝを之に御返し申すべきである』抱一の語は第十章にある。

## 第二十三章

希言自然。故飄風不終朝。驟雨不終日。孰爲此者。天地。天地尙不能久。而況於人乎。故從事於道者。道者同於道。德者同於德。失者同於失。同於道者。道亦樂得之。同於德者。德亦樂得之。同於失者。失亦樂得之。信不足。有不信。

希言ハ自然ナリ故ニ飄風ハ朝ヲ終ヘズ驟雨ハ日ヲ終ヘズ孰カ此ヲ爲ス者ゾ天地ナリ天地スラ尙久シキコト能ハズ而ルヲ況ヤ人ニ於テヲヤ。故ニ道ニ從事スル者ハ道ハ道ニ同ジウシ徳ハ徳ニ同ジウシ失ハ失ニ同ジウス道ニ同ジウスレバ道モ亦之ヲ得ルヲ樂ミ徳ニ同ジウスレバ徳モ亦之ヲ得ルヲ樂ミ失ニ同ジウスレバ失モ亦之ヲ得ルヲ樂ム信足ラザレバ信ゼラレザル有リ

此の章は處世の工夫を説く。希言の希はマレと讀む字だが第十四章の『之ヲ聽ケドモ聞コエズ名ヅケテ希ト曰フ』の意でよからう。即彼の天何をか言はんやで、黙を守りて事を濟す、それが自然に叶つたものである。見なさい彼の飄風や驟雨を、驚かされるものだから終日終朝吹き續き降り通すものではない。是は誰の仕業だと思ふ、天地ぢやないか。大いなる天地でさへ飄風驟雨はさう長き時間に亘つて遣るものぢやない。サア之を吾吾が音聲を出すに喩へる事だ。五尺ばかりの此の身體、口で世を渡る豆藏ではあるまいし、苟も士人たる者が多言冗舌を材能でもあるかのやうに心得るは、決して自全長久の術ではないのだ。以下は工夫になる。道德に従事しやうと志す者は、相手が有道若くは有徳であるならば、手を携へて其の道其の徳を同しうすべきだが、萬一道又は徳を失つて居る者でも、之に對して遽に其の非を攻める事は控目になし、和光同塵、徐徐に之を感動せしめて善に遷らせる『失ニ同ジウス』といつたつて、自分が其の人とグルになつて失徳行爲を同じうすると解してはいけない、上からの語勢で斯う置いたのである。斯くするならば、相手の道德ある者はよき相手を得たことを樂み、又失徳失道の人もよき助言者を得たことを樂みとするだらう。工夫之にて盡き結語として我が信！信は内心の眞心が言語行爲の上に表はれるもの、内に信なくして徒に言語の末で綾なして往かうとすると信用はされぬものぢや。冒頭の希言自然に照應する』飄風は大風、驟雨は暴雨夕立など○終朝も終日も先づは同じ意。

跋者不立。跨者不行。自見者不明。自是者不彰。自伐者無功。自矜者不長。其在道也。曰餘食贅行。物或惡之。故有道者不處也。

跋者ハ立タズ跨ル者ハ行カズ自ラ見ハス者ハ明ラカナラズ自ラ是トスル者ハ彰ハレズ自ラ伐ル者ハ功無ク自ラ矜ル者ハ長カラズ其ノ道ニ在ルヤ餘食贅行ト曰フ物或ハ之ヲ惡ム故ニ有道者ハ處ラザルナリ。

此の章は矜伐を戒める。跋者跨者が比喩になる。跋はツマダツ。爪先きで立つて脊延びをする、高くしてみたいと思つて爪立てば爪立つ程ヒョロ／＼して終には立つて居れないことになる。跨はマタガル馬に乗つた様な足付きをして進みたいと思つた處で行けるものぢやない。進むにしろ立つにしろ、それに適した態度を執らなければ結果は是の通りだ『自ラ見ハス者ハ明ラカナラズ自ラ是トスル者ハ彰ハレズ自ラ伐ル者ハ功ナク自ラ矜ル者ハ長カラズ』此の四句は第二十二章中の語を反對に言つたもの扱この四通りの者を道徳上から言へば其の功や其の徳は認めるが、それを矜伐する一段になると最早認めない。譬へば、お餘りの飯のやうでもあり、且は無用の疣のやうなものでもある。さういふものは或御方(物)が御嫌ひなさる。故に有道者は矜伐の地には處らぬ『贅行の行は形と見る古字通用、贅形コブ・イボなど其の一例○物或惡之。この物は主宰を指す。』

有物混成。先天地生。寂兮寥兮。獨立而不改。周行而不殆。可以爲天下母。吾不知其名字之曰道。強爲之名曰大。大曰逝。逝曰遠。遠曰反。故道大。天大。地大。王亦大。域中有四大。而王處一焉。人法地。地法天。天法道。道法自然。

物有リ混成シ天地ニ先ダチテ生ズ寂タリ寥タリ獨立シテ改メズ周行シテ殆カラズ以テ天下ノ母爲ル可シ吾其ノ名ヲ知ラズ之ニ字シテ道ト曰ヒ強イテ之ガ名ヲ爲シテ大ト曰フ大ヲ逝ト曰ヒ逝ヲ遠ト曰ヒ遠ヲ反ト曰フ。故ニ道ハ大ナリ天ハ大ナリ地ハ大ナリ王モ亦大ナリ域中ニ四大有リ而シテ王ハ一ニ處ル人ハ地ニ法トリテ地ナリ天ニ法トリテ天ナリ道ニ法トリテ道ナリ法トルハ自然ナリ(此の讀方頗る異なるを見よ)

此の章はむづかしい。自然たる道を形容する處二十章對照。先づ一番やかましい最後の人法地以下の讀方を極めて掛らう。一寸見た處では『人ハ地ニ法リ地ハ天ニ法リ天ハ道ニ法リ道ハ自然ニ法ル』と讀んで差支ない様であるが、さうすると五大となつて四大ではない事になるので、甚だ窮屈の扱ひ方だが『人ハ地ニ法リテ地ナリ、天ニ法リテ天ナリ、道ニ法リテ道ナリ、自然ニ法ル』と讀むべきだと唐の李約といふ人が説を立てた。變な讀み方だが一見識のものだから今其の説に従ふ。而して余は

末句を『法ルハ自然ナリ』と讀んだが、更に善い扱ひではないかと思ふ。サア得體の分らない物があ  
るぞ。それがダ、混沌と目で視耳で聴くことはならぬが、此の天地に先だちて、既に生り生りて成つ  
て居ると冥想はするものゝ、形體もなければ音聲もないのだから、寂たり寥たりで何うにもしやうが  
ない。只六合の間に獨立して何物をも待たず萬古變易することなく、又普遍的に行き渡つて何一つ爲  
し得ぬことなく、萬物之を待つて各々其の形體を成すのであるから、天下の母たるべきものだらうけ  
れど吾其の名を知らぬ、假りに道と呼んで置く。今一つ強いて大と呼ぶことにする。ダウダイ。大で  
あるから逝といへる。逝とは向ふの方へ去ること、去るから遠しといへる。遠く去るならば何處迄行  
つてしまつたものか見當が付かぬ。思ふに是は際限のない遠き處に往つてしまつたものだらうか。イ  
ヤ燈臺本暗し、何時の間にか其の根本へ立ち歸つて居る、偉い藝をする。されば矢張り我が身から離  
れ去つたのでなく、アリ／＼と我が身に具在して居るのヂヤ。我が身に具在して居るものならば、内  
觀して宜しく其の道をシツカリ體して往き、利欲などの爲めに累はされず、心を澹漠の地に置くべき  
だ。此の語頗る禪の『直指人心見性成佛』の説に似たり。何となれば我が心を直視して此の心即道と  
立てるを以てある。道は斯く大、天も大、地も大、而して王も亦大で、此の四大が此の世の中にあ  
つて王は其の一に居る。人は地の靜かにして萬物を載するを法則として我も地たるべく、天の動きて  
萬物を覆ふを法則として我も天たるべく、道を法則として心即道と觀すべく、斯く道・天・地を法則と  
することは自然の道理に叶うた行き方である』不殆。危殆ならずでも通ず○獨立は絶對的○字之。こ  
の字も名も同一に見る○反は復ること第十六章を參看すべし。

第二十六章

重爲輕根。靜爲躁君。是以君子終日行。不離輜重。雖有榮觀。燕處超然。  
如何萬乘之主。而以身輕天下。輕則失根。躁則失君。

重ハ輕ノ根タリ靜ハ躁ノ君タリ。是ヲ以テ君子ハ終日行クモ輜重ヲ離レズ榮觀有リト雖モ燕處超然タ  
リ如何ゾ萬乘ノ主ニシテ身天下ヨリ輕シト以ハン輕ケレバ則根ヲ失ヒ躁シケレバ則君ヲ失フ。  
此の章は王者自ら重んずべきを説くのだが玄妙の處はない。重輕靜躁の比喻から入る。草木でいふな  
らば枝葉は輕で末、根幹は重で本。されば重は輕の根本であらう。人の性行でいふならばワサ／＼落  
ち付かぬは賤むべく、ドッシリ大度やかなのは貴ぶべし。されば靜は躁の君であらう。それであるか  
ら君子は終日巡行するやうな事があつても輜重を離れない。猶是れ比喻で終日行くは輕、輜重は重と  
見る。又何か立派な觀せ物でもあるとせんに、それに心を奪はれて馳せて見に行くやうでは是は躁  
斯る際にも何時もの通り我が部屋に坐して超然たる態度に出るならば靜である。それから王に及ぶ。  
如何んぞ一天萬乘の君たる者が其の身が天下よりも輕しと謂はんや。輕躁だと根たる重と君たる靜と  
を併せて失つてしまふものだ』此の章案外平易○君。主といつたやうな語○以身輕天下の以の字は謂  
の字に通はせて見る○君子。これは王者を指す。

善行無轍迹。善言無瑕謫。善計不用籌策。善閉無關楗。而不可開。善結無繩約。而不可解。是以聖人常善救人。故無棄人。常能救物。故無棄物。是謂襲明。故善人不善人之師。不善人善人之資。不貴其師。不愛其資。雖知大迷。是謂要妙。

善行ハ轍迹無ク善言ハ瑕謫無ク善計ハ籌策ヲ用キズ善ク閉ヅルモノハ關楗無シ而モ開ク可カラズ善ク結ブモノハ繩約無シ而モ解ク可カラズ。是ヲ以テ聖人ハ常ニ善ク人ヲ救フ故ニ棄人無シ常ニ善ク物ヲ救フ故ニ棄物無シ是ヲ襲明ト謂フ。故ニ善人ハ不善人ノ師不善人ハ善人ノ資ナリ其ノ師ヲ貴バズ其ノ資ヲ愛セズンバ知ト雖モ大ナル迷ナリ是ヲ要妙ト謂フ。

眞の善行は自然のもので人の目に付くやうな痕迹があるものでない。眞の善言は完全無缺の玉のやうなもので批の打ち處がない。眞の善計は一々其の數を記する投壺の戲の矢のやうなものでなく、人の氣の付かぬ中に行はれて居る。眞に善く胸三寸の中に固く閉ちてしまへば錠を卸してあるのでないから他から鍵で之を明けやうがない。眞に善く精神的に天下の人心を結合させるなら、繩などで結んだのでないから解きやうもない。是が道の要諦玄妙と謂ふべき處だ。斯る次第であるから聖人は常に善く人を救ひ物を救ふが其の救ふ所以が大きくて目に見えない。目に見えぬけれど棄てられる人がなく

棄てられる物がない。全く大自然その物が聖人であるから是を襲明といふのヂヤ。襲は諸説あるが入也と解するのが善説『明ニ入ル』即自然の明に入るといふ意義になる。故に善人は不善人の師であること言ふ迄もないが、又不善人は善人の資といつて、不善の行爲が救へを施す上に參考資料となるものとしてよい。善不善の關係は面白いもの、されば其の師を貴ばないものは悪いに極つて居るが、其の資料たる所の不善人を愛しないといふのも悪い。如何程智慧ありとも大きな迷つた見解のものである。是謂要妙。この四字が雖知大迷の下に在ると全く意義を成さぬから、ズット前の善結無繩約而不可解の下に置き換へると、善行以下の五者を承けての断定になつて意義が判然すると太田晴軒が發明した○轍迹の轍はワダチ車の迹○瑕謫の謫は瑣と見る矢張瑕と同意玉のキズ○籌策ハカリゴトが普通だが、籌は竹で造つた矢で投壺の戲に矢を一器に投げ入れて數を記すもの○關楗。楗は鍵カギ今の鎖だともある關は門のカンヌキ○資。資料又助け。

## 第二十八章

知其雄守其雌。爲天下。谿爲天下。谿常德不離。復歸于嬰兒。知其白守其黑。爲天下。式爲天下。式常德不忒。復歸于無極。知其榮守其辱。爲天下。谷爲天下。谷常德乃足。復歸于樸。樸散則爲器。聖人用之。則爲官長。故大制不割。

其ノ雄ヲ知リテ其ノ雌ヲ守レバ天下ノ谿ト爲ル天下ノ谿ト爲レバ常德離レズ嬰兒ニ復歸ス其ノ白ヲ知リテ其ノ黒ヲ守レバ天下ノ式ト爲ル天下ノ式ト爲レバ常德忒ハズ無極ニ復歸ス其ノ榮ヲ知リテ其ノ辱ヲ守レバ天下ノ谷ト爲ル天下ノ谷ト爲レバ常德乃足リ樸ニ復歸ス樸散ズレバ則器ト爲ル聖人之ヲ用キレバ則官長ト爲ル故ニ大制ハ割タズ。

雌雄は是れ陰陽、陽は動陰は靜、心に陽動を體して而して陰靜を守る、物欲に驅られず物と争はなければ、天下翕然と之に歸すること丁度衆水が谿に流れ込むやうである。我が身が已に天下の谿たるを得るならば、不變不易の常德が其の身から離れることなく、其の究竟する所は嬰兒の無欲なる心理状態に復歸する、是が自然其の儘の處である。黒白は是れ明暗、明は智暗は愚、心に明智を存して、而して暗愚を守る、その暗愚を守る處が、天下の仰いで以て正を取る楷式模範のものである。我が身が已に天下の式たるを得るならば、常德違はず其の結果は無極即窺ひ知ることならぬ、無物の始めの状态に復歸する。榮と辱、榮光の地を去り屈辱の地に就く、所謂慈悲忍辱の行は天下の谷……我が身已に天下の谷たるを得るならば、常德乃ち足りて樸即ちまだ削り落さない木の如き自然の儘なる本に復歸する。此の削り落さぬ樸は自然の姿の道ヂヤ。然るに其の樸が散つてしまふ。即ち智巧が手傳つてからに色々の器となる。人間の智巧は小さいもので到底百官の上に立つて之を統御する力はない只聖人がそれ等の小智小巧を器物のやうに使用して、且備はることを一人に求めず火鉢は火鉢箆筒は箆筒として扱つて出で、而して散せぬ樸を以て百官の長となるのヂヤ。故に大制不割といつて、無爲自然の造つた大きな制作物は斧斤などのケチな道具で切つたり割つたりして器には作れぬものヂヤ』天下谿の

谿は蹊と通じ天下蹊がよいと云ふ説もある○忒の音はトクでタガフ。

## 第二十九章

將欲取天下而爲之者吾見其不得已。天下神器不可爲也。爲者敗之。執者失之。凡物或行或隨。或嘘或吹。或強或羸。或載或墮。是以聖人去甚去奢去泰。

將ニ天下ヲ取ラント欲シテ之ヲ爲ス者ハ吾其ノ得ザルヲ見ル已天下ハ神器爲ス可カラザルナリ爲ス者ハ之ヲ敗リ執ル者ハ之ヲ失フ。凡ソ物行ク或レバ隨フ或リ嘘スル或レバ吹ク或リ強キ或レバ羸キ或リ載スル或レバ墮ツル或リ。是ヲ以テ聖人ハ甚シキヲ去リ奢ヲ去リ泰ヲ去ル。

此の章は自然に任せて小刀細工を用ゐぬを説く。天下その物を取ると解せず天下の人心を取る、取るとは得ること。天下の人心を得やうとしてこそ、色々な施設をする者は、吾には却つて人心を得られないのが見え透ける。何故ならば天下は神靈な一大器である、其の神靈の一大器に對して、小刀細工で治めやうなど及びもない事。御覽よ。そんなこそ、した施設をする者は、大切な神器を無茶苦茶にしてしまふし、又無理に之を持ちこたへやうとすると、却つて其の手から落ちて失つてしまふ、能くある事ヂヤ。大凡物には二面の觀方がある物は相對的になつて居る。譬へば人の先きに立つて行くことすれば後から附いて往く者もあり、息を掛けて温めやうとすると吹いて冷やす事もあり、強壯な

らしめやうとすると、或は羸弱になる事もあり。車に物を載せれば落ちるといふ事もある。さういふ関係のものだから凡べて一面の觀方をしてはならぬ。デあるから聖人は一方に片寄つた甚だしい事は去るのヂヤ。奢侈も驕泰も共に或程度を越したものだから併せて之も去る。嘘は息を吹きかけ温める。吹は息を吹き掛けてヒヤス。墮を懸に作る本もある懸はヤブル。

## 第三十章

以道佐人主者。不以兵强天下。其事好還。師之所處。荆棘生焉。大軍之後。必有凶年。故善者果而已矣。不敢以取强焉。果而勿矜。果而勿伐。果而勿驕。果而不得己。果而勿强。物壯則老。是謂非道。非道早已。

道ヲ以テ人主ヲ佐クル者ハ兵ヲ以テ天下ニ強ウセズ其ノ事好モスレバ還ル師ノ處ル所ハ荆棘生ズ大軍ノ後ハ必ず凶年有リ。故ニ善クスル者ハ果サン而已矣。敢テ以テ強キヲ取ラズ果シテ矜ルコト勿レ果シテ伐ルコト勿レ果シテ驕ルコト勿レ果シテ已ムコトヲ得ザレ果シテ強キコト勿レ。物ハ壯ナレバ則老ユ是ヲ非道ト謂フ非道ハ早ク已メヨ(此の章讀方少々普通と違ふ)

此の章兵禍を説きて之に處する法に及ぶのだが、果の字の意義甚だ解し悪い。果敢果毅等の意にする。と何うやら意味が不明瞭になる。太田晴軒考證の後遂げ成すの義とした。今之に従ふ。道を以て人主を佐ける者は兵力を以て天下に強からしめやうとはせぬ。戦争の事たる一勝一敗は免れない數、我彼

に勝てば彼亦我に抗し其の禍息む時がなからう。要するに同じやうな事を繰り返す迄ヂヤ。さうなるのが好還といつてチ、ンボ・カチンボのものだ。陣地を布いた處は耕種も成らず殺氣に掩はれて荆棘が生ずる、故に大戦争のあつた後には凶年が來るものだと思うてさへゾツとする。故に善處する者は道を以て事を成すのみで、決して強兵の名は取らない。道を以て事を成して矜・伐・驕の弊なければ敵を輕んじて敗亡を速くこともなく、若し已むを得ずして兵を用ゐる事ありとも剛強威武を耀かすことをしない。二章や二十九章に説いたやうに、物は相對的で壯は老を伴つてゐる。現在の己が壯に任せて他を威壓するは道ではない。非道い遣り方のもの、踵を旋らさず衰老の來るを考へずばなるまい。強を待み壯を待むのは非道のものであると知つたなら早く之を已めるがよい。好還。還るを好むでも大抵分るが、好をヤ、モスレバと讀み俗言ヨクアルヤツの意に見た方が面白からう。即よくあるあのチ、ンボ・カチンボで同じ事を繰返す。還は旋に通じて音セン。旋回旋轉螺旋などの旋。

## 第三十一章

夫佳兵者不祥之器。物或惡之。故有道者不處。是以君子居則貴左。用兵則貴右。兵者不祥之器。非君子之器。不得已而用之。恬淡爲上。故不美也。若美必樂之。樂之者是樂殺人也。夫樂殺人之者。不得志於天下矣。故吉事尙左。凶事尙右。是以偏將軍處左。上將軍處右。言居上勢則以

喪禮處之。殺人衆多。以悲哀泣之。戰勝以喪禮處之。

五四

夫レ佳兵ハ不祥ノ器、物或ハ之ヲ惡ム故ニ有道者ハ處ラズ。是ヲ以テ君子居レバ則左ヲ貴ビ兵ヲ用キルトキハ則右ヲ貴ブ兵ハ不祥ノ器君子ノ器ニ非ズ已ムヲ得ズシテ之ヲ用キルトキハ恬淡ヲ上ト爲ス故ニ美ニセザルナリ若シ美ニスレバ必ズ之ヲ樂ム之ヲ樂ム者ハ是レ人ヲ殺スヲ樂ムナリ。夫レ人ヲ殺スヲ樂ム者ハ志ヲ天下ニ得可カラズ故ニ吉事ニハ左ヲ尙ビ凶事ニハ右ヲ尙ブ是ヲ以テ偏將軍ハ左ニ處リ上將軍ハ右ニ處ル喪禮ヲ以テ之ニ處ルヲ言フ、人ヲ殺スコト衆多ナレバ悲哀ヲ以テ之ニ泣キ戰勝テバ喪禮ヲ以テ之ニ處ル。

老子兵を惡むこと甚しく前章に次ぎて更に之を説く。語長きにより意は自ら明らかなである『佳兵の二字諸説一定しない。下の美字に由りて美兵とする説あり。又是は唯といふ字の訛であらうと見るのは尤も善説。今之に従ふ。夫れ凡べて器械は人の日用に供する缺くべからざるものだが、唯兵器ばかりは人を殺す道具だから不吉不祥の物ヂヤ。不祥の器だから或御方が之を惡む、或御方が惡むやうな器を動かして戦争をする、是は有道者の爲すに忍びない事だが、若し之を用ゐる場合に際しては不處といつて心を其處に置かない、其の事終れば直ちに干戈を收めて武を驕すことはせぬ。故に君子は平居無事の日には左を貴び、兵を用ゐる時のみ右を貴ぶことにする。左は陽で右が陰だから左が貴い我が國などの左右大臣左右辨官孰れも左が上席となつて居る。以上の様に兵は不祥の器だから君子の用ゐる器ではない。已むを得ずして之を用ゐることあるも戡定の目的が達すればそれでよい、土地侵略な

ごそんな欲心があつてはならぬ、矢張恬澹寡慾が上のものだから兵は美にせぬ、若し美にすると必ず之を樂むといふ心が起り、ト、人を殺すを樂むといふ非道になる。夫れ人を殺すことを樂む者は志を天下に得ることは不可能である。仁武不殺でなければ人心は得られない。故に吉事には左を尙び凶事には右を尙ぶ。今言つた通り右は陰のものだから喪禮には右を尙び、左は陽のものだから吉禮には左を尙ぶ。斯ういふ譯だによつて偏將軍が左に處り上將軍が右に處ることに定められてある。即喪禮を以て事に當らせる所以ヂヤ。普通ならば上將軍が左の上席にあるべき筈だ。又戦争をして人を殺すことが多かつた時は中心から之を悲み、よし戦が勝利を得たとしても式を設けて戦死者の靈を祭る、是皆喪の禮に屬するものである』居上勢則の四字は無くてもよい○偏將軍。添へ大將。

### 第三十一章

道常無名。樸雖小天下不敢臣。侯王若能守。萬物將自賓。天地相合。以降甘露。人莫之令而自均。始制有名。名亦既有。夫亦將知止。知止所以不殆。譬道之在天下。猶川谷之於江海。

道ノ常ハ名無シ樸ハ小ナリト雖モ天下敢テ臣トセズ侯王若シ能ク守ラバ萬物將ニ自ラ賓セントス。天地相合ヒ以テ甘露ヲ降ス人之ニ令スルコト莫ウシテ自ラ均シ。始メテ制シテ名有リ名モ亦既ニ有リ夫レ亦將ニ止マルコトヲ知ラントス止マルヲ知ルハ殆カラザル所以ナリ。譬ヘバ道ノ天下ニ在ルハ猶川

五五

谷ノ江海ニ於ケルガゴトシ。

此の章は人主道を體し無爲なれば萬物皆我に服従するを説く。道常無名は首章に於て領得することが出来る様は第二十八章の『樸ニ復歸ス』の樸で道の常の語の言ひ換へと見てもよい其の樸を體得した者は從令微賤の身といへど天下が之を臣とはせぬ。必ず王者の師と尊崇される。王侯が若し能く此の樸を守らば、萬物來りて之に歸するであらう。樸の徳は此の如く大いなるもので、其効驗としては天地陰陽の二氣和合して甘露の如き祥瑞を降すに至る。されば天下一般の人民も敎令を待たず均平の化に浴し各自それ自身が均しいものだと思つて自己満足してゐる。道は本より無爲のものも樸も亦自然の儘なる木、それが始めて製造されて人間使用の器となると名が付く。仁義忠孝等無形のものだが人間使用の器即道具としてある。併しダ、十八・十九・二十及び二十八章で言つた通りのものだから、之に對する態度としては餘りに名を好まない貨を好まないで止まるといふ事に着目すべきデヤ。止まるといふことに氣が付けば危殆がない。譬へてみると道は普遍的に天下に存在して居て萬物が之に歸着すること、丁度川谷の水が江海に歸するやうなものデヤ。シテみると水は江海に至つて止まる。止まる所を知つて流れ込むから水は危殆の憂がない。忠孝仁義などの名を廢してしまつて無爲自然に止まれば天下は安泰のものデヤ。自賓この賓は客でない歸服する意。

五六

### 第三十三章

知人者智。自知者明。勝人者有力。自勝者強。知足者富。強行者有志。不

失其所者久。死而不亡者壽。

人ヲ知ル者ハ智ナリ。自ラ知ル者ハ明ナリ。人ニ勝ツ者ハ力有リ。自ラ勝ツ者ハ強ナリ。足ルヲ知ル者ハ富ナリ。強行スル者ハ志有リ。其ノ所ヲ失ハザル者ハ久シク死シテ亡セザル者ハ壽ナリ。

人を知るは智、是はよし。自己を知る、即吾は如何なる人かを知るそれが明といふもの。人に勝つのは我に勇力があるから是はよし。自ら己に勝つといふは六ヶ敷い。克己、若しそれが出来れば之を強者とする。人の私欲は限りがない、溜まれば溜る程貨財慾が高まり、是れでモウ十分だとせぬ故、畢竟金のある貧乏人。故に足るを知るといふことが富むといふことになる。強いて行ふ者は志があるから是はよし。末の二句、其所を失はぬとは、道に處りて去らざる意、道に處れば傾覆の患がないから長久を保たれる。死して亡びざるには、聖人死すとも其の徳澤は百世に存して人皆之を仰ぎ、其の神奕奕其名赫赫たれば是れ猶生きてゐるに同じ、故に壽といふ』此の章別段の事もない。

### 第三十四章

大道汎兮其可左右。萬物恃之以生而不辭。功成不居。衣被萬物而不爲主。常無欲可名於小。萬物歸焉而不知主。可名於大。是以聖人不爲大。故能成其大。

五七



大道ハ汎トシテ其レ左右ス可シ萬物之ヲ恃ミテ以テ生ズ而シテ辭セズ功成リテ居ラズ萬物ニ衣被シテ而モ主ト爲ラズ常ニ欲無シ小ト名ヅク可シ。萬物歸シテ而シテ主ヲ知ラズ大ト名ヅク可シ。是ヲ以テ聖人ハ終ニ大ト爲サズ故ニ能ク其ノ大ヲ成ス。

此の章道體の思想は最早明白になつてゐるからザツト解する。大道はブカ／＼浮いてゐる舟のやうなものヂヤ。前後左右何の方向へでも自由自在に行ける。擧み所がない。以上は比喩で萬物は之を恃みて生まれる。生むには勞が伴ふものだが大道は其の勞を辭せず、功成りて其の功に居らず、萬物に着物を着せ覆ひ育て、それで自分は之が主宰であるごと威張つては居ぬ、何と云はれたつて頓着しない實に『大道ハ汎トシテ其レ左右ス可シ』である。されば小と名づけてもよい。是は虚設の文法のもの萬物が歸依し即其の力に由りて生れるのであるが、扱誰の力で生れたのか又何者が主宰して居るのかを知らぬと成ると大きい事になる。大と名づけては居られない。之を體するのが聖人であつて、聖人は大を爲して居ながらそれを大とも思つて居ない。大とも思つて居ないからこそ大を成し得るのである。汎は水の廣き義に見ず汎汎と舟の泛いてゐる意に解す。○衣被は着物だから親が子を覆育する意になる。○常無欲の三字は紛れ込んだのだから刪去するがよいと晴軒云ふ。存して置いても大した邪魔にもなるまいと思ふ。

第三十五章

執大象天下往。往而不害。安平泰。樂與餌。過客止。道之出言淡乎其無。

味。視之不足視。聽之不足聞。用之不可既。

大象ヲ執リテ天下ニ往ク往イテ害セラレズ安平泰ナリ。樂ト餌トニハ過客止マル道ノ言ヲ出ダスコト淡乎トシテ其レ味無シ之ヲ視レドモ見ルニ足ラズ之ヲ聽ケドモ聞クニ足ラズ之ヲ用キテ既ス可カラズ此の章道體を形容する。大象は不象の象の象で同じく道を形容する。其の自然の道を執つて天下に往くならば、往く所として障害のあらう筈なく身心二つながら安平泰であらう。音樂と餌食は人の口耳を悦ばせるもの故、其處を通過する者は思はず足を止める。是の一喻で下文を呼び起す。有道者の出だす言葉は、世俗から云つたら至極澹泊無味のもので、視たとて旨い御馳走のやうにも見え、聴いた所で耳を樂ませる音樂のやうでもなからうから誰も足を止める者はあるまい。併し其の澹乎無味の中に天下の至味至音があるので、其の効用たる到底之を用盡すことは出来ぬのである。餌。此處は飲食物と見る。○既は盡く。○妙味新味二つながら無く文字殊に拙。老子の筆かしら……

第三十六章

將欲歛之。必固張之。將欲弱之。必固強之。將欲廢之。必固興之。將欲奪之。必固與之。是謂微明。柔之勝剛。弱之勝強。魚不可脫於淵。國之利器不可示人。

將ニ之ヲ欲メント欲スレバ必ズ固ク之ヲ張り將ニ之ヲ弱ノント欲スレバ必ズ固ク之ヲ強ウシ將ニ之ヲ廢セント欲スレバ必ズ固ク之ヲ興シ將ニ之ヲ奪ハント欲スレバ必ズ固ク之ヲ與フ是ヲ微明ト謂フ。柔ノ勝ハ剛ナリ弱ノ勝ハ強ナリ魚ハ淵ヲ脱ス可カラズ國ノ利器ハ以テ人ニ示ス可カラズ（此の章讀方普通と違ふ所あり）

歎は林希逸の弛める意に解するが分りよい固は文字通りでもよいが姑の字即シバラクとするのは面白い。今之に従ふ。此の章は老子が陰謀のものだと見る説もあるが、それは人に由り又取りやうに由りてあらう老子は權謀術數などの細工をする人ではない。只自然の道理が斯うなるのである。利用と害用、水飴を見て盜跖と曾參各考へを異にしたこともある。扱將に之を弛めやうとするとき一時は必ずピンと張るものである其の一寸張るのは弛めんとする豫備的行爲である。鳥の舞ひ立ち尺蠖の伸びんとす時なども併せ考へる。以下弱強・廢興・奪與皆同じ心持ちで解いて下る。以上を一見すると如何にも權變のやうである。されど天道自然の歎張與奪は微明といつて、其の明らかな所爲を態と微にして人か窺ひ知ることがならぬ様に運移して行くものである。今剛ならんと欲するならば柔を以て守るがよい。又強ならんと欲するならば弱を以て守るがよい。其の守を失はなければ漸漸に積みて剛とも強ともなる。初めより剛・強たらんとして柔・弱を用ゐる妙を知らぬ者は、要するに強にも剛にもなり得ないものである。是は七分三寸のカネ合ひの六ヶ敷い舵の取り方ぢや。魚は偉い奴ぢや。人の目に觸れない深い淵に沈んで優然として居る若しフワ／＼した舉動をすると直ちに見付けられてしまふ故に人は其の才智を天下に炫耀せず、深く沈み靜かに安んじて其の聰明を掩ひ隠し、容易に内兜を見

透されぬやうにすべきである』微明を微なるが如くなれど其の實は明らかであるを見る説もあるが、今『明ヲ微ニス』といふ説を取る○柔之勝剛を『柔ノ剛ニ勝ツ』と扱ふが普通のやうだが、勝を偏勝即過ぐと云ふ意に見るは面白いから之に従ふ。次ぎの句も亦同じ○利器は銳利なる兵器。それを天下に示さぬといふは正に現代的だ。各國争うて殺人の器械を研究發明して之を祕密に付し以て萬一に備へて置くでないか。併し此處は比喻で人の賢智を指したものの、智を衒はない意になる。

### 第三十七章

道常無爲。而無不爲。侯王若能守。萬物將自化。化而欲作。吾將鎮之以無名之樸。無名之樸。亦將不欲。不欲以靜。天下將自正。

道ノ常ハ爲スコト無シ而シテ爲サルコト無シ侯王若能ク守ラバ萬物將ニ自ラ化セントス。化シテ而シテ作ラント欲スレバ吾將ニ之ヲ鎮スルニ無名ノ樸ヲ以テセントス。無名ノ樸亦將ニ不欲ナラントス不欲ニシテ以テ靜ナレバ天下ハ將ニ自ラ正カラントス。

此の章起し來つて猶第三十二章の如く章意從つて新味なし。彼の道の所爲を見よ、何等目に付くやうな仕事をして居ぬでないか、實に無爲ぢや。肉眼者流はさう思ふだらうが、道の所爲は廣大にして無邊爲さぬ事はないのだ。侯たり王たる者若し能く之を體し之を守つたならば、譬へてみたら草木が自然の化に惠まれて萌え出で、繁茂する如く、天下萬民其の化に浴し何不足なき生活を遂ぐるの餘、漸

く墜なき欲が出て来て本分を忘れた輕舉妄動が起るものである。之を鎮壓する手段としては『無名ノ樸』を以てする外はない。無名の樸とは何であるかと云へば、章首の『道ノ常ハ爲スコト無シ』がそれである。併し其の無名の樸も無欲といふことは困難である。若しも徹底した無慾至静で臨むならば天下は茲に感動して自然に正しいものとなるべきだ』將自化この化を感化の義にすると次ぎの句が通じなくなる。德に化せられて而して作即妄作するでは困る。因つて此の化は草木が自然の化を受ける義に解し、作は萌え出づる意に見る。○無名之樸。無名は即道、樸は十五章や二十八章にある。要するに道を體した所の渾然と厚き德になる。

以上三十七章を上篇として分けてある本もある。皆道に就いて論述したもの。三十八章に至つて德に就いての言があるので、後世道德經と呼ぶことにしたのでせうが下篇德はかりではない。

### 第三十八章

上德不德。是以有德。下德不失德。是以無德。上德無爲。而無以爲。下德爲之。而有以爲。上仁爲之。而無以爲。上義爲之。而有以爲。上禮爲之。而莫之應。則攘臂而仍之。故失道而後德。失德而後仁。失仁而後義。失義而後禮。夫禮者。忠信之薄。而亂之首也。前識者。道之華。而愚之始也。是以大丈夫處其厚。不居其薄。處其實。不居其華。故去彼取此。

上德ハ德トセズ是ヲ以テ德有リ下德ハ德ヲ失レズ是ヲ以テ德無シ上德ハ無爲ニシテ以テ爲メニスルコト無ク下德ハ之ヲ爲シテ以テ爲メニスルコト有リ上仁ハ之ヲ爲シテ以テ爲メニスルコト無ク上義ハ之ヲ爲シテ以テ爲メニスルコト有リ上禮ハ之ヲ爲シテ而シテ之ニ應ズルコト莫ケレバ臂ヲ攘ゲテ之ニ仍ク。故ニ道ヲ失ヒテ而シテ後ニ德アリ德ヲ失ヒテ而シテ後ニ仁アリ仁ヲ失ヒテ而シテ後ニ義アリ義ヲ失ヒテ而シテ後ニ禮アリ。夫レ禮ハ忠信ノ薄ニシテ亂ノ首ナリ前識ハ道ノ華ニシテ愚ノ始メナリ。是ヲ以テ大丈夫ハ其ノ厚ニ處リテ其ノ薄ニ居ラズ其ノ實ニ處リテ其ノ華ニ居ラズ故ニ彼ヲ去リ此ヲ取ル上德は德を施してもそれを徳とも何とも思はない。第五章天地不仁の語と同調のもの。德を施して得たり顔するやうではまだ小さい。我が德を自知せぬ域に達するならば大きい。是が眞に德が備つたと云へる。下德は德を施した事を忘れる迄に行かない、始終鼻に掛けたがる。そんな風では德備つたとは云へぬ。詰り德備つた者ではないことになる。不失德の失は喪失する意でも分るけれど、下文に至つて通じなくなる。因つて忘の意に解する。○上德は道の自然のやうで強いて勉めて遣るのでなく、從容自若として利名の爲にどうのかうのとそれに心を引かされない。下德は之に反し煎じ詰めると何か爲めにする所あつて遣るのだ。此の句の下の以爲の爲はタメニスと扱ふ。○上仁の句最早解するに及ぶまい。下の爲字は前のやうに讀む。○上義の句には説明が入る。爲めにするそれが上義とは受取れない。是は老子が其の當時の世態を目撃すると、世俗一般が墮落してさうなつて居たので、實際に就いて立言したもの、決して聖賢の所謂上義のものではない。○上禮も亦俗世の事實たること前の上義に同じ。仍之の仍は就くとする説と引くといふ説とある。今就く意で解すると、我勉めて禮を行ふのに相手が

之に對する相應の答禮をせぬと、ムツカリして臂を攘げて相手の方へ詰め寄つて其の過を責め正さうとする。聖賢豈何ぞ此に至らん、○以下は一轉して説き下る。曰く、嗚呼世の澆季此の如し。故に道が失はれて後に徳が唱へられ、徳が失はれて後に仁が唱へられ、仁が失はれて後に義が唱へられ、義が失はれて後に禮が唱へられた事が分る。義禮は角立つたものセセコマしいもの。我が渾厚の道德眼から見れば頗る等級の下つたものである。全體禮といふものは心の忠信が本であつて、揖讓進退などは只是れ表面の虚飾のものだ。デあるから澆季の世の禮は忠信の本が次第に薄らいで来て、それから八ヶ間敷く言ひ出したもので上禮云々の句の『攘臂而仍之』といふやうな苦々しいものとなり、詰りは争鬪の始まりとなるのだ。前識は諸説紛々たれど、晴軒の吉凶を前知する解に従ふ。機の先を豫測し得るは如何にも神智のものだが、併し道に於ては浮華と見るべきもの、極言すると愚の始めである何故といふに、盛衰興亡をも豫め知る者が、往往自分の身を全うすることが出来ぬことがある。陰陽師身の上知らず、で彼を知るは明であつても自らを知ることが却つて暗い。其處になると愚者と擇ぶ所がないから愚の始めぢやないか。斯る理合ひのものぢやに由つて大丈夫は心を渾厚の處に置き輕薄には居らぬ。眞實の處に置いて浮華には居らぬ。故に彼の前識義禮を去り此の道德を取るのぢや』攘臂。扼腕に同じ。攘はツカム・ハラフ・カ、グなど訓す。俗言腕卷り。

## 第三十九章

昔之得一者。天得一以清。地得一以寧。神得一以靈。谷得一以盈。萬物得一以生。侯王得一以為天下貞。其致之一也。天無以清將恐裂。地無以

一以生。侯王得一以為天下貞。其致之一也。天無以清將恐裂。地無以寧將恐發。神無以靈將恐歇。谷無以盈將恐竭。萬物無以生將恐滅。侯王無以為貞而貴高將恐蹶。故貴以賤為本。高以下為基。是以侯王自稱孤寡不穀。此其以賤為本邪。非乎。故致數與無與。不欲琖琖如玉。落落如石。

昔ノ一ヲ得タル者天ハ一ヲ得テ以テ清ク地ハ一ヲ得テ以テ寧ク神ハ一ヲ得テ以テ靈ニ谷ハ一ヲ得テ以テ盈チ萬物ハ一ヲ得テ以テ生ジ侯王ハ一ヲ得テ以テ天下ノ貞ト爲ル其ノ之ヲ致スハ一ナリ。天以テ清キコト無ケレバ將ニ恐ラク裂ケントシ地以テ寧キコト無ケレバ將ニ恐ラク發セントシ神以テ靈ナルコト無ケレバ將ニ恐ラク歇マントシ谷以テ盈ツルコト無ケレバ將ニ恐ラク竭キントシ萬物以テ生ズルコト無ケレバ將ニ恐ラク滅セントシ侯王以テ貞ト爲ルコト無クシテ而モ貴高ナラバ將ニ恐ラク蹶ラントス。故ニ貴ハ賤ヲ以テ本ト爲シ高ハ下ヲ以テ基ト爲ス是ヲ以テ侯王ハ自ラ孤寡不穀ト稱ス。此レ其レ賤ヲ以テ本ト爲ス邪非ナル乎。故ニ輿ヲ致數スレバ輿無ケン琖琖ト玉フ如ク落落ト石ノ如キヲ欲セズ此の昔は昔も昔の大昔天地開闢の初めに方りては混沌たる一氣があるばかり、其の一氣を得た者は、と言つて置いて以下得たものを説き下る。天・地・神・谷・萬物それ／＼一氣を受け得て清・寧・靈・盈・生この谷は海と見る。侯王は一を得るといつても是はそれを體した徳になる。貞は木扁を付けて楨。楨

幹は堵を築く版今日セメントで屏などを築造する時兩傍を板で圍ふのを參考。侯王が天下の楨幹丁度武夫を干城といふやうな語だ。天地以下と侯王とが受け得たといふ事は同一である。次ぎに受け得なかつたならば如何にと刻んで説く。即恐らく裂・發・歇・竭・滅・廢だらうと斷じ、而して結論になる。故にの句の孤寡不穀は孰れも侯王が謙遜した自稱、但寡は寡人で寡徳の人の意、又不穀の穀は善と解するが不祿の意だともいふ。最後の故にの句は六ヶ敷い。致數與無與の句を『致メテ與ヲ數フレバ與ナシ』と讀む人あり又『與ヲ致數スレバ』と讀む人あり或は『與ヲ數フレバ與ナキヲ致ス』とも讀めさうに思ふ。何と扱つても意の歸する所は同じである。今第二の讀方に従ふ。致は極といふ意で一數へ立てることを極める。與は種種の部分即輪・輻・蓋・軫等から成立つ。今其の中の輪なり輻なりを取り去つたなら輿がない事になる。輿は諸種の部分の集合した上に名づけられたもの、バラバラになつたら最早輿がなくなる。此の理を國家に持つて行く。國家は種種の職を營む民衆の集合體。若し其の一つ一つを數へて取り去らば國家はないことになる。さうなつた曉に侯王が如何に自分獨が貴い者高い者と威張つた處で埒もないことだ。國家は君民相互に經營せねばならぬ、離れ々々になつたら駄目ヂヤから侯王ばかりが碌碌と玉の美しくしいやうで、民衆が落落と粗末な石がゴロ／＼して居るやうな事は望みたくない』裂は破壊してしまふ意。發は氣が泄れてしまつて固まらない意。歇は枯歇、廢はツマヅイテデングリ返る意○蓋。輿の箱の屋根の部、車ならホロ○軫は車の後方にある横木○此の章の如きは眞に近代的思想で面白いと思ふ』抱一の語は第十章にあり、更に二十二章に抱一爲天下式の語あり。此の章はそれを細説したやうだ。

## 第四十章

反者道之動。弱者道之用。天下之物生於有。有生於無。

反ハ道ノ動ナリ弱ハ道ノ用ナリ天下ノ物ハ有ヨリ生ジ有ハ無ヨリ生ズ。

反るとは根本に立ち歸る意、道に動靜あり、動極まれば靜、靜極まれば動、是れ自然の理で、今動かして根本に反ると即靜となる。弱は強弱の弱、人は剛強ばかりが役に立つことを知るが、これは折れ易いから自ら全うする道でない。柔弱は其の折れ易い憂ひがない。二十二章三十六章等にもあつた通りだから畢竟弱の徳は其の働きが強の意味になるものだ。諺に負けるが勝ちの義になると同一だ天下の萬物は有(天地)から生じ、其の有は無(道)から生じたもの、無に反るが性命の始めに立ち歸ると云ふもの、其處は動靜強弱を超越してゐる』此の章は削除しても苦情はあるまいと思ふ。

## 第四十一章

上士聞道。勤而行之。中士聞道。若存若亡。下士聞道。大笑之。不笑不足  
以爲道。故建言有之。明道若昧。夷道若類。進道若退。上德若谷。大白若  
辱。廣德若不足。建德若偷。質眞若渝。大方無隅。大器晚成。大音希聲。大  
象無形。道隱無名。夫唯道善貸且成。

上士ハ道ヲ聞イテ勤メテ之ヲ行ヒ中士ハ道ヲ聞イテ存スルガ若ク亡スルガ若ク下士ハ道ヲ聞イテ大ニ之ヲ笑フ笑ハレズンバ以テ道ト爲スニ足ラズ。故ニ建言ニ之レ有リ明道ハ昧ノ如ク夷道ハ類ノ若ク進道ハ退ノ若ク上徳ハ谷ノ若ク大白ハ辱ノ若ク廣徳ハ足ラザルガ若ク建徳ハ儉ノ若ク質眞ハ淪ルガ若ク大方ハ隅無ク大器ハ晩成シ大音ハ希聲ニ大象ハ形無ク道ハ隱レテ名無シト。夫レ唯道ハ善ク貸シテ且成ス。

上六句は讀んで字の如し。但存は記憶亡は遺亡。建言は立言で千歳不拔の言葉。以下十二句がそれぞれある。常識で考へてゐる反面側面から立言するから妙味が盡きない。白い物を白いといへば何等の妙味もないが、黒いと云つたら面白からう。さういふ事實は雪の降る空を見よ。明道若昧、道に明らかなる者は其の光りを包みて自ら示さないから、人から見ると愚昧のやうに思はれる。夷道若類の夷は平らかだが類は類に作る本が宜しい。類の音ライ絲の節とか戻るなど、訓じ、更に平らかならざる也と註せられるから夷に對する妙對になる。坦坦たる大道も俗眼からは平らかでないやうに見られるし。進んで道を修すると最後は無を觀するに至るから、世俗から見たら退のやうに思はれる。上徳若谷、是は十五章で分る。大白若辱、白に對する辱だから恥辱でないこと言ふにや及ぶ。辱は古茲と通じ茲は黒である。大白は此の上もない潔白の人、さういふ人は敢て自分の潔白を表はさうともせぬもの故、チト語弊のやうにも思はれるが、白に對する對法上先づは白くは見えて黒いやうだ。前に言つた雪景色參照。廣徳若不足、廣大の徳ある者は謙虚自ら居るを以て、他から窺ふと其の徳が具足せるものとは見られない。建徳若儉、大徳の立つた人は其の徳を見せ付けやうとはせぬもの故、他人が見

たら儉薄苟且らしく思へるだらう。苟且はカリソメ・イサ、かななどの意質眞若淪、此の句は染色の比喩、淪は變色で色の變ること、如何に美しく染めても染めた色は褪せる。然るに眞の持前の本色は何時迄たつても褪色はせぬ。表面だけを一寸瞥見したら或は色がさめたものと思はれるかも知れぬ。質は素質などの質。大方無隅。方形の物には隅がある角がある、小廉曲謹の人ほどイヤに四角張つて角々しいが、偉大な人になると其の圭角が取れてしまつて天地に方隅がないやうだ。大器晩成はよからう。大音希聲、希は十四章の『聽之不聞、名曰希』の希、大意は古の雅樂などを指す立派な雅正なる音樂になるとドンチャン拍子のステ、コのものでなく、樂記の『清廟ノ瑟ハ一唱シテ三嘆シ遺音アル者』であるから、凡俗の耳には入るものでない。大象無形無象の象固より形迹はない、十四章を參照したらよからう。道隱無名、是はモウよからう。夫唯道善貸且成、夫れ自然の徳は能く天地兩間の萬物に貸し與へて以て各自の性命を成させる。それ程大きいものだが名もなければ形もなく聲もない。

#### 第四十一章

道。生。一。一。生。二。二。生。三。三。生。萬。物。萬。物。負。陰。而。抱。陽。冲。氣。以。爲。和。人。之。所。惡。唯。孤。寡。不。穀。而。王。公。以。爲。稱。故。物。或。損。之。而。益。或。益。之。而。損。人。之。所。教。我。亦。教。之。強。梁。者。不。得。其。死。吾。將。以。爲。教。父。

道ハ一ヲ生ジ一ハ二ヲ生ジ二ハ三ヲ生ジ三ハ萬物ヲ生ズ萬物ハ陰ヲ負フテ陽ヲ抱キ冲氣以テ和ヲ爲ス

人ノ惡ム所ハ唯孤寡不穀ナリ而ルニ王公ハ以テ稱ト爲ス。故ニ物ハ或ハ之ヲ損シテ而シテ益シ或ハ之ヲ益シテ而シテ損ス。人ノ教フル所ハ我モ亦之ヲ教フ強梁ノ者ハ其ノ死ヲ得ズト吾將ニ以テ教父ト爲ラントス。

天地創造の初めから説き起して人事に及ぼすのだが、一、二、三が何であるかを明示しないから後世の紛議を惹起する。無極・大極・三才等の説になると、それはく面倒にもあり六ヶ敷くもあり到底一寸とした話して追ひ付くものではない。故に此の道は首章以下に見える道として置いて、其の道が混沌たる一氣を生ずる、一氣の中には陰と陽とが抱き合つて居るのだが、それが西と東に分れて片や陰片や陽と呼び出される兩大關となる。陰と陽とが取り組んで四十八手の裏表、互に秘術を盡した揚げ句が三となつた。それは何だ、分らない。三才とする人が出来て後に萬物が生ずる事になるからいけない。しやうがないから、三とは形と氣と質是の三つの始めとして置く。形の素・氣の素・質の素が萬物を生ずる味な味の素。されば萬物（人も入れて）なか／＼味な處を見せて、陰を脊負ひ陽を抱へ沖氣でそれを調和して居る。人といふ形體と氣質とを備へるに至りても、元來が道の一氣から出たものだから、分れ分れにならぬ様旨く調和させて混沌の昔を崩さない事だ。人の惡む所は孤寡不穀だが王公はそれを以て自稱として居る。即これを體したもので、凡べて物事は或は損してそれが益する事にもなり、又反對に益してそれが損する事にもなるカネ合ひのものである。書經の『謙ハ益ヲ受ク』と又『滿ハ損ヲ招ク』の語參照。古人教ふる所の事は我亦之を教へる。彼の『強梁ナル者ハ其ノ死ヲ得ズ』の語は眞に名言、我是の語を尊んで教の父とも仰ぎ、同時に我亦自身教父となつて後世に戒告し

やうと思ふ』人之所教我亦教之の句の我亦の下に義の字の有る本もある。其の義は宜の字に通はして見る○強梁の梁はハリで棟を負つてゐる。力の強い意に轉用○教父は師である。

#### 第四十三章

天下之至柔。馳騁天下之至堅。無有入於無間。吾是以知無爲之有益。不言之教。無爲之益。天下希及之矣。

天下ノ至柔ハ天下ノ至堅ヲ馳騁ス有ルコト無ケレバ間無キニ入ル。吾是ヲ以テ無爲ノ益有ルヲ知ルナリ不言之教無爲ノ益ハ天下之ニ及ブモノ希ナリ。

此の章は前章強梁云云の語を承けて説く。天下の至柔のものは何か、水ぢやないか。水を見よ、至柔の癖に天下の至重たる大木を浮かせ巨石を自由に馳騁させるぢやないか。又水は形を成して居らぬから間隙もないやうな處へドン／＼しみ込んで行く。是を見て吾は無爲が有益であるのを知る。水に何んでかうしやうあゝしやうなどの心があらう、ハツペラポーで形も何にもないが、それで萬物を潤して世界を無味乾燥のものにしない。シテみると水は不言の教へが籠つてゐると見てもよい。天下を治めるにクダ／＼しい法律條規を立て、世話をする、人民はそんなに世話の焼けるものかしら、不言の教無爲の益を體して行つたら行けさうなものだに、天下の人之を知るに及べる者の希なは心外ぢや馳騁。平地に用ゐる字だが、今水上に於てゝあるから流し移らせ意に見る○至堅は至重○及之。知が

第四十四章

名與身孰親。身與貨孰多。得與亡孰病。是故甚愛必大費。多藏必厚亡。知足不辱。知止不殆。可以長久。

名ト身トハ孰カ親シキ身ト貨トハ孰カ多レル得ト亡トハ孰カ病ナル。是ノ故ニ甚ダ愛スレバ必ズ大ニ費シ多ク藏スレバ必ズ厚ク亡フ足ルコトヲ知レバ辱メラレズ止マルコトヲ知レバ殆カラズ以テ長久ナル可シ。

世人皆名を好むが、名と己が身と比べたらどちらが親しいものか。名は外からクツ付けたもの身は自分の持ち物、比べ物にならぬぢやないか。身と貨財、これは何うだ。どちらが多れると思ふ。ナニ金さへあれば死んでもよい、しやうがない濟度すべからざるもの。然らば得るといふことゝ亡ふといふことゝはどちらが病(ウレヒ)のものだ。ナニ分らぬ、さう、チト分り兼ねよう。考へてみよ、名譽貨財を得ても身を亡すやうな事があつたら何うだ。縦令名と貨は得なくても身が亡びさへしなかつたら何うだ。斯う言うたら大抵は合點が出来るだらう。是故に甚だしく名を愛すると、其の名を博する手段工夫の爲めに精力を費さすばなるまい。又多く貨を貯へやうとすると管に其の貨を亡ふのみならず

おまけの果てには、身迄棒に振つてしまふものぢや。以下一轉して足るを知れば辱められず、止まるを知れば危殆の地に陥らぬ、以て長久なることを得ると説く「厚亡。厚く亡ふは亡ふことを厚くするのだから俗言オマケになど意。

第四十五章

大成若缺。其用不敝。大盈若冲。其用不窮。大直若屈。大巧若拙。大辯若訥。躁勝寒。靜勝熱。清靜爲天下正。

大成ハ缺ケタルガ若クナレド其ノ用敝セズ大盈ハ冲シキガ若クナレド其ノ用窮セズ大直ハ屈スルガ若ク大巧ハ拙ナルガ如ク大辯ハ訥ナルガ如ク躁ハ寒ニ勝テ靜ハ熱ニ勝ツ清靜ニシテ天下ノ正ト爲ル。此の章は大小の辯で清靜が其の主要となる。大成と大盈は二句にて意完了し以下は一句一意。大きく出来て居るものと云つたら此の天地の始めの混沌としてまだ形體に見はれないアレだらう。圓いやうに思へるし又缺けた處がありはせぬかとも思はれる。併し其の用たる萬物を生じて破れ損じない。天地の間に或物が盈ちて始終働いて居るが、それが視聽に觸れないから何んにも無いやうに思はれる。餘り大きいと分けが分からぬものぢや。けれども其の用は窮まらない。以上二句は道になる○大直若屈、この直は眞直に伸びた意に解す。二十二章の『枉則直』の語の裏を行く○大巧若拙、此の語は前の『大成若缺』の語に近似した點があるやうに思ふ。造化の巧は人獸草木等それ々の形を造り上げ



た、巧であるけれど巧とも拙とも思つて居ない。世の中に巧者がなければ拙き者も巧者同様、巧拙は比較的名に過ぎない。○大辯若訥、近時沈黙の雄辯などの語があり、古くからある不言の教の語など、共に併せ觀たらよからう。○躁勝寒・靜勝熱、これは對語で前の方は從後の方は主である。對語の事は前に申し上げてある。此處は靜勝熱を言はんが爲めに、御伴に躁勝寒を置いた迄だから迷はされてはならん。『滅却心頭火亦涼』の禪語を參考すると此の句は能く分るだらう。○清靜爲天下正、これが結語で正とは天下の正しき標準となる意。敵はヤブル。○冲は冲虛で空しき貌。

## 第四十六章

天下有道。却走馬以糞。天下無道。戎馬生於郊。罪莫大於可欲。禍莫大於不知足。咎莫大於欲得。故知足之足常足。

天下道有レバ走馬ヲ却ケテ以テ糞フ天下道無ケレバ戎馬郊ニ生ズ。罪ハ欲ス可キヨリ大ナルハ莫ク禍ハ足ルヲ知ラザルヨリ大ナルハ莫ク咎ハ得ルコトヲ欲スルヨリ大ナルハ莫シ。故ニ足ルヲ知ルノ足ルハ常ニ足ル。

糞の字は田に糞すると解するのが普通だが、太田晴軒は『凡ソ長者ノ爲メニ糞スルノ禮ハ必ず帶ヲ箕上ニ加フ』といふ曲禮の文を引いて、糞を掃除する意に解した。どちらでもよいが新説だから今之に従ふ。天下に道があれば戦争は起らない。戦争がなければ軍馬は用のないもの故之を却けてしまふ。

千軍萬馬の蹶揚げる塵埃が起らなければ道路は比較的綺麗なのに、更に掃除したなら一段と清潔であらう。天下に道が行はれない亂世になると却けどころか一段と馬が必要となる。スルト之に應じて驥北でなくても至る處の郊野に生ずるやうになる。凡べて物は必要から生ずるものヂヤ。抑罪は人に欲しいと思はせるやうな物を持つて居るのが一番罪のものだ。そんな物がなければ侵略などはされぬ。是は受身の方。禍は足ることを知らぬより大きいものなく。咎は欲しい／＼得たい／＼と思ふより大きいものはない。是は働掛けの方。されば足ることを知る其の足るといふ事が呑み込めたならば、其の人は常住足りて安んじて居る。半以下は侯王としても個人としても例を引いて考へることだ。戎馬場所によると直ちに戦争を意味するが此處はさう見てもよいが、さう見なくても通ずる。○郊は四通八達之處と二國相交る境の二義がある。

## 第四十七章

不出戶。知天下。不窺牖。見天道。其出彌遠。其知彌少。是以聖人不行而  
知。不見而名。不爲而成。

戸ヲ出デズシテ天下ヲ知リ牖ヲ窺ハズシテ天道ヲ見ル其ノ出ヅルコト彌々遠ケレバ其ノ知ルコト彌々少シ。是ヲ以テ聖人ハ行カズシテ知リ見ズシテ名ヲカニ爲サズシテ成ル。

眞に是れ聖人の事。章意は解するに難からず。只名の字如何、是は古時名と明は通用したので『不見

而明』とするとハッキリする。我が家の戸を出で、観察しなくても天下の事情は知れる。窓口から窺つて見なくても天道自然の流行は心眼に映つて居る。此の域に達せぬ者が天下の事情を知りたいとあつて戸を出る、出ること如何に遠しといへど足力には限りがある、争で天下の廣きを窮められやう。故に其の遠きに比例する程知ることが出来なく、勞多くして功は少ない。以下はモウよからう』牖はマド。

## 第四十八章

爲學日益爲道日損損之又損以至於無爲無爲而無不爲矣故取天下常以無事及其有事不足以取天下。

學ヲ爲セバ日ニ益シ道ヲ爲セバ日ニ損ス損ノ又損以テ無爲ニ至ル無爲ニシテ爲サル無シ。故ニ天下ヲ取ルニハ常ニ無事ヲ以テス其ノ事有ルニ及ンデハ以テ天下ヲ取ルニ足ラズ。

此の章は二十章を参照して見ると分る。學は禮を指していふ。今禮を學ぶとすると禮儀三百、威儀三千で學ぶに従ひ、日に益々其の個條が多いのを覺ゆるばかりで骨の折れる事ヂヤ。我が道を學ぶと反對に智を去り聰明を黜けるから、日を逐うてそんな小面倒な事が減つて行く。減らし減らし終には無爲の域に至る。無爲の治は自然に叶つたものだから、別段コセ／＼施設しないで其の實は爲さぬ事はない。道が通じないとそれが分らない。天下の民が大きな徳に包まれて氣が付かない。デあるから

天下を取る者は何時も是の無事を以てする。大きな目の大きな地引網の中では、魚は網に這入つて居るのを知らずにゐる。天下を取らう取らうと醒醒せぬから自然に民心が歸向する。若し何か天下を取る目的の上に事を仕出したりすると忽ち其の手を見られて民心が離れてしまひ、天下は終に取れぬことになる』取るは民心を得る意○無事は即無爲だから有事は有爲になる。

## 第四十九章

聖人無常心以百姓心爲心善者吾善之不善者吾亦善之德善矣信者吾信之不信者吾亦信之德信矣聖人在天下慄慄爲天下渾其心百姓皆注其耳目聖人皆孩之。

聖人ハ常ノ心無シ百姓ノ心ヲ以テ心ト爲シ善ナル者ハ吾之ヲ善トシ不善ナル者モ吾亦之ヲ善トス德善ナレバナリ信ナル者ハ吾之ヲ信トシ不信ナル者モ吾亦之ヲ信トス德信ナレバナリ。聖人ノ天下ニ在ル僕係トシテ天下ノ爲ニ其ノ心ヲ渾ニス百姓皆其ノ耳目ヲ注グ聖人皆之ヲ孩ニス。

此の章は善不善信不信を超越して天下に臨むべきを説く。聖人には一徹頑固な處がなく物に従つてコダワリがない、己の心を何處迄も押し通さうとはせぬから常心なしといふ。唯百姓の心を以て心とする。不善も不信も本を究めてみれば、天より受け得た性は皆同じで何等違ひのあるものぢやない。不善といひ不信といふも敢て其の現在の不都合を盾に取り、彼は不善だ此は不信とせでもよい。吾が目

には一様に善に見え信に見える。聖人天下に在るや不善不信も心に疊み込んでしまふ。百姓はさかしら立ちて兎耳鷹目で聖人の様子如何にと探りを入れる事に注意して居る。此處らが不善不信と言へば言へる。それが爲めに慄慄と不安を感ずる所以である。併しそんな小利口な遣り口の者迄も、聖人は之を嬰兒扱ひにして取り上げず、彼等折角の術策も施す地なく、終には其の心も渾厚に嬰孩の初めに復らせる』慄慄。危ぶみて心安からざる貌○注其耳目。目を注ぐこと。

### 第五十章

出生入死。生之徒十有三。死之徒十有三。民之生動之死地。亦十有三。夫何故。以其生之厚。蓋聞善攝生者。陸行不遇兕虎。入軍不被甲兵。兕無所投其角。虎無所措其爪。兵無所容其刃。夫何故。以其無死地焉。

生ヲ出デ、死ニ入ル生ノ徒ハ十三有リ死ノ徒モ十三有リ民ノ生ハ動イテ死地ニ之ク亦十三有リ夫レ何故ゾ其ノ生ヲ生フノ厚キヲ以テナリ。蓋聞ク善ク生ヲ攝スル者ハ陸行シテ兕虎ニ遇ハズ軍ニ入リテ甲兵ヲ被ラズ兕モ其ノ角ヲ投ズル所無ク虎モ其ノ爪ヲ措ク所無ク兵モ其ノ刃ヲ容ル、所無シ夫レ何故ゾ其ノ死地無キヲ以テナリ。

此の章何となく佛書を讀む心地する。何處を押へたら本音が出るか分らない。けれど攝生を説いたもの、様に見える。攝生も儒家と道家とは頗る趣致の異なる所がある。しやうがない。分らないやうに言

つてあるから諸説が紛糾する所以だ。前人未發のものとして書いて太田晴軒の説を御紹介すると、出生入死は生すべき道があるのにそれを出で離れ去つて『飛んで火に入る夏の蟲』自ら進んで死地に入る意。抑生くべき道は何であるかといへば仁善であり死に入る道は邪惡である。渾然たる純善に満たされて一點の邪惡を着けざれば、天下適く所として生地でない事はないと、斯う章意を擧げた。さうすると後の兕虎甲兵は形容の道具立てのものになつてしまふから最早智慧を絞り出さなくても済む生くべき連中は十が中に三つあり、死すべき仲間も同じく十中に三つある。其の三つは何々かといへば仁柔・節儉・謙下が生の連中、強忍・奢侈・驕亢が死の仲間と見る、是の六つが平生の行ひの中にあるから、一方生の徒一方死の徒といふのだ。而して民衆の者が生くべき道をたざらうと動作する、ソイツが生くべき道に由つたものでなく一路死の道に急ぐ結果になることは是も亦十に三つある。三つとは名・貨・位である。それが何故かといへば、我が生を養ひたい養ひたいと思ふ念慮が餘りに手厚過ぎて、却つて死地に赴くことになる。即名を好み貨を貪り位を欲する動きが其處に至らせる魔の手である。以下が形容になる。如是我聞、名貨位で生を養はうなごせす真に善く我が生を攝する者は、前に言つた渾然純善の聖人で、一點の邪惡を着けないから天下何れの地に行つても禍害を蒙らない。即陸行しても兕虎の害に遇はず、軍中に入りても甲兵の爲めに傷を被らない。兕も其の角で突ツ掛けること出来ず、虎も其の爪を立てること出来ず、兵も其の刃を突き入ることは出来ない、それは何故なるか。曰く。盛徳の致す所天下に死地がないからである』此の形容は象や獅子などが犬猫のやうに佛菩薩に馴れ親んでゐる佛畫や日蓮上人の御難などを思ひ比べたら面白からう○徒。借りて言ふ字、

擬人法のもの今道として置く〇十は理想の標準即割出しと見たらよからう〇生生。上の生は養ふ〇攝生。今普通語になつてゐる、攝は持すること〇兕。角の大きな野牛〇甲兵。甲の方は遊んでゐる、兵は及物〇投。角を投げるやうに突いて来る〇措は置くだから鋭い爪をドツシリと置くやうに立てる。

## 第五十一章

道生之。德畜之。物形之。勢成之。是以萬物莫不尊道而貴德。道之尊德之貴。夫莫之爵。而常自然。故道生之畜之。長之育之。亭之毒之。養之覆之。生而不有。爲而不恃。長而不宰。是謂之玄德。

道之ヲ生ジ德之ヲ畜ヒ物之ヲ形シ勢之ヲ成ス是ヲ以テ萬物道ヲ尊ンデ德ヲ貴バザル莫シ道ノ尊キ德ノ貴キ夫レ之ヲ爵スルコト莫クシテ常ニ自ラ然リ。故ニ道之ヲ生ジ之ヲ畜ヒ之ヲ長ジ之ヲ育シ之ヲ亭シ之ヲ毒シ之ヲ養ヒ之ヲ覆フ生ジテ有セズ爲シテ特マズ長シテ宰タラズ是ヲ玄德ト謂フ。

道德合論章意は取り易いからザツト解し去る。道が萬物を生ずるはモウ分つてゐるが、徳畜之の徳は得といふ意義の字であるから、萬物に其の混沌たる一氣を各自に得させる。それが化育の意になるから畜ふと言つたもの。萬物は其物其物の形を見はす、見はすは自然の勢力で之を成す。道德形勢この四件の中、道と徳とが根本のものだから之を尊貴のものとせすばならぬ。其の道德の尊貴は爵位とか勳章とかそんなものを假りずに常に自然と尊貴で、尊貴其物が道德である。以下繰返していふ生・畜・

長・育はよからうが亭とは平といふ意だから萬物どれこれの別なく孰れも齊しく平らかに其の生を遂げさせる。毒は篇の假借だから直に耗損する様な粗製でない。覆は音がフでオホフ保護を加へる意になる。以下はモウよい。是が玄德』第十章の玄德と参照すべし。

## 第五十二章

天下有始。以爲天下母。既得其母。以知其子。既知其子。復守其母。沒身不殆。塞其兌。閉其門。終身不勤。開其兌。濟其事。終身不救。見小曰明。守柔曰強。用其光。復歸其明。無遺身殃。是謂襲常。

天下ニ始有リ以テ天下ノ母ト爲ル既ニ其ノ母ヲ得テ以テ其ノ子ヲ知リ既ニ其ノ子ヲ知リテ復タ其ノ母ヲ守レバ身ヲ没スルマデ殆カラズ。其ノ兌ヲ塞ギ其ノ門ヲ閉ヅレバ終身勤メズ其ノ兌ヲ開キ其ノ事ヲ濟セバ終身救ハレズ。小ヲ見ルヲ明ト曰ヒ柔ヲ守ルヲ強ト曰フ其ノ光ヲ用キテ其ノ明ニ復歸シ身ノ殃ヲ遺スコト無シ是ヲ襲常ト曰フ。

第一章及び四章に於て母と子との關係は既に明瞭になつてゐる。萬物を産み給うた母は道、既に其の母を知り得たなら、其の母より生れた子が誰であるかは知れる筈、又既に我は誰の子であるかど知れれば、其の母を大切に守らざるまい、母親の心を心として守つたなら一代の間危ひ目には遇はぬ是の子は即心である。性命は道が賦與したもの、イヤ心の中に道が、モグリ込んで居る。然るに知らぬ

が佛で親を忘れてゐるから情ない。即心即道と目が覺めるがよい。我が心内に天下の尊貴たる道が宿つて御座るとしたならば『其ノ免ヲ塞ギ其ノ門ヲ閉ヂ』之を守護せずばなるまい。免はアナだから耳目口鼻皆アナである。今其の耳目だけにすると、耳目の欲は動ともすると眩惑されて、尊貴の御心に曇りが掛るもの故、耳目のアナを塞いでしまつて、物に眩惑されない用心をし、モ一つ心の門を締めてしまつて靜かに落ち付かせる事だ。さうすれば身を終る迄勞せず優游と暮せるものヂヤ。若し其のアナを明けツ放しにして置いて事を濟さうとしやうものなら終身救はれないものヂヤ。心はラジエムが耿耿と小さく幽光を放つて居るやうなものだ。其の小なる光りを見得るのを自知の明とし、柔を守るを強とする、是は例の對語。其の心の光を消してしまはぬ様に何處迄も自知の明に立ち歸つて身の殃を遺さないのを襲常といふのである。常は眞常不易、襲は入るといふ意だから眞常の道に入ることになる』勤は勞○殃はワザワイ。

第五十三章

使我介然有知行於大道惟施是畏大道甚夷而民好徑朝甚除田甚蕪倉甚虛服文采帶利劍厭飲食資貨有餘是謂盜夸非道哉。

我ヲシテ介然ト知有ラシメバ大道ヲ行クニ惟施ナルコトヲ是レ畏ル大道ハ甚ダ夷ラカナレド而モ民ハ徑ヲ好ム。朝ハ甚ダ除レド田ハ甚ダ蕪レ倉ハ甚ダ虛シ文采ヲ服シ利劍ヲ帶シ飲食ニ厭キ資貨餘リ有リ

是ヲ盜夸ト謂フ道ニ非ザル哉。

若し己にお呪ひ程の智慧でもあらうものなら、一等道路のやうな道を行くとしても、只々其の大道が曲りうねつたものではないかなど、そればかり畏れてゐる。大道は坦坦として平かであるのに民は好んで小徑を歩きたがり、急がば廻れが分らない。以下大道を行かない治道を説く。朝廷の上は掃除されたやうに誠に善く治まつて見えるが、併し天下の田畑は荒れ果て、居り、倉廩はカラツボの明き屋同然だ。然るにも拘らず文武の百官は身に文采を服し腰に利劍を横へ、飲食に飽き足らつておまけに貨財に餘りがある、是の如きを吾は盜夸と呼ぶのだ。非道い奴共だ。民の膏血を絞つて仕たい三昧の其の贅澤、この盗人共めが……』介然。此處は僅かの意に見る○施。晴軒の考證は逆の字の假借と見る音はイとなるナ、メ微曲なり○文采は綾模様の派手やかなこと○盜夸の夸は華と通するこの考證があるが、今本字通りオゴルの意にする盗んで豪奢を極め込む○厭は食を付けて厭。

第五十四章

善建者不拔善抱者不脱子孫以祭祀不輟修之于身其德乃真修之于家其德乃餘修之于郷其德乃長修之于邦其德乃豐修之于天下其德乃普故以身觀身以家觀家以郷觀郷以邦觀邦以天下觀天下吾何以知天下之然哉以此。

善ク建ツル者ハ拔ケズ善ク抱ク者ハ脱セズ子孫以テ祭祀シテ輟マズ之ヲ身ニ修ムレバ其ノ德乃チ眞ニ之ヲ家ニ修ムレバ其ノ德乃チ餘リ之ヲ郷ニ修ムレバ其ノ德乃チ長ク之ヲ邦ニ修ムレバ其ノ德乃チ豊ニ之ヲ天下ニ修ムレバ其ノ德乃チ普シ。故ニ身ヲ以テ身ヲ觀家ヲ以テ家ヲ觀郷ヲ以テ郷ヲ觀邦ヲ以テ邦ヲ觀天下ヲ以テ天下ヲ觀ル。吾何ヲ以テ天下ノ然ルヲ知ルヤ此ヲ以テナリ。

此の章は天下國家の經營の上に就いて説く。建つとは徳を建つこと抱くとは守つて失はぬこと。創業に方り徳を基礎として建てた國は確乎不拔決して傾き覆るものでない。祖宗の創めた業を繼承して之を失はぬやうに守るならば、其の遺緒が失墜する憂はない。子孫綿綿亦其の徳に頼つて千秋萬歳に亘り祭祀が絶えない。以下之を擴充して身家郷邦等に及ぼして説くが解は省かう。それ故に古人が身を修めた物差を以て來て、之を其の身に當て、考へると其の寸法が適切に分る。郷邦亦然り。吾何うして天下もさうであるかを知るかと問はれたら、善建善抱が天下を經營する眞理を知つたからと云はう。

### 第五十五章

含德之厚。比于赤子。毒蟲不螫。猛獸不據。攫鳥不搏。骨弱筋柔而握固。未知牝牡之合而峻作。精之至也。終日號而嗑。不嗔。和之至也。知和曰常。知常曰明。益生曰祥。心使氣曰強。物壯則老。謂之不道。不道早已。

含德ノ厚キハ赤子ニ比ス毒獸螫サズ猛獸據ラズ攫鳥搏タズ骨弱ク筋柔カニシテ握ルコト固シ未ダ牝牡

ノ合フヲ知ラズシテ峻作ルハ精ノ至リナリ終日號ビテ嗑レザルハ和ノ至リナリ。和ヲ知ルヲ常ト曰ヒ常ヲ知ルヲ明ト曰ヒ生ヲ益スヲ祥ト曰ヒ心、氣ヲ使フヲ強ト曰フ。物壯ナレバ則老ユ之ヲ不道ト謂フ不道ハ早ク已メヨ。

第十章を参照してみる。此の徳は混沌一氣より受けたもの、それを失はずに含み藏めて洩らさないから厚徳、厚徳なること赤子に比し得るものならば……以下五十章のやうな形容になる。毒蟲にも螫されず、猛獸にも押へ付けられず、人を攫む恐ろしい鳥にも撃たれない。赤ン坊の筋骨は柔弱のやうでも固く握り締めるどなかな、強いもの、まだ男女の交合など知らぬのに可愛らしいチン／＼が勃起する。是れ精氣といふものが散じて洩れない至極のものだ。終日オギャア／＼と大聲揚げて號きあかしても咽喉がハシヤいで聲が嘎れてしまはない。是は和の徳の至極のものである。嬰兒を見れば氣を專にし精を洩さぬ其の妙用が窺ひ知られるでないか。和を知るが常、常を知るが明。是は十六章を參觀すると分る。但和とは今あつた和で冲和の一氣と見る。生を益するのが祥、自然の儘にせず生まじい智慧を振り舞はして我が生を益しやうとするのは却つて禍を招くもの、心が氣を使つて行くのが強、強は和でない。物強壯なればガリタリ老衰する、老衰は不道のもの、不道と知つたら早く已めて專精致和と行くがよい。此の章は治心の要を説くもの○不據。據は爪でヒツ搔くこと又押へ付ける○搏。羽ばたき打つ○峻は音ズイ赤ン坊のチンチン○作はオコルと讀む○嗑は咽喉の上部の處○祥は吉凶兩方面に用ゐらる此處は不吉の方。

## 第五十六章

知者不言。言者不知。塞其兌。閉其門。挫其銳。解其紛。和其光。同其塵。是謂玄同。不可得而親。不可得而疏。不可得而利。不可得而害。不可得而貴。不可得而賤。故爲天下貴。

知ル者ハ言ハズ言フ者ハ知ラズ其ノ兌ヲ塞ギ其ノ門ヲ閉ヂ其ノ銳ヲ挫キ其ノ紛ヲ解キ其ノ光ヲ和ラゲ其ノ塵ヲ同ジウス是ヲ玄同ト謂フ。得テ親ム可カラズ得テ疏ンズ可カラズ得テ利ス可カラズ得テ害ス可カラズ得テ貴クス可カラズ得テ賤シクス可カラズ故ニ天下ノ貴ト爲ス(又タリ) 塞兌は五十二章、挫銳は四章、和光も四章。それが玄同。親むことも疏んすることも利することも害することも、又貴うすることも賤うすることも出来ないものが玄同である。玄同の徳は天下の貴きものだ。各章參觀。不言實行其の守りを失はぬ意。

## 第五十七章

以正治國。以奇用兵。以無事取天下。吾何以知其然哉。以此。夫天下多忌諱。而民彌貧。民多利器。國家滋昏。人多技巧。奇物滋起。法令滋彰。盜

賊多有。故聖人云。我無爲而民自化。我好靜而民自正。我無事而民自富。我無欲而民自樸。

正ヲ以テ國ヲ治メ奇ヲ以テ兵ヲ用キ無事ヲ以テ天下ヲ取ル吾何ヲ以テ其ノ然ルヲ知ルヤ此ヲ以テナリ夫レ天下ニ忌諱多クシテ民彌々貧シク民ニ利器多クシテ國家滋々昏ク人ニ技巧多クシテ奇物滋々起リ法令滋々彰ハレテ盜賊多ク有リ。故ニ聖人云フ我無爲ニシテ民自ラ化シ我靜ヲ好ミテ民自ラ正シク我無事ニシテ民自ラ富ミ我無欲ニシテ民自ラ樸ナリト。

最初の以正治國より、以化に至る二十三字は一番終りに在るべきだと晴軒云ふ。文脈を案じ、又他の章を見るに允當の言と思ふ。正道を以て國を治め、人の意表に出づる策を以て兵を用ゐ、無爲を以て天下を取る。吾何で其の然るを知るかといへば此を以てある。以下が其の説明となる。忌諱は防禁といふ意。殺生禁斷の場所を設ける、意は魚なり鳥なりを繁殖させて民の生を厚からしめやうとする趣旨であつたのだが、後世其の趣旨が没却されて、徒に民を困らせるやうになつた。是は例話だが、下に斯る防禁的施設があると民人は防害されて結果は愈々貧乏となる。利器は三十六章の利器で、民が智慧付くと一筋縄で往けぬ者となり、法網を潜つて善くない事をする、従つて多事となつて國家は益々紛擾になるばかり、人の手業が器用になつて來ると、色々新奇な珍らしいものが出來て耳目を眩惑させる。法令ばかりを當てにして益々成文が彰著になると、驚き處か却つて盜賊がはびこるものである。故に聖人云ふ。以下の語は自ら明白であらう。昏はクラシ暗くなつて擾れる。

第五十八章

其政悶悶。其民淳淳。其政察察。其民缺缺。禍兮福之所倚。福兮禍之所伏。孰知其極。其無正邪。正復爲奇。善復爲妖。民之迷其日固已久矣。是以聖人方而不割。廉而不剡。直而不肆。光而不耀。

其ノ政悶悶タルバ其ノ民淳淳タリ其ノ政察察タルバ其ノ民缺缺タリ禍ヤ福ノ倚ル所福ヤ禍ノ伏ス所孰カ其ノ極ヲ知ラン其レ正無キ邪正復タ奇ト爲リ善復タ妖ト爲ル民ノ迷ヘル其ノ日固ニ已ニ久シ。是ヲ以テ聖人ハ方ニシテ割カズ廉ニシテ剡ナラズ直ニシテ肆ナラズ光アリテ耀カサズ。

政治の遣り方が悶悶と智を隠してヌー、ポー、式に暗いやうにも思はせる様にすると其の國民は淳樸になる。楊枝で重箱の隅をほちくる様にイラヒドイ探偵眼で臨んだら、國民は缺缺と淳樸が缺けて危険性を帯び來り機變の智を弄するやうになる。禍福相因る理法から見ると福の中には禍が何時の間にもやら倚つて居り、禍の中には何時か又福が隠れ忍んで居る、世間誰か是の因果の極致を知る者ぞ。それは極まつて常といふものがないからでもあらうか。常だと思つた事も復た變じて奇となつたり、善と思つた事も復た變じて妖となつたりする目狂はしい有爲轉變の世の中、その因果の波に漂はされて津涯に迷つて居ること久しい民！思へば氣の毒千萬、本を糺せば政治の遣り方が悪いのに歸するのヂヤ。故に聖人の政は悶悶で大まかヂヤ。方正ではあるけれど刀で割つて殺いだ様でなく、廉隅はあるもの、

角々しさが物を傷つけるやうには角立てぬ。真直ぐではあるが、無遠慮に伸び切つて物を突くやうにせぬ。光りはあれど其の光りをケバ／＼しく輝き示さない。さうした心術で政に従ふのである。悶悶は暗い有様にいふ。○察は苛察でイラヒドク調べる。○缺缺は不足とするが普通、缺望などの意だが今民俗が敗れ缺けた險薄の説に従ふ。○極は盡くる。○正は定で常の意。○奇は其の常の反對。○善は祥に屬し下の妖に對す。○剡は傷つる。○肆は思ひのまゝに伸びる。

第五十九章

治人事天。莫若嗇。夫唯嗇。是以早復。早復謂之重積德。重積德則莫不克。無不克則莫知其極。莫知其極。可以有國。有國之母。可以長久。是謂深根固柢。長生久視之道也。

人ヲ治メ天ニ事フルハ嗇ニ若クハ莫シ夫レ唯嗇ナリ是ヲ以テ早ク復ル早ク復ル之ヲ重ネテ德ヲ積ムト謂フ重ネテ德ヲ積メバ則ク克セザル無ク克セザル無ケレバ則ク其ノ極ヲ知ルコト莫ク其ノ極ヲ知ルコト莫ケレバ以テ國ヲ有ツ可ク國ヲ有ツノ母ハ以テ長久ナル可シ是ヲ深根固柢ト謂フ長生久視ノ道ナリ。

人民を治めて天意に叶ふべく之に事へんとするには嗇に越した遣り方はない。嗇とは諸説一定しないが今司馬光朱熹の二説を參酌してみると精を嗇むとなる。精は五十五章中に見える精で、其の精を始末して矢鱈に洩し傷らない。それが出来れば早く復することが出来る。復することは性命の原に立ち歸



られる。洩らさず傷らない精が存してゐる上に、今又立ち歸るものがあるとするれば、有るが上に徳が重なる次第である。徳は矢張五十五章の徳で、斯く徳が重なるならば鬼に金棒天下の事能くせざることなからう。能くせざることなきに至らば大きなもの、民其の奥底を窺ふことが出来ない。是の域に達した上で始めて國家を有することが出来る。國家を有する母即天子は長久に亘りて天に代つて民を治めることが出来る。是が根柢を深固にする所以で、長生を保ち久しく此の世に視息する道であるのだ。』  
齋は客齋でオシム○早復は早く性命の始めに立歸る○克は能くする○根柢の柢は直根、牛蒡根で地に入る深し○視息は生きて居る意○此の章は攝生治道兩方面に亘る。

第六十章

治。大國若烹小鮮。以道蒞天下。其鬼不神。非其鬼不神。其神不傷人。非其神不傷人。聖人亦不傷。夫兩不相傷。故德交歸焉。

大國ヲ治ムルハ小鮮ヲ烹ルガ若シ道ヲ以テ天下ニ蒞メバ其ノ鬼ハ神ナラズ其ノ鬼ノ神ナラザルノミニ非ズ其ノ神、人ヲ傷ラズ其ノ神ノ人ヲ傷ラザルノミニ非ズ聖人モ亦傷ラズ。夫レ兩ナガラ相傷ラズ故ニ德交々歸ス。

上章を承けて説く。大國を治めるのは何の事はない雜魚を烹るやうなものヂヤ。無闇に箸でヒツ掻き廻はすと雜魚は崩れてしまふ、ソートして置けば自然に烹える。今無爲の治を天下に施したならば、

人民ごころか鬼神までそれに調子を合せて、濫りに民に罰を當てたり幸福を授けたりして其の御威光を振り廻はさないやうになる。聖人が信賞必罰的峻嚴の政刑で民を傷つけないし、鬼神も亦同様禍福を降して民を傷けない、兩方ともに民を傷つけないとしたら、鍋の中の雜魚連も崩れずに無事に烹えらう。故に聖人は聖人としての徳を全うして天下其の徳に歸し、鬼神亦鬼神の徳をアラ高になされて民其の御威徳に歸依することにならう。小鮮。小さな鮮魚○不神とは神様らしくない。即神威が少々下落して禍福を降す消息が餘り明らかたなくなる○老子が鬼神を認めた語は是が始めてある。思想上着目すべき章と思ふ。併し語は餘り感服せぬ。

第六十一章

大國者下流。天下之交。天下之牝。牝常以靜勝牡。以靜爲下。故大國以下小國。則取小國。小國以下大國。則取大國。故或下以取。或下而取。大國不過欲兼畜人。小國不過欲入人事。夫兩者各得其所。欲。故大者宜爲下。

大國ハ下流ナリ天下ノ交ナリ天下ノ牝ナリ牝ハ常ニ靜ヲ以テ牡ニ勝チ靜ヲ以テ下ルコトヲ爲ス。故ニ大國以テ小國ニ下レバ則小國ヲ取リ小國以テ大國ニ下レバ則大國ニ取ラル。故ニ或ハ下リテ以テ取リ或ハ下リテ取ラル。大國ハ人ヲ兼ネ畜ハント欲スルニ過ギズ小國ハ入リテ人ニ事ヘント欲スルニ過ギ

ズ。夫レ兩者各其ノ欲スル所ヲ得故ニ大ナル者ハ宜シク下ルコトヲ爲スベシ。  
 大國は譬へてみたら川の下流のやうなものだ。衆流が之に流れ込むから益々深く大きくなるばかり、  
 又天下の交會といつて四方から物資が交々集つて来る處だ。モ一つ大國は天下の牝のものだと合點せ  
 ねばならぬ。何故といへば牝はメスであるから常に能く靜の徳を以てすべきだ。靜で牡に勝てる即柔  
 能く剛を制する理になる。故に大國といふを待ます何處までも靜の徳で他の小國に下ることをせずば  
 なるまい。大國が是の態度で小國に下れば小國の民心を得る。小國は言ふにや及ぶ。大國に下るなら  
 ば大國に容れられる。丁度衆流が流れ込むと一方それを受け容れるやうなものだ。デあるから或は下  
 つて小國の民心を得、或は同じく下つて大國に容れられる。大國は物資豊富であるから、其餘力を  
 以て兼ねて他の小國の人をも養はうと欲するに過ぎず、小國は又それに取り入つて大國の人に事へや  
 うと欲するに過ぎなかつたならば、大國も小國も各々其の欲する所を得て旨い工合に行くものだ。故  
 に大は宜しく小に下るべしと教へて置から』天下の牝を配と晴軒は説くが、さう迄しなくても分る○  
 取は民心を得る。

## 第六十一章

道者萬物之與善人之寶。不善人之所保。美言可以市。尊行可以加人。  
 人之不善。何棄之有。故立天子。置三公。雖有拱璧以先駟馬。不如坐進  
 此道。古之所謂貴此道者何也。不曰求以得。有罪以免邪。故爲天下貴。

道ハ萬物ノ與善人ノ寶不善人ノ保スル所ナリ。美言以テ市ル可ク尊行以テ人ニ加ス可シ人ノ不善ナル  
 モ何ノ棄ツルコトカ之レ有ラン。故ニ天子ヲ立テ三公ヲ置ク拱璧ノ以テ駟馬ニ先ダツ有リト雖モ坐シ  
 テ此ノ道ヲ進ムルニ如カズ。古ノ此ノ道ヲ貴ブ所以ノ者ハ何ゾヤ求ムレバ以テ得罪有リテモ以テ免ル  
 ルト曰ハズ邪故ニ天下ノ貴ト爲ス(又タリ)

此の章は寶の字が主眼、故に市・棄・拱璧等の文字が出て来る道は萬物の與の院ヂヤ。奥とは室の西南  
 隅尊者の居間、奥深くて見え難いに譬へる。次は對句では是はよし。不善人は敢て惡人ごまで見ないで  
 一般凡庸の者とする。保は堡で保障などの意。道は至寶のものだから凡庸の者は自分の寶とする迄に  
 は行かぬけれど、只寄つてタカつて之を保護するばかりのものヂヤ。道から出た美言は賣物になる立  
 派な寶ヂヤ。又道から出た尊き行は人に加へ……此の字を假の字にして見る。スルト人にも其の行に  
 倣はせることを許す意になる。假は假貸だから……又一般の凡庸だとして、かほどの至寶を何で棄てる  
 なんてそんな事をしやう。故に天子を立て三公を置いて國を治めさすのだが、其の天子及び三公は道  
 を以て寶とせねばならぬ。さらば大きな璧を献上するよりか、坐ながら此の道を進獻した方が宜しい  
 昔から斯道を貴ぶ譯は如何と來たら道は心に之を求めれば何時にても得られ、彼の得難き拱璧のやう  
 なものでなく、又罪ある人も道に立ち歸つて改悛したならば、其の罪を免れる事もあると言はれてあ  
 るぢやないか。天下に是程貴き物があらうか。故に道は天下の貴い寶である』美言は善言格言○市は  
 賣る○拱璧は大きな玉、拱は兩手で圍む程といふこと大きい形容○先駟馬。周時代の風俗、人に物を  
 贈るには璧を添へる。今駟馬を人に贈らうとすると、其の馬を門外に陳ね置き、先づ璧を奉じ入りて

第六十三章

爲無爲事無事。味無味。大小多少。報怨以德。圖難於其易。爲大於其細。天下難事。必作於易。天下大事。必作於細。是以聖人終不爲大。故能成其大。夫輕諾必寡信。多易必多難。是以聖人猶難之。故終無難。

無爲ヲ爲シ無事ヲ事トシ無味ヲ味ヒ小ヲ大ナリトシ少ヲ多ナリトシ怨ミニ報ユルニ德ヲ以テシ難ヲ其ノ易ニ圖リ大ヲ其ノ細ニ爲ス。天下ノ難事ハ必ズ易ヨリ作リ天下ノ大事ハ必ズ細ヨリ作ル。是ヲ以テ聖人ハ終ニ大ヲ爲サズ故ニ能ク其ノ大ヲ成ス。夫レ輕諾ハ必ズ信寡ク易多ケレバ必ズ難多シ是ヲ以テ聖人ハ猶之ヲ難シトス故ニ終ニ難キコト無シ。

此の章は文義が通じないとあつて晴軒は別に考定する所があるが、マア從來の本に従つて置かう。章意は微細なる事を謹めよになる。冒頭三句の思想は既に分つてゐる。次ぎ大小多少を捧讀にしてはいけない。『小ヲ大ナリトシ少ヲ多ナリトス』といふ様に扱ふと下文に應じて意が明らかになる。即小事を小事とせず大事として之を扱ひ、少きものを少いと輕しめないで多いものに對する態度に出る。怨みのシツ、ベ、返、しに同じく怨みで行くのが常情だが、其處をズツト違つた道德的に出る。是は論語にもある句だ。容易の事だと油断をすると、それが或は困難を惹起することとなるから、前の『小ナル

ヲ大ナリトス』る筆法で、易を扱ふ中に難を心に豫想して其の手段を取るがよい。次ぎの句は之に準ずる。而して更に次ぎの二句は及を迎へて解けて行く。是故に聖人は大を爲さうとする意があるのでないが、其の無爲無事が能く大を成す所以となる。夫れ安受合ひの者には信實が伴はない。容易な事ばかり多く遣つて居る者は難事多いと知れ。是を以て聖人は易い事をも六ヶ敷いものと戒懼するからこそ難事がないことになるのだ。切れ／＼になつて居る様でもあるが、斯んな工合ひにも解ける。

第六十四章

其安易持。其未兆易謀。其脆易破。其微易散。爲之於未有。治之於未亂。合抱之木。生於毫末。九層之臺。起於累土。千里之行。始於足下。爲者敗之。執之失之。聖人無爲故無敗。無執故無失。民之從事。常於幾成而敗之。慎終如始。則無敗事。是以聖人欲不欲。不貴難得之貨。學不學。復衆人之所過。以輔萬物之自然。而不敢爲。

其ノ安キハ持シ易ク其ノ未ダ兆サハ謀リ易ク其ノ脆キハ破リ易ク其ノ微ナルハ散ジ易シ之ヲ未ダ有ラザルニ爲シ之ヲ未ダ亂レザルニ治ム。合抱ノ木ハ毫末ヨリ生シ九層ノ臺ハ累土ヨリ起リ千里ノ行ハ足下ヨリ始マル。爲ス者ハ之ヲ敗リ執ル者ハ之ヲ失フ聖人ハ爲スコト無シ故ニ敗ル、コト無シ執ル

コト無シ故ニ失フコト無シ。民ノ事ニ從フヤ常ニ幾ンド成ルニ於テ之ヲ敗ル終リヲ慎ムコト始メノ如クナレバ則事ヲ敗ルコト無シ。是ヲ以テ聖人ハ欲セザルヲ欲シ得難キノ貨ヲ貴バズ學バザルヲ學ビテ衆人ノ過グル所ニ復リ以テ萬物ノ自然ヲ輔ケ而シテ敢テ爲サズ。

此の章も前章同様錯簡だといふが、矢張從來の儘にして置く。國家を支持する心得と人の事に従ふ上に就いての心得に及ぶ。其の國家が無事平穩であれば、それを支持して行くのは易いこと、其國家に禍亂の前兆がまだ見えない前に、豫め禍亂を未萌に防ぎ止める方策を立てるのも易いことだ。よし禍亂として生え立てのホヤ／＼の脆弱な芽生えならば破り易いし、又其の勢力が微弱たるものであるならば是も逐つ拂ひ易い。要するに兆候の無い前に無い様にして置き、禍亂など起らぬ前に起らぬ様に治めて行くべきだ。以下形容となる。一抱へもある大木も本はといへば至極微細な芽から、九層の高い臺も一簣の土から積み上げたもの、千里の遠方へ行くにも一足から始まる、何でも是の通り末は大きくなるものだ。無理に事をしやうとすると失敗に終り、無理に執へやうとすると得て逃がすものぢや、聖人は無爲無事の境に心を置く、仕ない事が失敗する筈なく、執へないものを逃がす氣遣ひはない。民の事に従ふのを見るに孰れも其の事業がやがて完成といふ處でバタリ駄目になる。言はぬことではない、終りを慎むことが始めの様であるなら失敗に歸するものではない。是を以て聖人は不欲といふことを以てそれを心の欲として居り得がたい貨財などは貴ばない。不學といふことを以てそれを心の學として居て、一般人が見ても見ぬ振りをして通り抜けてしまふ所に立ち歸つて居る。即性命の原に復し、以て自然の儘なる所の萬物を輔導して、自分は強ひて手を出して彼此と事はなさぬのである」

兆はキザシ○合抱。左右の手で抱く即一抱へ○毫末は毫毛の末で極く微細なこと今芽と見る○幾成。幾はチカシ又はホトンド

### 第六十五章

古之善爲道者。非以明民。將以愚民。民之難治。以其智多。故以智治國。國之賊。不以智治國。國之福。知此兩者。亦楷式。能知楷式。是謂玄德。玄德深矣。遠矣。與物反矣。乃至於大順。

古ノ善ク道ヲ爲ス者ハ以テ民ヲ明ラカニセントスルニハ非ズ將ニ以テ之ヲ愚ニセントスルナリ民ノ治メ難キハ其ノ智多キヲ以テナリ。故ニ智ヲ以テ國ヲ治ムルハ國ノ賊ナリ智ヲ以テ國ヲ治メザルハ國ノ福ナリ此ノ兩者ヲ知ルモ亦楷式ナリ能ク楷式ヲ知ル是ヲ玄德ト謂フ。玄德ハ深シ遠シ物ト反シテ乃チ大順ニ至ル。

此の章は老子が當時の實狀に驚くの餘り發した悲憤の語とも見られる。愚民政策亦味ある哉。余は熟々さう思ふ。秦の始皇帝は是の策に出た古今の大英斷であつたが、惜いことには自分が愚にならなかつたから天下を失つた。民にはばかり愚を強ひては片手落のものといふに氣が付かなかつた。ツマリ智に誤られたのだ。此處の智は眞智でなく機變巧詐の智カラクツてベテンに掛けるやうな惡智惠。上古の時眞によく道を修めた聖人が天下を治めた遣り方を見ると、民を明智のものにしやうとはせて、却

つて民を愚昧のものにしやうとされた。それは民の治め悪ひのは智慧が多くなり過ぎるからである。故に智を以て國を治めるは國家を賊害することになり、智で治めないと國家の幸福になる。此の二つの譯が分る者は楷式こいつて模範であり法則である。能く其の楷式に通ずるのを玄徳といふ。玄徳は深遠のもので、其の遣り方が普通とは違ふ、智を貴ぶが普通だらうに玄徳ある者は反對に之を賤しめる。智巧などは弄せず自然の儘なる至順の所に落ち付く』十章の玄徳と参照。

## 第六十六章

江。海。所。以。能。爲。百。谷。王。者。以。其。能。下。之。故。能。爲。百。谷。王。是。以。聖。人。欲。上。民。必。以。言。下。之。欲。先。之。必。以。身。後。之。是。以。聖。人。處。上。而。民。不。重。處。前。而。民。不。害。是。以。天。下。樂。推。而。不。厭。以。其。不。爭。故。天。下。莫。能。與。之。爭。

江海ノ能ク百谷ノ王タル所以ハ其ノ善ク之ニ下ルヲ以テ故ニ能ク百谷ノ王ト爲ル。是ヲ以テ聖人ハ民ニ上タラント欲スレバ必ズ言ヲ以テ之ニ下リ民ニ先ダ、ント欲スレバ必ズ身ヲ以テ之ニ後ル。是ヲ以テ聖人ハ上ニ處ルモ民重シトセズ前ニ處ルモ民害トセズ是ヲ以テ天下推スコトヲ樂ミテ厭ハズ。其ノ争ハザルヲ以テノ故ニ天下能ク之ト争フ莫シ。

江海が能く百谷の王様になつて居られる譯は、江海が能く百谷にへり下つて居るからこそ百谷の王様になつて居られるのだ。是の故に聖人が國民の上に立たうとすると必ず言葉を以て國民に卑下する又民より先になりたいたと思ふと却つて身を退いて之に後れる。七章の『聖人ハ其ノ身ヲ後ニシテ而モ身先タツ』と同意。是を以て聖人は上に居ても民が押し付けられて居るやうな重苦しい感を持たない。又前に居ても民が自分達の邪魔物とは思はない。是を以て天下の民人之を推戴するを樂みて厭ひはせぬ。民と争はないで之に下ること江海のやうであるから、天下も之と争はず柔順に之に流れ込むのである』章意は大抵六十一章と同じ〇以言下之は孤寡不穀の類。

## 第六十七章

天。下。皆。謂。我。大。似。不。肖。夫。惟。大。故。似。不。肖。若。肖。久。矣。其。細。我。有。三。寶。寶。而。持。之。一。曰。慈。二。曰。儉。三。曰。不。敢。爲。天。下。先。慈。故。能。勇。儉。故。能。廣。不。敢。爲。天。下。先。故。能。成。器。長。今。捨。慈。且。勇。捨。儉。且。廣。捨。後。且。先。死。矣。夫。慈。以。戰。則。勝。以。守。則。固。天。將。救。之。以。慈。衛。之。

天下皆我ヲ大ナレドモ不肖ニ似タリト謂フ夫レ唯大ナリ故ニ不肖ニ似タリ若シ肖ルナラバ久シイカナ其ノ細ナルコト。我ニ三寶有リ寶トシテ之ヲ持ス一ニ曰ク慈二ニ曰ク儉三ニ曰ク敢テ天下ノ先ト爲ラズ慈ナルガ故ニ能ク勇ナリ儉ナルガ故ニ能ク廣シ敢テ天下ノ先ト爲ラザルガ故ニ能ク器長ヲ成ス。今慈ヲ捨テ且ニ勇ナラントシ儉ヲ捨テ、且ニ廣カラントシ後ル、ヲ捨テ、且ニ先ンセントセバ死セン。

夫レ慈以テ戰ヘバ則勝チ以テ守レバ則固ク天將ニ之ヲ救ハントス慈ヲ以テ之ヲ衛レバナリ。  
 天下の人が皆俺の事を大男智慧總身に廻り兼ねなど評してゐる。成程俺は大きい八尺八寸ある。だが世間の者がいふ大きいとは俺の身材の事ばかりで、外の大きい事は知らぬやうだ。大！結構。大であるから人が見たら馬鹿の様に思へるだらう。若し俺が世人の思ふ様な風に利口者であつたなら、俺はコセ／＼した小さい器の人間に出来上つてしまつたであらうヨ。我に三寶あり、我が寶物として大切に維持守護して居る。其の三寶と申すのは一に慈二に儉三に敢て天下の先と爲らぬ、是だ。慈寶があるから能く勇ヂヤ。見なさい鳥獸に至る迄其の兒に乳房を銜ませる時の母の勇、あれは慈悲の勇ヂヤ儉寶があるから自ら奉ずることは儉約であるが、衆を救済する所は廣い範圍に渡つて居る。是は單に錢金の事ばかりぢやない、心の徳か儉だぞよ。進んで天下の先とならぬ謙寶があるから、天下の者と智慧競べなごせぬ。故に人が見たら大きいばかりで馬鹿のやうに思へるだらう。けれど俺は其の利口者を使つて出る所の器長たる徳を成す者ヂヤ。今俺が大切な慈寶を捨て、世間並みの勇者たらんごしたり、儉寶を捨て、世間並みの廣き意のものにならうごしたり、謙寶を捨て、天下の先とならうごしたならば、俺といふものが亡くなつてしまふ、精神的に死んだものとなる。夫れ慈を以て戰へば勝ち、慈を以て守れば堅固である。天は照鑒なされて、之を救ふであらう。慈を以て我が身の護本尊としてゐるからだ』不肖は何等材能なき者○細は小さなものに出來上つた意○成器長は諸説ある器長は官長といふやうな意。成器の長と扱ふ人もある。二十八章參照○主宰的意味を持たせた天は此の章が始めである。

## 第六十八章

善爲士者不武。善戰者不怒。善勝者不與。善用入者爲之下。是謂不爭之德。是謂用人之力。是謂配天。古之極。

善ク士タル者ハ武ハズ善ク戰フ者ハ怒ラズ善ク勝ツ者ハ與セズ善ク人ヲ用キル者ハ之ガ下ト爲ル是ヲ不爭ノ徳ト謂ヒ是ヲ人ヲ用キルノカト謂ヒ是ヲ天ニ配スト謂フ右ノ極ナリ。

此の士は單なる兵士でなく兵を帥ゐる者。善戰者同じく將である。武は競ふ意味だから、敵に對して競ひ掛つて輕進したり、又憤怒に驅られて妄動したりするは善戰の將士でない。善く天下に勝つ者は與せずと云つて敵を與みし易しと見くびつて輕しめない、是が不爭の徳である善く人を用ゐる者は人に下る、是が人を用ゐる力量ある者といへる。此の二者を併せて評すると天に配するといへる。是は王者の事で古道の極みのものである』配天の配は配合で天の徳に合することに足ること○極は道と見てもよい。

## 第六十九章

用兵有言。吾不敢爲主而爲賓。不敢進寸而退尺。是謂行無行。攘無臂。仍無敵。執無兵。禍莫大於輕敵。輕敵幾喪吾寶。故抗兵相加。哀者勝矣。

兵ヲ用キルモノ言ヘルコト有リ吾敢テ主ト爲ラズシテ客ト爲リ敢テ寸ヲ進メズシテ尺ヲ退クト。是ヲ行ルニ行無ク攘グルニ臂無ク仍クニ敵無ク執ルニ兵無シト謂フ。禍ハ敵ヲ輕ンズルヨリ大ナル莫シ敵ヲ輕ンズレバ幾ンド吾ガ寶ヲ喪フ。故ニ兵ヲ抗ゲ相加フルトキ哀ム者ハ勝ツ。古の用兵家の言葉に、吾敢て戦争を起す主にはならない。向ふから戦端を開いて我に臨むから已むなく之に應ずる。言はゞ御相手迄にする。吾戦ひは本意でないから敢て一寸たりとも軍を進めて敵をやめやうとはせぬ。突いて来る鋭鋒を避ける爲めには一尺も後退しやうといふが善い言葉ヂヤ。是を行進させやうとしても隊列が無いやうなものだとも云へる。腕巻りしやうとしても臂がないやうなものだとも云へる。近づいてみやうとしても敵がないやうなものだとも云へる。執らうとしても及物が無いやうなものだとも云へる。暖簾に腕押しは秘訣のものヂヤ。禍は敵人の命を輕視するより大きいことはない。同じく人である。然るに其の命を輕視するならば、吾が三寶たる慈を失ふことになる。故に兵を擧げて敵に加へるとしても、此の戰の爲めに生命を棄てる者のあるを哀み痛む仁者は勝利を得る。彼の古の用兵家の言は道理ある言葉である。』行無行。上の行はヤル即行進させる意だが下の行は行伍の事で隊伍〇仍は就く〇輕敵これは單に敵を輕んずると見ない方が有意義〇抗兵の抗はアゲルと訓ず。

## 第七十章

吾言甚易知易行。天下莫能知莫能行。言有宗事有君。夫唯無知是以

不我知。知我者希則我貴矣。是以聖人被褐懷玉。

吾ガ言ハ甚ダ知リ易ク甚ダ行ヒ易シ天下能ク知ル莫ク能ク行フ莫シ。言ニハ宗有アリ事ニハ君有リ夫レ唯知ル無シ是ヲ以テ我ヲ知ラズ我ヲ知ル者希ナレバ則我ハ貴シ。是ヲ以テ聖人ハ褐ヲ衣テ玉ヲ懷ク。

俺が言ふ所は甚だ分り易く行ひ易いのに、天下の人達が能く了解もせず又能く行つてみやうともしない。言葉には總本家筋のものがあつて、事柄には人の上に立つ君主のやうなものがある。俺が言葉はそれヂヤ。然るに一般の衆は其處を知つて呉れないから、従つて俺を知らぬことになる。俺を知る者が少ないので、俺が貴いことになる。ザラにある者ならば貴いとはせられない。是を以て聖人は粗末な毛布に寶玉を包んで置く、玉の光り外人誰が知らうぞ』被褐。褐は毛布で賤民の服〇此の章深意なし。

## 第七十一章

知不知上。不知知病。夫唯病病。是以不病。聖人不病。以其病病。是以不病。

知リテ知ラズトスルハ上ナリ知ラズシテ知ルトスルハ病ナリ夫唯病ヲ病ム是ヲ以テ病マズ聖人ハ病マズ其ノ病ヲ病ムヲ以テ是ヲ以テ病マズ。

天下の事物は知るに従つて愈々益々多く、知れば知る程知らぬことが多くなるもの故知つて知らずと

するのが上。何んにも知らない癖に知つた振りをするのは病。病とは患害、聞いた風で遣ると何んな患害が来るか分らぬ。外から来る患害を憂へるから患害はない譯になる。聖人にさうした憂ひのないのは、其の患害を憂ひて豫め患害が来ないやうにして居るから患害がないのである』病。八字目の病は患害、十一字目のはヤムの意で憂へる心配すること、十二字十六字目は共に患害以下推考あるべし語を重ねたゞけて深味も何にもない。

## 第七十二章

民不畏威。大威至矣。無狹其所居。無厭其所生。夫唯不厭。是以不厭。是以聖人自知不自見。自愛不自貴。故去彼取此。

民威ヲ畏レザレバ天威至ル其ノ居ル所ヲ狹シトスル無ク其ノ生レシ所ヲ厭フコト無レ夫レ唯厭ハズ是ヲ以テ厭ハレズ。是ヲ以テ聖人ハ自ら知レドモ自ら見サズ自ら愛スレドモ自ら貴バズ故ニ彼ヲ去リ此ヲ取ル。

威が何であるか諸説一定しない。今天威に從ふ民は天威を畏れない向ふ見ずの輩が多い。大威は刑戮の事僅ばかりでも智能があると自分の居村を鼻が支へるやうに狭いものに思ひ、生れ落ちから育つた土地を嫌ふやうになり、世間を跨に掛けて何かしてみやうなゴトンデもない不了簡を起し、遂には刑罰に觸れるやうな羽目になるものぢやテ。夫れ生れ故郷を厭はずに後生大事に家業を遣つて行けば

土地の者にも厭はれない。是はマア話の一例で萬事が斯んな調子のもの。故に聖人は自己を知るを第一とし、自分自ら我が智能を人に示さない。又自ら其の智能を愛することは愛するが、それをさも貴いものとはせぬ。それであるから我が智に誤まられて刑場の人となるやうな事はない。彼とは智能此とは道になる』無狹・無厭の無はナカレと扱ふ○天威。天命でもよからう。

## 第七十三章

勇於敢則殺。勇於不敢則活。此兩者或利或害。天之所惡。孰知其故。是以聖人猶難之。天之道不爭而善勝。不言而善應。不召而自來。坦然而善謀。天網恢恢。疎而不失。

敢ニ勇ナレバ則殺シ不敢ニ勇ナレバ則活ス此ノ兩者ハ利或リ害或リ天ノ惡ム所孰カ其ノ故ヲ知ラン是ヲ以テ聖人モ猶之ヲ難シトス天ノ道ハ争ハズシテ善ク勝ヘ言ハズシテ善ク應ジ召カズシテ自ら來リ坦然トシテ善ク謀ル天網恢恢疎ニシテ失ハズ。

此の章は前章の意を承くる所ありて刑法に及ぶ。敢は果敢と熟する語、此處は疑獄事件でもあつた時と假定する。秋官が一刀兩斷の果敢で遣るといふことに勇であれば殺すこととなり、又奇語であるが『不敢に勇』と云つて殺すことを敢てしないといふことに勇であれば活かすこととなる。此の兩者の遣り口に就いて考察せんに、元來が疑獄であるから真相のハツキリしてゐない事は言ふ迄もない。然



るに漫に天意を推測して處分するのは、殺すにしても活かすにしても孰れにした處で利害が相伴ふもの、誰か能く天の惡み給ふ所を見定めることが出來よう、出來はせぬから聖人と雖も獄を斷することは六ヶ敷いものとしてある。況や凡庸の徒をやだ。以下推測することの出來ぬ天道を説く。天道といふものは自然のもので、縦令へば勢威赫灼たる横暴の者がありとするも、所謂ホコ盛りに神崇りなしで、其の爲すが儘にして置き、下り阪になつた處で之を成敗なされる。是が『争ハズシテ善ク勝フ』である。人が此の世に居て善をする惡をする、そんなこと一々言上しなくても高い處に居られて先刻御承知、沈黙して居らるゝが善く受け答へられる。是が『言ハズシテ善ク應ズ』である。招かなくても何時か來格まします。是が『召カズシテ來ル』である。坦然と平らかに無理がなく善く謀つて居られる。是か『坦然トシテ善ク謀ル』である。天は斯の様な工合ひのもので、下界の人間共には何をしてお出でになるか分らないけれども、大きな網を張つて御座る。其の網の目が大まかなものだが、罪があつたが最後一匹残らず引つ掛けてしまふ。此の章はチト分り兼ねる處があるが、大意は殺すに果敢なのは天道に背いたものだといふ様に聞こえる。尙次ぎの章と參觀し章意を撰むことにしやう。○此の章の天も六十七章の如く主宰力を有す。

## 第七十四章

民不畏死。奈何以死懼之。若使民常畏死。而爲奇者。吾得執而殺之。執之敢。常有司殺者殺。夫代司殺者殺。是謂代大匠。劉夫代大匠。劉者。希者。

不傷其手矣。

民、死ヲ畏レズンバ奈何ゾ死ヲ以テ之ヲ懼サン若シ民ヲシテ常ニ死ヲ畏レシメ而シテ奇ヲ爲ス者ハ吾執ヘテ之ヲ殺スコトヲ得バ孰カ敢テセン。常ニ司殺者有リテ殺ス夫レ司殺者ニ代リテ殺ス是ヲ大匠ニ代リテ劉ルト謂フ夫レ大匠ニ代リテ劉ル者其ノ手ヲ傷ケザル有ルコト希ナリ。

前章を承けて濫りに人を刑に處するを戒める。國民が死といふことを畏れないならば、何うして殺死で之を懼れさすことが出來よう。さうなつたら最早おしまひぢや。畏るべき殺死を畏れぬ様になつた原因は何處にある、政刑が其處に至らしめたもの、民を此の極に迄突き落して置いて、そして悪い事をすれば處刑するぞと威かしたつて駄目だ。悪い事をすれば刑罰に觸れる位のことば百も承知二百も合點で遣つてゐるから何の利き目もない。若し又民が死を畏れるやうな純な處があり、吾又生殺の權を以て之に蒞んだならば、民何うして敢て奇をなして法を犯し刑に觸れやうぞ。民命は重いもの其の重い生命を斷つは司殺者があつて其の手で斷つのである。司殺者は天だ。天罰のものだ。夫れ其の天に代つて殺すとすると天意に叶ふやうにせずばならぬ。前章で言つて置いた通り天の意は測り兼ねるそれを顧慮せず遣るのは何のことはない素人が大工の眞似をして木を切るやうなものだ。馴れぬ手付きで斧斤を弄ぶと手に怪我させずに濟むことは希で、生兵法大疵の基だ。奇は善くない意當り前の行ひでないこと○劉は音タタ切ること。

第七十五章

民之飢以其上食稅之多是以飢民之難治以其上之有爲是以難治民之輕死以其求生之厚是以輕死夫唯無以生爲者是賢於貴生

民ノ飢ウルハ其ノ上ニ稅ヲ食ムモノ、多キヲ以テ是ヲ以テ飢ウルナリ民ノ治メ難キハ其ノ上ノ爲ス有ルヲ以テ是ヲ以テ治メ難キナリ民ノ死ヲ輕ンズルハ其ノ生ヲ求ムルコトノ厚キヲ以テ是ヲ以テ死ヲ輕ンズルナリ。夫レ唯生ヲ以テ爲ス無キ者は生ヲ貴ブニ賢レリ。

國民が飢ゑる、何も珍らしいことぢやない。上に稅で食つて行く者が多いから飢ゑるのぢや。民の收入には限りがあつて上の誅求には限りがない。無慘な世の中ぢや。民の治め難いのは上の者がコセ／＼小ざかしき智慧を絞つて何か施設するから、民の方でも之に眞似て様々の策略をするやうになつて事面倒となり、遂に難治のものとなる。民が死を屁とも思はない原因は、身分不相應に派手に遣りたいといふ處から、名利に醒醒して慾にアタマの割れるも知らない、そんなアタマだから死を輕んずることになる。だから身の奉養を厚くしないのが、却つて生活生活と騒ぎ廻つて此の生を貴ぶより勝る結果となるのぢや。實は勝ること。此の生は生活、生活には衣食住の三を要す、其の程度を高くするのが厚生。老子の生活は今日云ふ原始的生活に近い。

第七十六章

人之生也柔弱其死也堅強萬物草木之生也柔脆其死也枯槁故堅強者死之徒柔弱生之徒是以兵強則不勝木強則共強大處下柔弱處上

人ノ生ル、ヤ柔弱ニ其ノ死スルヤ堅強ナリ萬物草木ノ生ズルヤ柔脆ニ其ノ死スルヤ枯槁ナリ。故ニ堅強ナル者ハ死ノ徒柔弱ナル者ハ生ノ徒ナリ。是ヲ以テ兵強ケレバ則勝タズ木強ケレバ則共ル。強大ハ下ニ處リ柔弱ハ上ニ處ル。

吾が柔を尙び強を嫌ふのを物に就いて見て呉れ。人が生れる時は柔弱のもの。死ぬ時は所謂死體硬直草木に至る迄其の生ずる時は柔脆のもの。死ぬ時は枯れボツ杵ぢや。故に堅強は死の連中、柔弱は生の仲間ぢや。是を以て兵士が武勇一遍で其の勇に驅られてはやり進むやうだと、戦争には勝てない。木もニベなく餘り堅いとボツクリ折れる。見なさい木の強大な部分は根幹であらうがそれは下の方に居り、柔弱な枝葉は上の方に居る、面白い姿ぢや。其の字は折の字に易えて見るがよい。

第七十七章

天之道其猶張弓乎高者抑之下者舉之有餘者損之不足者補之天之道損有餘而補不足人之道則不然損不足以奉有餘孰能有餘以

奉<sup>〇</sup>天<sup>〇</sup>下<sup>〇</sup>唯<sup>〇</sup>有<sup>〇</sup>道<sup>〇</sup>者。是以聖人爲而不恃。功成而不處。其不欲見賢耶。

天ノ道ハ其レ猶弓ヲ張ルガゴトキカ高キ者ハ之ヲ抑ヘ下ナル者ハ之ヲ擧ゲ餘リ有ル者ハ之ヲ損シ足ラザル者ハ之ヲ補フ。天ノ道ハ有餘ヲ損シテ而シテ不足ヲ補フ人ノ道ハ則然ラズ不足ヲ損シテ以テ有餘ニ奉ズ孰カ能ク餘リ有ツテ以テ天下ニ奉ゼン唯有道者ノミ。是ヲ以テ聖人ハ爲シテ恃マズ功成リテ處ラズ其レ賢ヲ見スコトヲ欲セザル耶。

天道は丁度弓を張るやうだと云へる。弦を張らない弛めてある弓は、箭が上の方にあつて箭が下の方に向つて居る。今弦を張ると箭が下の方を向き箭が上の方を向く（實物を見ないと腑に落ちぬが）天道が有餘を損する趣は其の箭を抑へて下げしめるやうだし、不足を補ふ趣は其の箭を擧げて高からしめるやうだ。箭は中央の持つ處、筋は弓頭。天道は平均を好むので高い者は抑へ付け下の者は引き上げ、餘りある者から取つて足りない者を補ふものだ。天道は斯様であるのに人間の遣り方はさうでないアベコベだ。不足してゐる者から取り上げて餘る程ある者に進上させてゐる。民ほど割の悪いコケの者はない。汗水垂らして働いた所の實入りは重い税に取られてしまふ。何者か能く其の有餘を損して以て天下不足の民に奉ずることが出来るぞ。それは只有道者其の人である。是を以て『聖人ハ爲シテ恃マズ功成リテ處ラズ其レ賢ヲ見ハスコトヲ欲セズ』となる。此の思想はモウ分つて居る。要するに皆謙下の徳になる。

第七十八章

天下柔弱莫過於水。而攻堅強者莫之能勝。以其無以易之也。弱之勝強。柔之勝剛。天下莫不知。莫能行。是以聖人云。受國之垢。是謂社稷主。受國之不祥。是謂天下王。正言若反。

天下ノ柔弱ハ水ニ過グル莫シ而ルニ堅強ノ者ヲ攻ムレバ之ニ能ク勝ル莫シ其ノ以テ之ヲ易ルコト無キヲ以テナリ。弱ノ強ニ勝チ柔ノ剛ニ勝ツハ天下知ラザル莫シ能ク行フモノ莫シ。是ヲ以テ聖人云フ國ノ垢ヲ受ク是ヲ社稷ノ主ト謂ヒ國ノ不祥ヲ受ク是ヲ天下ノ王ト謂フト。正言ハ反スルガ若シ。

四十三章で水の徳は説いてある。天下の柔弱水に過ぎたものはよもあるまい。其の至柔の水の働きは實におそろしい。彼の大石巨巖の堅強を攻める、今日言つたら水蝕作用だが、どんな堅固のもので水勢には勝てるものでない。何故水がさう強いかといふと、水は至柔のものだが之を破ることの出来ぬものであるからだ。水は力を以て何うすることもならぬ始末におへぬもの、それが強いのだ。四句はよし。是を以て聖人の云ふに『國ノ垢ヲ受ク是ヲ社稷ノ主ト謂ヒ、國ノ不祥ヲ受ク是ヲ天下ノ王ト謂フ』とある。垢は汚穢の物、水でいはず江海はどの様な汚濁の水でも受け容れる、六十六章の百谷の王の語と参照。不祥は不浄などの意に見て、水の中には色々の腐敗した物があるが、其の不浄の水を鹽花など號して神に供へる。神様は何とも小言仰せられずに御受になる。之を體すれば天下の王たり社稷の主たる事が出来ること、何と名言のものぢやないか。兎角正言は世俗の者の言葉とは反對に出て居る。易の字は古時夷と通じてヤブルの意だと晴軒云ふ今之に従ふ。

和大怨必有餘怨。安可以爲善。是以聖人執左契而不責於人。有德司契。無德司徹。天道無親。常與善人。

大怨ヲ和グレバ必ず餘怨有リ安ンゾ以テ善ト爲ス可ケン。是ヲ以テ聖人ハ左契ヲ執ツテ人ニ責ラズ有德ハ契ヲ司ドリ無德ハ徹ヲ司ドル。天道ハ親無ク常ニ善人ニ與ス。

此の章は何を云ふのかスメない。今晴軒の説に従ふと、大怨とは一人一位の怨恨でなく天下一般の怨みだ。是は重く取り立てられる税を指していつたものと見る。日頃重く取り立て、居るから怨みを買つてゐる、其の怨みを何かの時に和らげる、即凶作の時などに倉の戸を明け、施米をする、一時は其の御蔭で餓死を免れて感謝するのだが、扱又候さういふ場合に十分手當てをしないと復怨される。日頃の遣り方が怨を残すやうにやるので、何うして善政と云はれよう。是を以て聖人は誅求厚斂して自分の欲を充すなどはせぬ『左契ヲ執ツテ人ニ責ラズ』と云つて、契は契約であるが此處では木契、即木片に文字を認め、それを左右の二つに割り後日の證據とする。貸借關係でいふならば債權者が右の方の木片（右契）を預つて置き、左の方の木片（左契）を債務者に渡して置くマア我が國の借用證書。それを比喻に取つて人を賑郵する意に持つて行くのである。返済すべき義務ある左契を聖人が執る。それでは督責することが出来ないばかりでなく、却つて自分の腹を痛めなければならぬ事になる。即民より濫りに取り立てないで却つて施與をするに云ふ譬へ『有德ハ契ヲ司ドリ無德ハ徹ヲ司ドル』

此の契も今あつた契で左右の兩契を引き合せてシツクリ合へばそれが儘の證據物、ソコデ契合などの語がある。有德の君子は民心と合致するを務めるといふ譬へ、又徹は剝ぎ取る意だから無德非道の君は民情などは構はない、遣らすブツタクリのものだとの譬へになる。結語は訓戒になる是はモウよからう』司は其の事を主として重く見て居るやうな意。

## 第八十章

小國寡民。使有什伯人之器。而不用。使民重死而不遠徙。雖有舟輿。無所乘之。雖有甲兵。無所陳之。使民復結繩而用之。甘其食。美其服。安其居。樂其俗。鄰國相望。雞犬之聲相聞。民至老死不相往來。

小國寡民人ニ什伯スルノ器有ルモ而モ用キザラシメ民ヲシテ死ヲ重ンジテ遠ク徙ラザラシメバ舟輿有リト雖モ之ニ乗ル所無ク甲兵有リト雖モ之ヲ陳スル所無カラシム。民ヲシテ復タ繩ヲ結ビテ之ヲ用キシメバ其ノ食ヲ甘シトシ其ノ服ヲ美ナリトシ其ノ居ニ安ンジ其ノ俗ヲ樂ミ鄰國相望ミ雞犬ノ聲相聞コエ民老死ニ至ルマデ相往來セザラン。

此は老子の理想とする太古淳樸の境宛然たる桃花源。知らず陶淵明之を憧憬するか、するであらうとも……小國寡民は原始に近い時は皆さうである。國土が小さく住民少なければ十人百人に勝れるやうな器量人があつても、其の智能を運用させる所がない、さうした材智の入用がない。民は一様に淳樸

で世間をへ、口付き廻つて法律の網を潜り抜けるやうなスレ、晒しでなく、死を重んじて居村から遠く外へ出ない。苟も然らば『舟輿アリト雖モ之ニ乗ル所ナク、甲兵アリト雖モ之ヲ陳ヌル所ナシ』で、交通文明の利器は一切入らぬ。民をして結繩の昔に立ち歸らせ、己が作つた食を山海の珍味となし、女房の織つた布を綺羅錦繡と喜び、生れた自村に安堵し其の村の風俗を樂み……老死に至る迄世間と往來しない。優なる哉游なる哉。現代の淺間敷く空おそろしきを見るにつけ昔が偲ばれる』什伯人之器は人に十倍百倍する程の智能○結繩は文字の制作が起らぬ時代に行はれた所では周知の事。

### 第八十一章

信言不美、美言不信、善者不辯、辯者不善、知者不博、博者不知、聖人不積、既以爲人己愈有、既以與人己愈多、天之道利而不害、聖人之道爲而不爭。

信言ハ美ナラズ美言ハ信ナラズ善クスル者ハ辯セズ辯ズル者ハ善クセズ知ル者ハ博カラズ博キ者ハ知ラズ。聖人ハ積マズ既ニ以テ人ノ爲メニシテ己愈有リ既ニ以テ人ニ與ヘテ己愈多シ。天ノ道ハ利シテ而シテ害セズ聖人ノ道ハ爲シテ而シテ争ハズ。

善者とは不言實行の意。知者とは道を知る者、道は大なるものだが約めてみれば一。聖人は自分一人金銀財寶を溜めては置かない、散じて人の爲めに使ひ民に施し與へる。施し與へてしまへば我が手許

には何にもないことになるがさうでない、丁度フイゴの中の風のやうなもので、愈々益々多くなるばかり、妙なものぢや。是は敢て金銀財寶とばかり見ないで、更に至大な寶があると想到せよ。天の道は萬物を利しこそすれ害することはせぬ。聖人の道は爲して争はない。天の道は誠に廣大なものであるぞよ。是を以て八十一章の總締めの言葉とする、至つて平允也。

本講話は五月二十七日から初め十三回を重ねたる今夕で完了しました。全體かゝる哲學の書を十回位で片付けやうとするのは無理な遣り方ですが、すべて前口上で述べた主旨で遣つたのですから御承認の筈。講終るに臨み御清聴ありしことを感謝致します。

昭和四年十月七日

觀海しるす

講話餘録

○文明の語の出所

文明の語の一番古いのは尙書の舜典であらう。其の文に、

曰若稽古帝舜曰重華協于帝。濬哲文明。溫恭允塞。玄德升聞。乃命以位。

と見え、周易の象傳中には數處ある。

同人于野。亨利涉大川。乾行也。文明以健。中正而應。君子正也。唯君子爲能通天下之志。

大有柔得尊位大中。而上下應之。曰大有。其德剛健而文明。應乎天而時行。是以元亨。

賁亨。柔來而文剛。故亨。分剛上文。柔故小利。有攸往。天文也。文明以止。人文也。觀乎天文。以察時變。觀乎人文。以化成天下。

明入地中。內文明而外柔順。以蒙大難。文王以之。

因みに、文が文章・文理分り易く云へば條理・アヤであること贅する迄もないが、明はそれを形容するので光明の意になる。史家のよく書く政治の評に『典章文物燦然トシテ明ラカナリ』など、全く此の文明を引き伸ばした語である。舜典と象傳の場合は個人の上に用ゐたもので、孰れも其の人の徳を稱讚するには違ひないけれど、明を直ちに明德と見る某氏の説は允當の解ではない。

○未亡人

近年この未亡人をさも敬語でもあるかの様に平氣で使ひ、又悪い顔もせず甘受してゐるが實におかしい。是は左傳の莊公二十八年の記事中の註に『婦人既ニ寡ニシテ自ラ未亡人ト稱ス』とあつて『夫に死に後れた者』といふやうな、いとつゝましやかな又痛ましい言葉で、寡婦の自稱である。試みに是の三字を極めて下司の言葉に譯して見給へ、とても堪つたものでない。

○ごとも……からぬ……でもが

ごとももの用方も近年一變した。又『無理からぬ』のからぬは何處の言葉でせう『誰でもが』も思へばおかしい言ひ様。(昭和四年六月二十九日)

x

x

x

本會記要

○昭和四年八月四日沼津中學同窓會と協同主催の下に大講演會を沼津中學の講堂で開いた講師は法學博士大川周明氏『日本の理想の把握』といふ演題にて二時間餘に亘る熱辯聽衆に多大の感動を與へられた。

○雜誌『詩林』八月號の記事中に本會の講話印刷物に就き左の如き評があつた。

此の書は静岡縣沼津市斯道會の印行にかゝるものにて會員以外には是を頒たす會の内容は純然たる漢文學會にて同地の有志相謀り斯學扶植の目的にて池谷觀海先生を聘し極めて通俗的に漢籍の講話を乞ひ印刷刊行せしものなれば婦女子供と雖容易に解し得らるゝを以て本書の特色となす。(以下略す)

○奈良犬塚悌士氏は市川鈞三郎氏を紹介せらる。(八月二十七日)

○甲州分部盛之氏の來書中に『講演集難有拜讀他に索めて得難き御講義啓發を蒙る所多く感謝に不堪候』云云とありたり。(九月二十二日)

○本會理事高田嘉應氏は今回維持會員七名正會員十一名を紹介せられた孰れも沼津中學出身の人人である。

○前號發表後の正會員は左の如し。

沼津 和田傳太郎 大阪 野口 一三 東京 豊田 穰 漢路 藤谷哲太郎 静岡 村越 金造

大阪 光畑 慈久 大阪 市川鈞三郎 岡山 長谷川蘭石 徳嶋 藤井 省三 大阪 里見 樂窩  
沼津 美和勝次郎 沼津 柴原 光郎 和歌山 久徳 清吉 東京 芹澤 眞一 東京 中村 倍男  
東京 向坂 丈吉 東京 布川角左衛門 横濱 小林 源次 東京 渡邊 應良 東京 渡邊 貞治  
東京 鹽川 壽介 東京 芹澤光治郎 東京 加藤柳次郎 東京 井澤 種夫 大阪 野口 蘆溪

○本會を維持する所の維持會員として新に左の諸氏の加盟を得ました。

大阪 桃井 直道 東京 大出 俊夫 東京 鈴木新太郎 東京 橋爪 惠  
東京 浅倉銀四郎 東京 六車 修 東京 後藤 捷三 東京 西 嘉郎

x

x

x

本會既刊の書目

斯道會第一回講演大要……………昭和三年八月

五經一夕談……………同 九月

中庸常識談……………同 十月

斯道會講話……………(第四輯)……………昭和四年一月

通俗講話四種……………(第五輯)……………同 四月

孔子日常生活……………(第六輯)……………同 七月

俗語新老子……………(第七輯)……………同 十月

次號豫告

第八輯は孔門の仁の研究を主とし文章物數篇を附す

324  
419

昭和四年十月十五日印刷  
昭和四年十月二十日發行

【非賣品】

著者 池谷 鏡太郎  
靜岡縣津島市下宿三三五四番地

發行人 高田 嘉應  
靜岡縣東郡清水町中一番地

印刷者 河田 貞次郎  
岐阜縣岐阜市七軒町十二番地

印刷所 西濃印刷株式會社  
岐阜縣岐阜市七軒町十一番地  
 岐阜支店



終

